

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第319集

高槻市

成合3号墳・成合4号墳

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022年8月

公益財団法人 大阪府文化財センター

高槻市

成合3号墳・成合4号墳

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



調査区全景〔南から〕

序 文

成合3号墳・4号墳が所在する高槻市は大阪府の北東部に位置します。市の北部には大阪府の名勝に指定されている摂津峡や、山岳寺院が点在する北摂の山々が連なり、多くのハイカーや観光客で賑わっています。一方、市の南部には低地が広がっており、大阪湾へと注ぐ淀川が流れ、古代山陽道や西国街道が縦断することから、古来より大阪と京都を結ぶ水上・陸上交通の要衝として栄えてきました。近代以降は鉄道や高速道路網が整備され、人流や物流の大動脈としての役割がますます重要視されており、現在も新名神高速道路の建設が進められています。

成合3号墳・4号墳は、高槻市成合に所在する金龍寺旧境内跡内で新たに見つかった古墳ですが、周辺には多くの古墳の存在が知られています。調査地の南側にある安満山一帯には古墳時代後期の6世紀後半から7世紀にかけて40数基もの横穴式石室墳がつくられた安満古墳群や10数基からなる梶原古墳群が分布しています。一方、調査地の西側の成合谷周辺には古墳時代終末期に属する成合地獄谷古墳群や成合西王寺山古墳群といった小規模な古墳群の存在が明らかになりました。それ以外にも古墳時代後期の成合1号墳や終末期の成合門前下古墳の調査が行われてきました。

今回調査を行った成合3号墳・4号墳は、古墳時代終末期に属する横穴式石室墳です。2基とも副葬品はみつかりませんでした。墳丘や石室の構築方法がよくわかる例として、成合地域における古墳群のあり方を検討するうえで重要であるばかりか、律令国家へと変動する最中につくられた古墳として、高槻の歴史を解明するための貴重な成果といえます。

末筆になりましたが、調査を実施するにあたり大阪府教育庁、高槻市街にぎわい部文化財課、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所をはじめ、関係各位の皆様には多大なご協力とご配慮を賜りました。深く感謝申し上げます。

令和4年8月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 坂井秀弥

例 言

1. 本書は、大阪府高槻市成合地内に所在する成合3号墳・成合4号墳（金龍寺旧境内跡）の発掘調査報告書である。調査名称は「金龍寺旧境内跡（古墳）21-1」とした。

今回の調査で新たに発見された古墳については、高槻市街にぎわい部文化財課により成合2号墳・成合3号墳・成合4号墳という名称が与えられた。

2. 調査は、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所が進める「高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業」に先立ち、西日本高速道路株式会社の委託を受け、大阪府教育庁文化財保護課の指導・管理のもと、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。

現地調査および出土遺物整理、並びに報告書作成にかかわる受託契約名称・契約期間等は以下のとおりである。

【現地調査】

委託契約名称：高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（高槻市域）その10

委託契約期間：令和3年7月21日から令和4年2月25日まで

現地調査期間：令和3年9月1日から令和4年1月31日まで

【遺物整理】

委託契約名称：高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理（高槻市域）その3

委託契約期間：令和4年2月1日から令和4年8月31日まで

遺物整理期間：令和4年2月1日から令和4年5月31日まで

印刷製本期間：令和4年6月1日から令和4年8月31日まで

令和4年8月31日に本書の刊行をもって一連の事業を完了した。

3. 本調査の実施体制は以下のとおりである。

令和3年度

事務局次長 市本芳三、総務企画課長 亀井 聡、調査課長 岡戸哲紀、
調査課長補佐 佐伯博光、主査 後藤信義、技師 田中秀弥

令和4年度

事務局次長 市本芳三、総務企画課長 亀井 聡、調査課長 佐伯博光、
調査課長補佐 後藤信義、技師 田中秀弥

4. 遺物写真撮影は、中部調査事務所写真室が行った。

5. 調査の実施にあたっては、以下の諸氏、諸機関にご指導、ご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を表す（順不同、敬称略）。

市川 創・北川咲子・土屋みずほ・山上 弘（大阪府教育庁文化財保護課）、
早川 圭・三好祐太郎（高槻市街にぎわい部文化財課）

6. 石材鑑定に関しては小倉徹也氏（大阪市教育委員会文化財保護課）に依頼し、川端清司氏（大阪市立自然史博物館館長）、佐藤隆春氏（大阪市立自然史博物館外来研究員）に貴重なご意見をいただいた上で、これを行った。

7. 本書の執筆は目次と文末に記した。なお、第4章の古墳の石材鑑定に関しては、大阪市教育委員会小倉徹也氏から玉稿を賜った。編集は、後藤と協議の上、田中が行った。

凡 例

1. 遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用した。図中の標高は全て（T.P.）からのプラス値であり、単位は全てmである。また、T.P.+については省略した。
2. 発掘調査では世界測地系（測地成果 2000）に基づく平面直角座標系第VI系を使用して測量を行った。遺構図の座標表記は全てmで記し、方位は全て座標北で示す。なお、座標北に対して磁北は西に7°25′、真北は西に0°12′33.8″振る。
3. 現地調査および整理作業は、文化財センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠して行った。
4. 地層断面図で使用した土色は、小田正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2005年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
5. 遺構名は、調査区・遺構面に関わらず全て通しの遺構番号を付し、遺構番号→遺構種類の順で遺構名を記載している。（例：「1溝」・「3土坑」など）
6. 遺構図における断面位置は、図面上に「—」によってその位置を示した。個別の遺構縮尺は40分の1を基本とするが、遺構の規模に応じて縮尺率を変更しているものもある。図中のスケールを参照されたい。
7. 遺物図の縮尺は、土器を4分の1を基本とするが、遺物によっては縮尺率を変更しているものもある。金属製品は2分の1とした。図中のスケールを参照されたい。土器類の挿図の断面は、黒塗りで表現した。
8. 本書で示している右側壁と左側壁は、奥壁から開口部を見た左右を表している。
9. 掲載遺物は全て通し番号をつけた。本文・図版・一覧表・写真図版は全て一致する。なお、遺物写真の内、写真図版の鉄釘に関しては2分の1の大きさで掲載しており、保存処理以前の写真である。他は、縮尺を統一していない。
10. 高槻市成合での当センターによる一連の調査成果について本文中で触れることがあるが、参考文献では触れていない。具体的な内容については、下記の報告書が刊行されており、参照されたい。

金光正裕 2012『金龍寺旧境内跡』（公財）大阪府文化財センター調査報告書第224集

廣瀬時習 2013『成合1号墳』（公財）大阪府文化財センター調査報告書第234集

笹栗拓・伊藤武・金光正裕 2014『成合遺跡・金龍寺旧境内跡2』（公財）大阪府文化財センター調査報告書第251集

笹栗拓・金光正裕・降幡順子『成合地獄谷遺跡・成合遺跡2・金龍寺旧境内跡3』（公財）大阪府文化財センター調査報告書第260集

合田幸美・信田真美世 2021『金龍寺旧境内跡4』（公財）大阪府文化財センター調査報告書第310集
11. 出土遺物の年代観や器種分類については、特に断りのない場合は下記の文献に依拠した。

歴史土器研究会 2019『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所

神野恵 2014「第3章出土遺物 3-1-3 土器類」『平城宮発掘調査報告XVI 兵部省地区の調査』奈良文化財研究所学報第70冊

独立行政法人奈良文化財研究所

目 次

巻頭図版

序文・例言・凡例

第1章 調査に至る経緯と経過・調査の方法	1
第1節 調査に至る経緯	(後藤) 1
第2節 調査の経過	(後藤) 2
第3節 調査の方法	(田中) 3
第2章 位置と環境	(田中) 6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3節 成合地区周辺の古墳	11
第3章 金龍寺旧境内跡の調査成果	(田中) 14
第1節 調査成果の概要と基本層序	14
第2節 成合3号墳(1区)	16
第3節 成合4号墳(3区)	30
第4節 2区の調査	42
第4章 成合3・4号墳の石材について	(小倉徹也) 44
第5章 総括	(田中) 46

写真図版

報告書抄録

奥付

挿 図 目 次

図 1	今回の調査箇所と確認調査箇所	2	図 24	1 溝 平面図・遺物出土状況図・断面図および出土遺物	29
図 2	地区割りの方法	4	図 25	3 区 平面図	30
図 3	調査地の地区割り	4	図 26	4 号墳 平面図	31
図 4	調査地周辺の地質区分	6	図 27	4 号墳 墳丘断面図	32
図 5	調査地周辺の地形	7	図 28	4 号墳 石室断面図①	33
図 6	調査地周辺の遺跡	8	図 29	4 号墳 石室断面図②	34
図 7	高槻市成合 埋蔵文化財調査地全体	12	図 30	4 号墳 横穴式石室①	35
図 8	地層断面柱状図	14	図 31	4 号墳 横穴式石室②	36
図 9	調査区全体平面図	15	図 32	4 号墳 石室掘方平面図	37
図 10	1 区 平面図	16	図 33	4 号墳 床面遺物出土状況図	38
図 11	3 号墳 現況測量図	17	図 34	4 号墳 出土遺物（奥壁側①）	39
図 12	3 号墳 平面図	18	図 35	4 号墳 出土遺物（奥壁側②）	40
図 13	3 号墳 墳丘・石室断面図	19・20	図 36	4 号墳 出土遺物（開口部側）	40
図 14	3 号墳 墳丘断面図	22	図 37	4 号墳 貼床除去後遺物出土状況図	41
図 15	墳丘東面列石断面図	23	図 38	4 号墳 出土遺物	41
図 16	墳丘東面列石平・立面図	23	図 39	2 区 平面図	42
図 17	開口部列石平・立面図	24	図 40	3～6 土坑平・断面図	43
図 18	開口部列石断面図	24	図 41	2 区 包含層出土遺物	43
図 19	3 号墳 横穴式石室	25	図 42	成合古墳群の立地	46
図 20	3 号墳 床面遺物出土状況図	26	図 43	成合 2 号墳 墳丘測量図	47
図 21	3 号墳 石室掘方平面図	27	図 44	成合周辺の後・終末期古墳の分布	48
図 22	3 号墳 出土遺物（奥壁側）	28			
図 23	3 号墳 出土遺物（開口部側）	28			

表 目 次

表 1	3 号墳 鉄釘計測表	51	表 2	4 号墳 鉄釘計測表	52
-----	------------	----	-----	------------	----

写 真 目 次

写真 1	チャート（赤褐色）：3 号墳	44	写真 7	チャート（白色）：4 号墳	45
写真 2	写真 1 の接写	44	写真 8	写真 7 の接写	45
写真 3	チャート（黒灰色）：3 号墳	44	写真 9	玄武岩：4 号墳	45
写真 4	写真 3 の接写	44	写真 10	写真 9 の接写	45
写真 5	チャート（灰色）：4 号墳	44	写真 11	閃緑岩：4 号墳	45
写真 6	写真 5 の接写	44	写真 12	写真 11 の接写	45

カラー図版目次

カラー図版

調査区 全景 [南から]

写真図版目次

写真図版1 1区 成合3号墳

1. 1区調査前全景 [南東から]

2. 1区全景 [南東から]

写真図版2 1区 成合3号墳

1. 3号墳 検出状況 [南東から]

2. 1区堆積状況 [南西から]

3. 3号墳 周溝西辺 [南から]

4. 3号墳 周溝北辺 [西から]

5. 3号墳 周溝東辺 [南から]

写真図版3 1区 成合3号墳

1. 3号墳 全景 [南から]

2. 3号墳 墳丘東面列石 [東から]

写真図版4 1区 成合3号墳

1. 3号墳 全景 [南東から]

2. 3号墳 開口部列石 [南から]

写真図版5 1区 成合3号墳

1. 3号墳 石室検出状況 [北から]

2. 3号墳 石室 右側壁① [南東から]

3. 3号墳 石室 左側壁① [南西から]

4. 3号墳 石室 右側壁② [南東から]

5. 3号墳 石室 左側壁② [南西から]

写真図版6 1区 成合3号墳

1. 3号墳 石室 奥壁 [南から]

2. 3号墳 石室 床面検出状況 [南から]

写真図版7 1区 成合3号墳

1. 3号墳 奥壁側 遺物出土状況 [南から]

2. 3号墳 開口部側 遺物出土状況 [南から]

3. 3号墳 石室内 堆積状況 [南から]

4. 3号墳 床面 断面 [南から]

5. 3号墳 墳丘断面 西半 [南から]

6. 3号墳 墳丘断面 東半① [南から]

7. 3号墳 墳丘断面 東半② [北から]

8. 3号墳 墳丘断面 北半 [南東から]

写真図版8 1区 成合3号墳

1. 3号墳 石室掘方検出状況 [南から]

2. 3号墳 石室掘方断面 西側 [南から]

3. 3号墳 石室掘方断面 東側 [南から]

4. 3号墳 石室掘方断面 北側 [西から]

5. 3号墳 石室掘方断面 南側 [北西から]

写真図版9 1区 成合3号墳・1溝

1. 3号墳 石室掘方 完掘状況 [南から]

2. 1溝 完掘状況 [北から]

3. 1溝 断面 北側 [南から]

4. 1溝 断面 南側 [南から]

5. 1溝 遺物出土状況 [南西から]

写真図版10 3区 成合4号墳

1. 3区調査前全景 [南東から]

2. 3区 全景 [南から]

写真図版11 3区 成合4号墳

1. 4号墳 検出状況① [南から]

2. 4号墳 検出状況② [北から]

3. 4号墳 検出状況③ [南から]

4. 4号墳 検出状況④ [西から]

5. 4号墳 検出状況⑤ [東から]

写真図版12 3区 成合4号墳

1. 4号墳 天井石除去後① [北から]

2. 4号墳 天井石除去後② [東から]

3. 4号墳 石室左側壁 [西から]

4. 4号墳 石室右側壁 [東から]

5. 4号墳 石室左側壁 [西から]

写真図版13 3区 成合4号墳

1. 4号墳 石室内 堆積状況① [南から]

2. 4号墳 石室内 堆積状況② [南から]

3. 4号墳 石室内 堆積状況③ [北西から]

4. 4号墳 石室内 堆積状況④ [南西から]

5. 4号墳 石室 床面検出状況 [北から]

写真図版14 3区 成合4号墳

1. 4号墳 奥壁周辺 遺物出土状況 [南から]

2. 4号墳 床面 遺物出土状況 [南から]

3. 4号墳 奥壁側 遺物出土状況① [北から]

4. 4号墳 奥壁側 遺物出土状況② [北東から]

5. 4号墳 開口部側側 遺物出土状況 [南から]

写真図版15 3区 成合4号墳

1. 4号墳 石室 貼床層除去後 [南から]

2. 4号墳 石室 貼床層除去後遺物出土状況〔南西から〕

3. 4号墳 貼床層 断面①〔西から〕

4. 4号墳 貼床層 断面②〔南から〕

5. 4号墳 断割断面〔南西から〕

写真図版 16 3区 成合4号墳

1. 4号墳 石室掘方 完掘状況〔南から〕

2. 4号墳 石室掘方断面 西側①〔南から〕

3. 4号墳 石室掘方断面 東側〔南から〕

4. 4号墳 石室掘方断面 西側②〔南から〕

5. 4号墳 石室掘方断面 北側〔西から〕

写真図版 17 2区 全景

1. 2区調査前〔北西から〕

2. 2区 全景〔南から〕

写真図版 18 2区 遺構

1. 3土坑 検出状況〔北西から〕

2. 3土坑 断面〔北から〕

3. 3土坑 完掘状況〔北から〕

4. 3土坑 被熱範囲〔北から〕

5. 4土坑 検出状況〔北から〕

6. 4土坑 断面〔南西から〕

7. 4土坑 完掘状況〔北から〕

8. 4土坑 被熱範囲〔北から〕

写真図版 19 2区 遺構

1. 5土坑 検出状況〔南西から〕

2. 5土坑 断面〔北から〕

3. 5土坑 完掘状況〔南西から〕

4. 5土坑 被熱範囲〔南西から〕

5. 6土坑 検出状況〔北から〕

6. 6土坑 断面〔北西から〕

7. 6土坑 完掘状況〔東から〕

8. 6土坑 被熱範囲〔北から〕

写真図版 20 1区 成合3号墳出土遺物

1. 3号墳奥壁側

2. 3号墳開口部側

写真図版 21 3区 成合4号墳出土遺物

1. 4号墳奥壁側

写真図版 22 3区 成合4号墳出土遺物／1区・2区・
3区 遺物

1. 4号墳開口部側

第1章 調査に至る経緯と経過・調査の方法

第1節 調査に至る経緯

今回の調査は、西日本高速道路株式会社 関西支社 新名神大阪西事務所(以下、西日本高速)が実施する高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線(以下、新名神高速道路)建設事業に先立って実施した、金龍寺旧境内跡の埋蔵文化財発掘調査である。

新名神高速道路は名古屋市から神戸市までを結ぶ路線延長 174kmの高速自動車国道である。名神高速道路などの先発路線との適切な交通機能分担の確保による交通渋滞の解消、災害や事故による交通規制時の代替え機能、さらに物流や観光の活性化を目指し、国土軸のダブルネットワーク機能としての充実と強化を図るために建設が進められており、現在では宝塚～高槻間が完成している。今回の調査は、八幡～高槻間における橋梁部からトンネルへ入る箇所の調査である。

高槻市内における計画路線には、周知の遺跡として弥生時代中期の高地性集落である成合遺跡をはじめ、梶原古墳群、梶原南遺跡、上牧遺跡などが存在する。

これら計画路線内にある埋蔵文化財の取扱いについては、大阪府教育委員会文化財保護課(現:大阪府教育庁文化財保護課 以下、府教育庁)と西日本高速と大阪府都市整備部茨木土木事務所との間で協議が重ねられ、府教育庁は調査が必要な範囲を指示するとともに財団法人大阪府文化財センター(現:公益財団法人大阪府文化財センター 以下、文化財センター)に対して、当該地区の調査を実施するよう指示した。平成 22(2010)年度には文化財センターによって高槻市成合・宮ヶ谷地区において試掘調査が実施され、金龍寺旧境内跡が新規発見の遺跡として登録された。また、平成 21(2012)年の調査(金龍寺旧境内跡 11-2)で古墳の可能性の高い遺構を検出し、同年6月に遺跡の範囲が拡大された。

平成 23(2011)年6月1日付で大阪府茨木土木事務所・西日本高速・文化財センターの三者間で委託契約を締結し、新名神高速道路建設事業と同時に主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス事業との同時施工に伴い発掘調査(金龍寺旧境内跡 11-1・2)を実施した。さらに、平成 24(2012)年6月に「金龍寺旧境内跡 12-1」、平成 24(2012)年7月に「金龍寺旧境内跡 12-2」、平成 25(2013)年6月に「金龍寺旧境内跡 13-1」の発掘調査をそれぞれ実施した。

本書に直接関わる事案としては、平成 28(2016)年1月13日付で府教育庁・西日本高速・文化財センターの三者で「新名神高速道路(八幡～高槻)の建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を取り交わし、平成 28(2016)年度から事業区間内の確認調査と本調査が開始された。

調査地の事業計画は、成合～梶原間のトンネル掘削に先立って、成合側のトンネルと橋梁が接続する位置に設定された。令和 2(2020)年10月に金龍寺旧境内跡において確認調査を行った結果、横穴式石室の可能性のある石列や古代の須恵器壺片が確認できた。この結果を受けて、西日本高速と文化財センターとの間で「高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(高槻市域)その 10」として発掘調査委託契約を取り交わし、標高 120m程度の丘陵 3 丘が調査範囲となった。

現地調査は、府教育庁の指導の下、文化財センターが金龍寺旧境内跡の発掘調査を行った。

第2節 調査の経過

現地調査は、令和3(2021)年9月1日より開始した。まず、9月6日に基準点測量を行った後、9月9日にドローンを使用した空中写真測量により現地地形測量を行い、詳細に地形を図化して古墳の範囲や状況把握に努めた。9月15日に1区から重機による機械掘削を開始すると同時に、古墳とその周辺については、人力により遺構面の検出を行って調査を進めた。1区については11月26日まで調査を行った。10月15日に2・3区の現況測量を行った後、成合4号墳がある3区を、続いて2区の機械掘削を行った。2区は12月19日に、3区については令和4(2022)年1月13日に調査を終了し、1月31日までは図面整理や台帳作成、写真整理といった基礎整理作業を行った。

なお、調査を進めていく中で、1区北側の一部は未買収地の周辺という理由から、また、成合2号墳が所在する4区については現段階で乗り込みが困難であることが判明し、府教育庁と西日本高速、文化財センターの三者で協議を行った結果、今回の調査対象から除外することとなり(図1)、令和4(2022)年2月21日付で、4月25日までの委託契約期間を、令和4(2022)年2月25日までとする変更契約を結んだ。なお、現地調査については令和4(2022)年1月31日で完了し、遺物や調査資料を中部調査事務所(東大阪市長田東1丁目9番16号)に移動して遺物整理作業に備えた。

遺物整理並びに発掘調査報告書印刷について、令和4(2022)年1月21日付で西日本高速と文化財センターで「高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理(高槻市域)その3」として発掘調査遺物整理委託契約を結び、現地調査に引き続き令和4(2022)年2月1

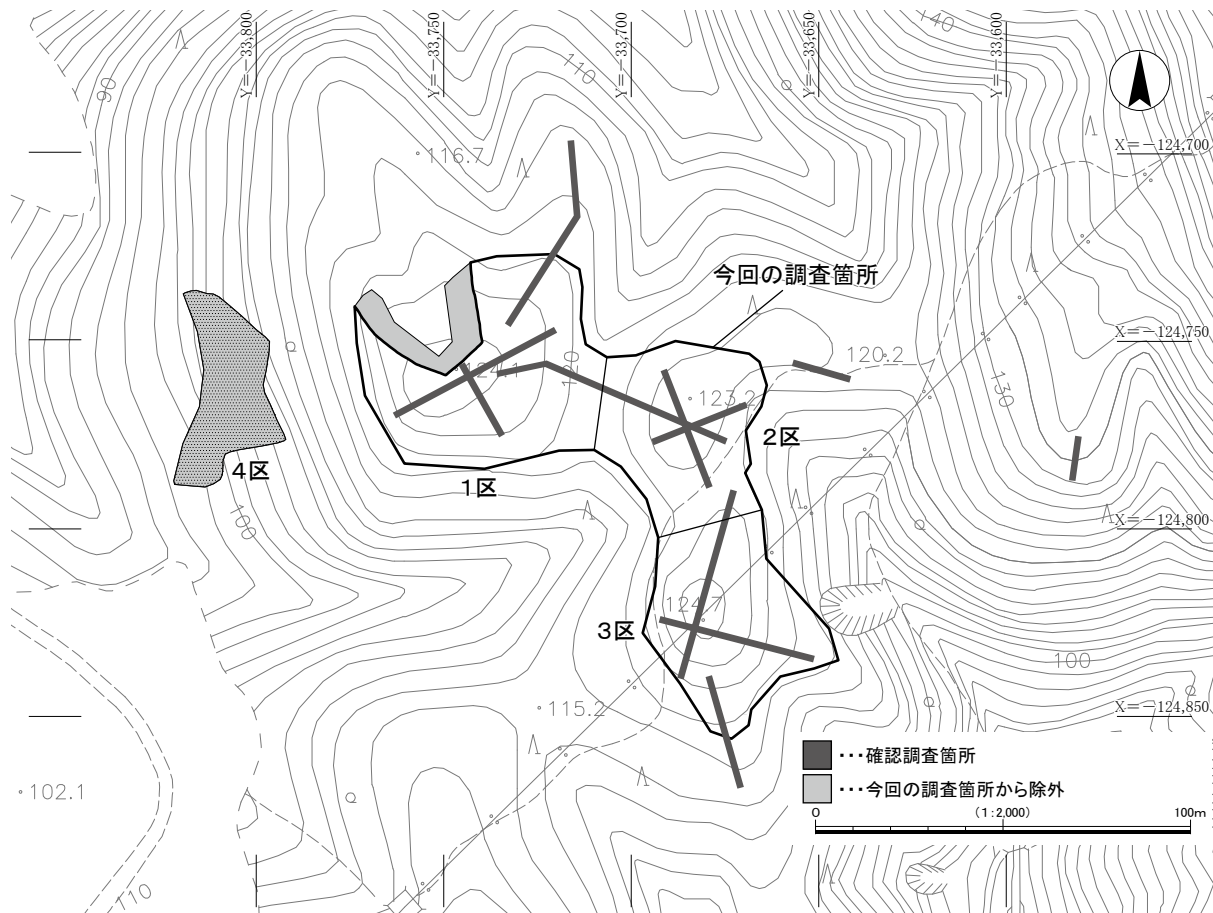


図1 今回の調査箇所と確認調査箇所

日から5月31日まで、中部調査事務所において遺物整理を行い、令和4(2022)年6月1日から8月31日まで印刷製本を行った。

令和4(2022)年8月31日に本書の刊行をもって事業を完了した。

(後藤)

第3節 調査の方法

現地調査と遺物整理は、文化財センターが定める『遺跡調査基本マニュアル』(公益財団法人 大阪府文化財センター 2010)に基づいて実施した。

調査区の設定

確認調査の結果をもとに、調査対象地の地形的なまとまりと樹木の伐採状況などを考慮して、北端の丘陵を1区、1区の南東に2区、2区の南に3区を設定した。

現地調査

樹木を伐採した後、調査地の現況地形をドローンによる空中写真測量を行い、現況測量図と現地にて地形観察を行って、古墳の規模や未確認の古墳の有無を確かめた。機械掘削は、職員の指示のもと、表土層をバックホウを用いて慎重に掘削した。ただし、古墳とその周辺や古墳の可能性のある箇所は、墳丘や石室を壊さないように、機械掘削を行わず人力で掘削を行った。その後、包含層をスコップや鋤簾などを用いて掘削し、基盤層上面にて遺構の検出を行った。検出後再度、ドローンによる空中写真測量を行った。

出土した遺物に関しては、帰属する調査区・層位・遺構ごとに地区割、出土年月日に基づいて取り上げを行い、当センター所定の遺物取り上げ用ラベルに出土情報を記載した。取り上げた遺物は、現場詰所で洗浄・注記の基礎整理作業を行った。遺物への注記は、「コンリュウジ 21- 1-登録番号」とした。遺物は、登録番号ごとにデジタルカメラで撮影して台帳を作成した。

なお、各地区の調査の要所では、府教育庁の現地立会を行い、確認・指示を受けて調査を進めた。

地区割り

世界測地系(測地成果 2000)に基づいた平面直角座標系第VI系に則り、地区割りを行った。地区割りの方法は、第I～VI区画に区画し、第III区画(100m×100m)と第IV区画(10m×10m)を最小区画とした(図2・3)。

図面作成

全体平面図の作成にあたっては、ドローンによる空中写真測量を業務委託し、100分の1、50分の1の掘削前の現況測量図と掘削後の遺構図、平面図を作成した。また、検出した遺構に対しては、トータルステーションとオートレベルを使用した測量と手ばかりによる遺構平面図・断面図などを必要に応じて、10分の1や20分の1などの縮尺で作成した。また、主要な遺構については FARO社製 Focus3Dや Agisoft社製 MetaShapeを用いた 3D測量も併せて行った。

写真撮影

デジタル一眼レフカメラ(Nikon D5300)で撮影を行い、必要に応じて PENTAX社製の6×7フィルムカメラ(カラーリバーサル・白黒)を用いて撮影した。また、ドローンを用いて上空からの撮影も行った。デジタル一眼レフカメラは、RAWデータ・JPEGデータで記録した。データは、HDDに保存し、Microsoft社製 Excelにて台帳を作成し、検索できるようにしている。6×7フィルムカメラで撮影し

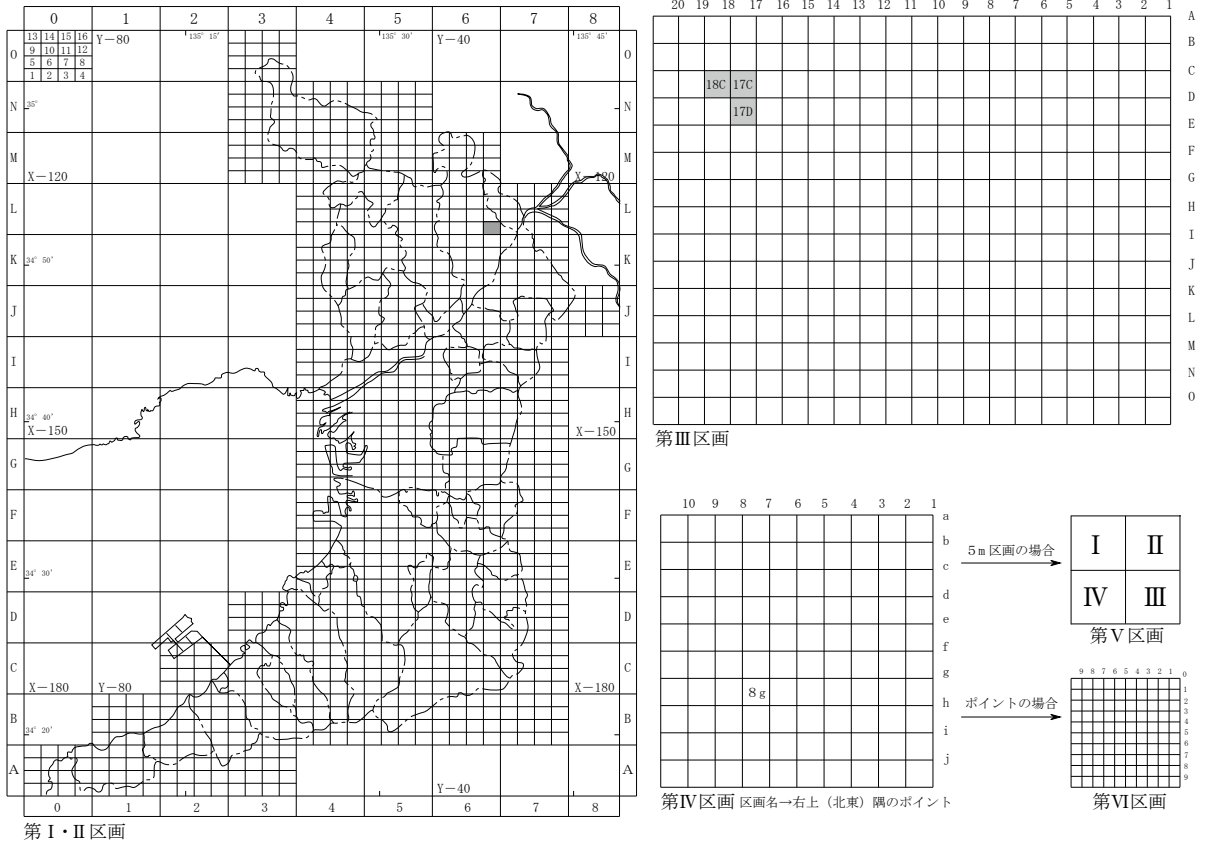


図2 地区割りの方法

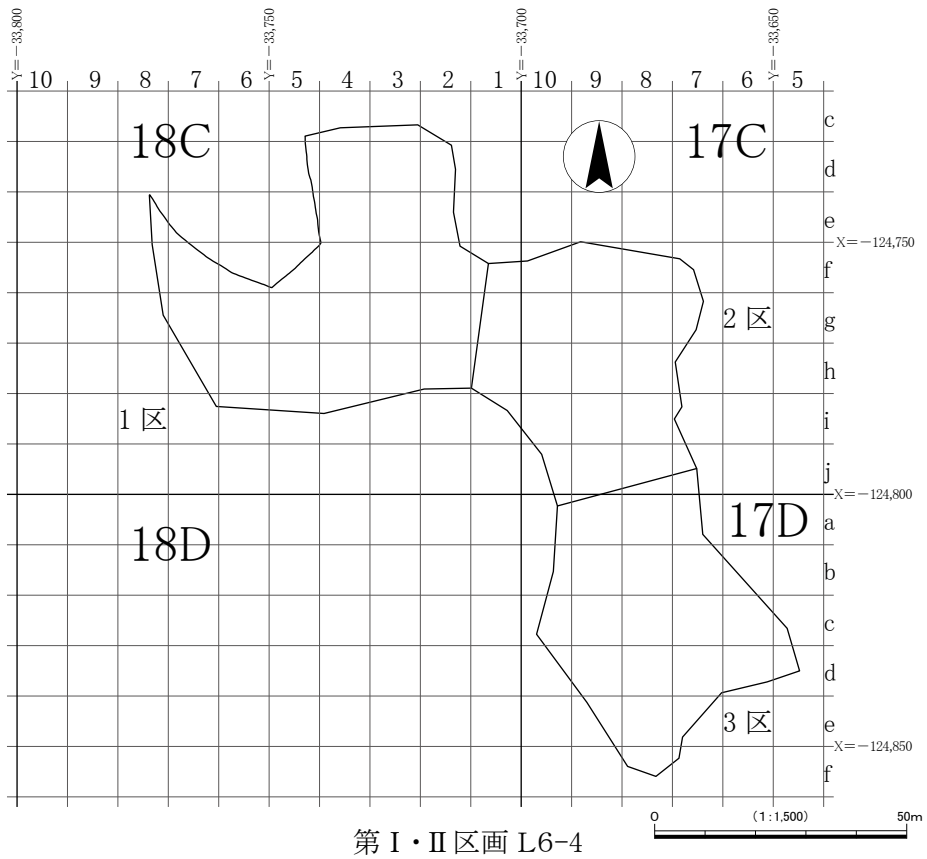


図3 調査地の地区割り

たものについては、ネガフィルム・ベタ焼・ポジフィルムをそれぞれアルバムに収納した。また、写真撮影と同時に動画撮影も併せて行った。撮影した動画は、編集して動画配信サイトにて調査成果の公開を行っている。

整理作業

現地作業終了後、中部調査事務所にて整理作業を実施した。整理作業では、遺構ごとに接着剤を用いた遺物の接合作業と並行して、遺跡を理解する上で重要な遺物のピックアップを行った。土器は、全体の形が復元できるものに関しては石膏復元を行った。ピックアップした遺物は、図化のために実測と必要に応じて拓本を採った。作成した実測図は、実測図番号を付して、Microsoft社製 Excelにて台帳を作成し、検索できるようにしている。

写真図版に掲載する遺物は、レイアウトを決めた後、中部調査事務所の写真室にて撮影を行った。撮影の後、RAWデータを現像して TIFFデータを作成した。遺構写真も同様に、写真台帳とアルバムから写真を選定し、レイアウトした後、TIFFデータを作成した。

遺物実測図と現地で作成した図面は、スキャナーで原図を取り込み、Adobe社製 Illustrator CC・CS 6を用いてデジタル化し、挿図を作成した。

報告書の執筆は、調査に至る経緯と経過・調査の方法、既往の調査や周辺の環境から、調査成果と出土した遺物に関する情報、石材鑑定について記述を進め、最後に調査の総括を執筆した。執筆した原稿と、作成した挿図、写真図版は Adobe社製 InDesign CCにより、編集や配置などを行った。

今回調査した 2基の古墳から出土した鉄釘については、脆弱で現状では状態を保つことが困難であるため府教育庁から全点保存処理をするように指示を受けた。令和 4 年 3 月から令和 4 年 8 月の期間で株式会社 文化財サービスに委託し保存処理を実施した。

なお、報告書に掲載した遺物と未掲載の遺物は、分別して収納を行った。そして、遺物番号順に並べてコンテナに収納して、収納棚に納めた。

(田中)

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

金龍寺旧境内跡が所在する高槻市は大阪府北東部に位置しており、京都市と大阪市の二大都市のほぼ中間地点に位置する。淀川の水運や「古代山陽道」（西国街道）、JR東海道本線と東海道新幹線、阪急電鉄京都線、名神高速道路などの陸運を中心に、大都市大阪のベッドタウンとして発展してきた。今では人口35万人を超え、市は平成15(2003)年4月1日に中核市へ移行した。

市域は、東西約10km、南北約22kmと南北に広く、北を京都府亀岡市・京都市、東を大阪府島本町・枚方市、西を寝屋川市・摂津市、南を茨木市と接する。

高槻市の地形は、北半を丹波高地から北摂山地に連なる山並みと、南半を標高10m以下の淀川低地によって構成される。高槻市の中央部は標高30～200mの高槻丘陵と、その南に標高10～30mの富田台地が舌状に張り出す。北摂山地からは市の中央を芥川、その東を檜尾川が南流し、淀川に注ぐ。檜尾川の中流域では、成合谷などの谷底平野が開き、小規模な扇状地が広がる(図5)。

高槻丘陵は新生代第四紀に形成された大阪層群が主体をなし、安満山周辺は古生代ペルム紀から中生代三畳紀にかけて形成された高槻層や本山寺コンプレックス、出灰コンプレックスで構成される(図4)。成合谷の中央を流れる檜尾川の上流域は、支流である西檜尾川・東檜尾川・地獄谷川・金龍寺川などに分流する。金龍寺旧境内跡は、成合谷の東にある標高30～180mの丘陵上に位置しており、高槻層と本山寺コンプレックス上にあたる。

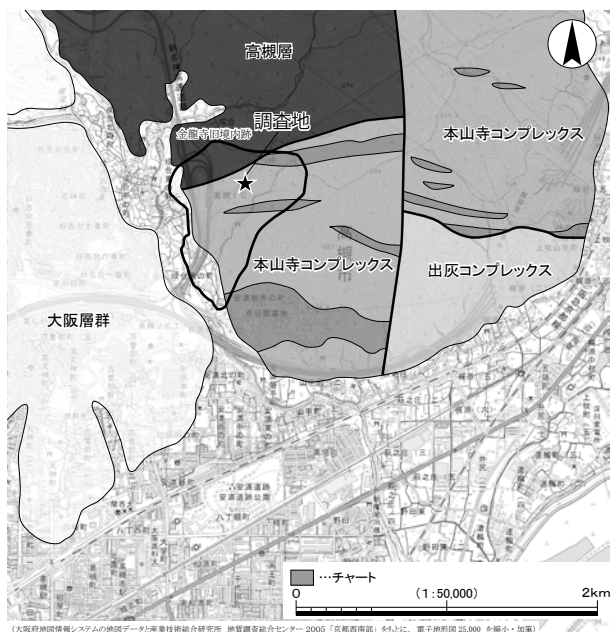


図4 調査地周辺の地質区分

第2節 歴史的環境

金龍寺旧境内跡周辺には、弥生時代の大規模な集落跡である安満遺跡や、我が国最大級の環濠をもつ高地性集落の古曾部・芝谷遺跡、「青龍三年」銘の入った鏡が出土した安満宮山古墳など学史的にも著名な遺跡が点在している。ここからは、高槻市を中心に代表的な遺跡を時代ごとに概観していく(図6)。

旧石器時代～縄文時代 富田台地に立地する郡家今城遺跡・郡家川西遺跡・津之江南遺跡からは、後期旧石器時代のナイフ形石器や搔器、舟底形石器など多様な石器が出土している。中でも郡家今城遺跡からは、瀬戸内技法による国府型ナイフ形石器などがまとまって出土している。

縄文時代には、早期から中期に位置付けられる遺跡は非常に少なく、塚穴遺跡・天神山遺跡から中期の船元式の深鉢が出土しているのみである。後期になってようやく、富田台地の縁辺部や芥川扇状地に



図5 調査地周辺の地形



(大阪府地図情報システムの地図データをもとに、電子地形図 25,000を縮小・加筆)

- | | | | |
|-------------------|--------------|--------------|----------------|
| 1. 金龍寺旧境内跡 | 23. 古曾部・芝谷遺跡 | 45. 墓谷古墳群 | 67. 津之江南遺跡 |
| 2. 金龍寺跡 | 24. 奥天神町遺跡 | 46. 弁天山 D4号墳 | 68. 鬮鶏山古墳群 |
| 3. 成合遺跡 | 25. 宮山遺物散布地 | 47. 弁天山 D2号墳 | 69. 鬮鶏山古墳 |
| 4. 悉檀寺跡 | 26. 古曾部南遺跡 | 48. 弁天山古墳群 | 70. 水室塚古墳 |
| 5. 成合地獄谷遺跡 | 27. 天神山遺跡 | 49. 弁天山 C1号墳 | 71. 水室遺跡 |
| 6. 安満山古墳群 | 28. 中將塚古墳 | 50. 弁天山 B1号墳 | 72. ツゲノ遺跡 |
| 7. 安満宮山古墳 | 29. 屋神車塚古墳 | 51. 弁天山 A1号墳 | 73. 新池遺跡 |
| 8. 萩之庄 1号墳・萩之庄古墳群 | 30. 伝秀吉本陣跡 | 52. 岡本山古墓群 | 74. 番山古墳 |
| 9. 梶原古墳群 | 31. 慈願寺山古墳群 | 53. 上野遺跡 | 75. 土室遺跡 |
| 10. 成合琴堂窯跡群 | 32. 慈願寺山遺跡 | 54. 郡家本町遺跡 | 76. 上土室遺跡 |
| 11. 梶原寺跡 | 33. 慈願寺山1号墳 | 55. 嶋上郡衙跡 | 77. 神峰山寺跡 |
| 12. 梶原瓦窯跡 | 34. 芝谷古墳 | 56. 芥川廃寺 | 78. 神峰山寺僧房跡 |
| 13. 梶原西遺跡 | 35. 安岡寺古墳 | 57. 川西古墳群 | 79. 塚原古墳群 |
| 14. 萩之庄南遺跡 | 36. 真上古墳群 | 58. 郡家今城遺跡 | 80. 阿武山古墳 |
| 15. 法照寺遺跡・窯跡 | 37. 真上東遺跡 | 59. 宮田遺跡 | 81. 片ヶ谷古墳群 |
| 16. 安満遺跡 | 38. 真上遺跡 | 60. 今城塚古墳 | 82. 塚原遺跡 |
| 17. 安満北遺跡 | 39. 大蔵司遺跡 | 61. 狐塚古墳群 | 83. 太田茶臼山古墳 |
| 18. 磐手杜古墳群 | 40. 宮ノ川原遺跡 | 62. 前塚古墳 | 84. 太田茶臼山古墳陪塚群 |
| 19. 紅茸山南遺跡 | 41. 塚脇古墳群 | 63. 上水室遺跡 | 85. 西国街道 |
| 20. 奥坂古墳群 | 42. 塚穴古墳群 | 64. 芥川遺跡 | |
| 21. 安満山遺物散布地 | 43. 唐井谷古墳群 | 65. 上田部遺跡 | |
| 22. 紅茸山古墳群 | 44. 尼ヶ谷古墳群 | 66. 高槻城跡 | |

図6 調査地周辺の遺跡

遺跡が展開するようになる。芥川遺跡では、土坑墓や土器棺墓群が確認されており、加曾利 B I 式を含む大量の土器や石器などが出土している。後期から晩期にかけては、沖積地や丘陵縁辺部を中心に三島地域で遺跡が増加する傾向がうかがえる。

弥生時代 弥生時代の高槻市域は、安満遺跡や古曾部・芝谷遺跡、天神山遺跡など学史的にも著名な遺跡が展開する。高槻市東部の安満遺跡は、檜尾川が成合谷を抜けた扇状地の末端に位置する。昭和 3 (1928) 年に、京都大学農学部で農場設置の工事中に大量の弥生土器や石器が発見され、遺跡の存在が明らかになった。出土した弥生土器は、弥生文化が九州北部から畿内へ流入したことを明らかにするもので、学史的に著名な遺跡である。発掘調査によって、縄文時代晩期から弥生時代、古墳時代を中心に中世まで連綿と続くことが分かっている。特に弥生時代は、竪穴建物や掘立柱建物、井戸からなる居住域、水田や用水路からなる生産域、方形周溝墓を中心とした墓域の主に 3 つの要素で構成され、東西約 1.4 km、南北約 0.6 km の大規模な遺跡である。弥生時代前期には、居住域を 2 重の環濠で囲い、その南側には生産域が、東側には墓域が形成される。中期前半になると、居住域と東方の墓域が拡大する。後期前半には一時的に集落は衰退するが、後期後半になるとこれまで墓域であった場所に居住域や生産域が形成されるようになる。遺物は、多彩なものが出土しており、土器の他に赤漆塗りの櫛やかんざし、鍬や鋤などの農工具を含む多様な木製品が出土している。遺跡は、平成 5 (1993) 年に国の史跡に指定され、現在は史跡公園として整備されて令和 3 (2021) 年に全面開園している。

安満遺跡の他には、高槻丘陵上に天神山遺跡や古曾部・芝谷遺跡などがある。天神山遺跡は、中期初頭から末の遺物が多く出土し、竪穴建物や方形周溝墓などが確認されている。また、突線鈕 2 式に分類される袈裟襷文銅鐸が出土している。古曾部・芝谷遺跡は、我が国最大規模の高地性集落で、発掘調査によって集落を取り囲む大規模な環濠が確認されている。集落は後期初頭に出現するものの、後期後半まで続かず、その消長は非常に短期間であった。古曾部・芝谷遺跡の集落は、安満遺跡が衰退する時期と対応していることから、安満遺跡から集落の移動があったのではないかと考えられている。これらの遺跡の他に、紅茸山遺跡や萩ノ庄遺跡、成合遺跡などで小規模な集落跡が確認されている。

古墳時代 古墳時代の高槻市域では、前期から終末期まで古墳が築造される。前期は、畿内でも最古級の安満宮山古墳がある。安満宮山古墳は、檜尾川の東、安満山の山中に築かれている。墳丘の大半は削平されていたが、長方形墳であったと考えられる。埋葬施設は、墳丘の中央部に深い木棺埋納坑を掘削し、割竹形木棺を直葬する。棺内には、銅鏡 5 面や鉄刀 1 振、鉄斧、ガラス小玉などが納められていた。5 面の銅鏡のうち 1 面は「青龍三年」銘をもつ方格規矩鏡で、「青龍三年」が西暦 235 年にあたることから邪馬台国との関係が注目された。これらの出土品は、平成 12 (2000) 年に一括で国の重要文化財に指定された。現在、安満宮山古墳は高槻市立公園墓地内に「青龍三年の丘」として復元整備されている。

その後、芥川流域の奈佐原丘陵を中心に、前期から中期にかけて弁天山 C 1 号墳や闘鷄山古墳などの前方後円墳が築造される。また、卓越した規模で全長 226m の太田茶臼山古墳(茨木市)が築造される。これらの古墳は、三島地域の首長墓と考えられる。闘鷄山古墳は全長 86m で、後円部から 2 基の竪穴式石室を確認している。石室はいずれも未盗掘で、石室内はファイバースコープによって調査され、三角縁神獣鏡や武器などの豊富な副葬品が確認されている。闘鷄山古墳は、平成 14 (2002) 年に国の史跡に指定された。檜尾川流域では、前期末から中期後半にかけて、丘陵上に萩ノ庄 1 号墳などの前方後円墳が築造される。

後期になり、三島平野のほぼ中央に全長 181m の今城塚古墳が築造され、檜尾川流域では昼神塚古墳

や中将塚古墳などの前方後円墳が築造される。今城塚古墳は発掘調査によって、後円部内の石積や排水溝、石室基盤工、護岸列石、葺石など古墳の構築技術を知る上で重要な成果を得ている。中でも内堤北側中央部で見つかった張出部では、大量の形象埴輪が出土し、埴輪を用いた祭祀を行っていた。また、今城塚古墳から西へ約1 kmの位置にある新池遺跡では、今城塚古墳に使われた埴輪を焼成した窯跡が見つかっている。今城塚古墳は昭和33(1958)年に、新池遺跡は平成3(1991)年に国の史跡に指定され、現在は史跡公園として整備されている。後期後半になり、丘陵などを利用して群集墳の造営が始まる。群集墳ではないが、阿武山古墳は、中臣鎌足の墓として有名で、埋葬施設には夾紵棺が安置されており、棺内からは男性の人骨や金糸、玉枕など豊富な副葬品が確認されている。阿武山古墳は昭和58(1983)年に国の史跡に指定されている。安威川流域に造営された、110基以上からなる塚原古墳群を最大規模として、芥川流域に脇塚古墳群と塚穴古墳群、檜尾川流域に梶原古墳群や安満山古墳群、磐手杜古墳群などが形成される。

金龍寺旧境内跡の周辺でも、今回調査した成合3・4号墳の他に成合1号墳、成合門前下古墳、成合西王寺山古墳群、成合地獄谷古墳群などの古墳が分布している。

古代 古代の高槻市域は、摂津国嶋上郡に属する。律令期には、丘陵裾部に古代山陽道(のちの西国街道)が整備され、道沿いには大原駅・芥川駅・嶋上郡衙が置かれ、梶原寺・芥川廃寺などの古代寺院も創建された。梶原寺に関しては、摂津職解から梶原寺に東大寺の瓦を発注したことが正倉院文書に記載が見られる。梶原寺に隣接する梶原瓦窯の調査から、梶原寺と芥川廃寺へ瓦を供給していたことが分かっている。芥川廃寺は、嶋上郡衙の郡庁院の西に創建された郡寺である。芥川廃寺の西にある郡家今城遺跡では、芥川廃寺へ瓦を供給していた瓦窯跡が確認されている。嶋上郡衙跡は、郡庁院跡や正倉跡などが確認されている。昭和48(1973)年に国の史跡に指定され、郡庁院跡などが復元整備されている。その嶋上郡衙跡周辺の遺跡では、奈良時代の建物跡などが見つかっており、中でも郡家今城遺跡では、郡衙関連の施設と思われる建物跡や山陽道と思われる道路遺構などが確認されている。また、「上郡」と墨書された土師器が出土している。

金龍寺旧境内跡の周辺では、成合琴堂窯跡・成合西王寺山窯跡が見つかっており、どちらも8世紀後半から9世紀の須恵器窯である。これ以外にも、成合遺跡・金龍寺旧境内跡の調査で7世紀の焼き歪んだ須恵器が出土しているため、周辺に須恵器窯があると想定される。

遺跡名になっている金龍寺は、延暦9(790)年に創建された「安満寺」を前身に、康保元(964)年に千観によって遼山金龍寺紫雲院と改称された。しかし、古代における金龍寺は実態が不明で、中世以降にかけて栄えた寺院と考えられる。また、金龍寺周辺には『日本三代実録』貞観16(874)年条に、官寺に列せられた悉檀寺がある。悉檀寺は、金龍寺旧境内跡の西にある春日神社付近を推定地にされているが、平安時代の軒丸瓦が採取されているのみである。このほかに、『日本三代実録』貞観16(874)年条には神峰山寺・本山寺・安岡寺・霊山寺などの記載があるが、その実態については明らかになっていない。

中世以降 中世には芥川の扇状地突端に高槻城が築かれる。高槻城は、16世紀に入江氏の居城であったが、織田信長に滅ぼされた後に和田氏・高山氏などが城主を務めた。江戸時代には、藩庁として用いられ、明治7(1874)年に廃城となった。発掘調査では、キリシタン大名として有名な高山右近が城主であった時期の墓地からロザリオなどが出土している。また、高山右近の時期の障子掘りの堀などが確認されている。

中世における金龍寺は、能因法師が金龍寺の鐘の音を聞いて詠んだとされる「山里の春の夕暮来て見れば入相の鐘に花そ散りける」（『新古今和歌集』巻第二 春歌下 116）が有名である。金龍寺は日想観信仰の地、桜の名所として親しまれてきたが、天正年間に高槻城主高山右近によって焼き討ちにあう。しかし、智光院宗俊の尽力で慶長年間に豊臣秀頼によって再興される。江戸時代には『摂津名所図会』に金龍寺が描かれている。絵図からは秋の松茸狩りなどで賑わっている様子が描かれており、金龍寺が栄えていたことがうかがえる。その後、金龍寺は昭和 58(1983)年の火災で消失した。今では堂宇の石垣や参詣道、丁石が残っているのみである。

第3節 成合地区周辺の古墳

今回の調査地である高槻市成合は、これまでに高槻市教育委員会や文化財センターによって発掘調査が行われてきた。今回の調査成果をより理解するために、後期・終末期古墳についてふれていく。

成合周辺は 1970年代に入って、主に高槻丘陵を中心に宅地開発や名神高速道路建設などを契機に大規模な開発が始まる。その結果、古曽部・芝谷遺跡や紅茸山古墳群をはじめとして発掘調査成果が得られた。しかし、成合谷とその東の丘陵には、開発の手が及んでこなかったため実態が不明であったが、2010年頃から新名神高速道路の建設を契機に、遺跡の実態が明らかになりつつある(図7)。ここでは、地域を大きく①安満山周辺、②高槻丘陵、③成合谷の東の丘陵に分けて主な古墳について述べる。

① 安満山周辺

安満山周辺には、梶原古墳群や安満山古墳群、磐手杜古墳群がある。

梶原古墳群は、安満山の東の山裾に形成された 10数基からなる古墳群である。古墳群は、北から南へ下る尾根上に築かれ、西から A～G支群まで確認されている。これまでの調査で梶原古墳群は、6世紀中頃から後半に古墳の築造が始まり、7世紀中頃から後半まで造墓活動を行っていたと考えられている。

中でも卓越した規模で、直径 25mの円墳である D1号墳が6世紀中頃から後半に築造される。石室は、右袖式の横穴式石室を埋葬施設とし、組合式家形石棺が確認されている。敷石を施した床面から、馬具などを含む鉄製品や須恵器などが出土している。このほかに、B1号墳は、6世紀後半に築造された直径 11mの円墳である。石室は、側壁の一部が削平されており袖の有無は不明である。敷石を施した床面からは、三累環頭大刀の柄頭や須恵器などの副葬品が出土している。

安満山古墳群は、安満山山塊に形成された 40数基からなる古墳群である。分布調査の結果、尾根上に A～C支群が確認されている。発掘調査によって、梶原古墳群と同時期かやや遅れる時期から古墳の築造が始まり、7世紀中頃から後半まで造墓活動を行っていたことが分かっている。代表的な古墳に、6世紀後半に築かれた A2号墳がある。A2号墳は、直径 14mの円墳で右袖式の横穴式石室をもつ。敷石を施した床面からは、須恵器や金環、鉄刀などの金属製品が出土している。

磐手杜古墳群は、安満山から南東へ下る尾根上に築かれた古墳群である。調査がほとんどされていないため、実態は不明である。唯一調査された古墳は大部分が削平されており、かろうじて奥壁と西壁が残存していた。石室から遺物が出土していないため、築造時期は不明である。

成合門前下古墳は安満山の西側裾部、金龍寺谷に面した位置に築かれる。古墳は、7世紀中頃から後半に築造された直径約 5mの円墳である。石室は、大半が削平されており、基底部分のみが残っている状態であった。遺物は、基盤層の上面にて須恵器杯蓋が土師器甕に入れ子状となった状態で出土している。

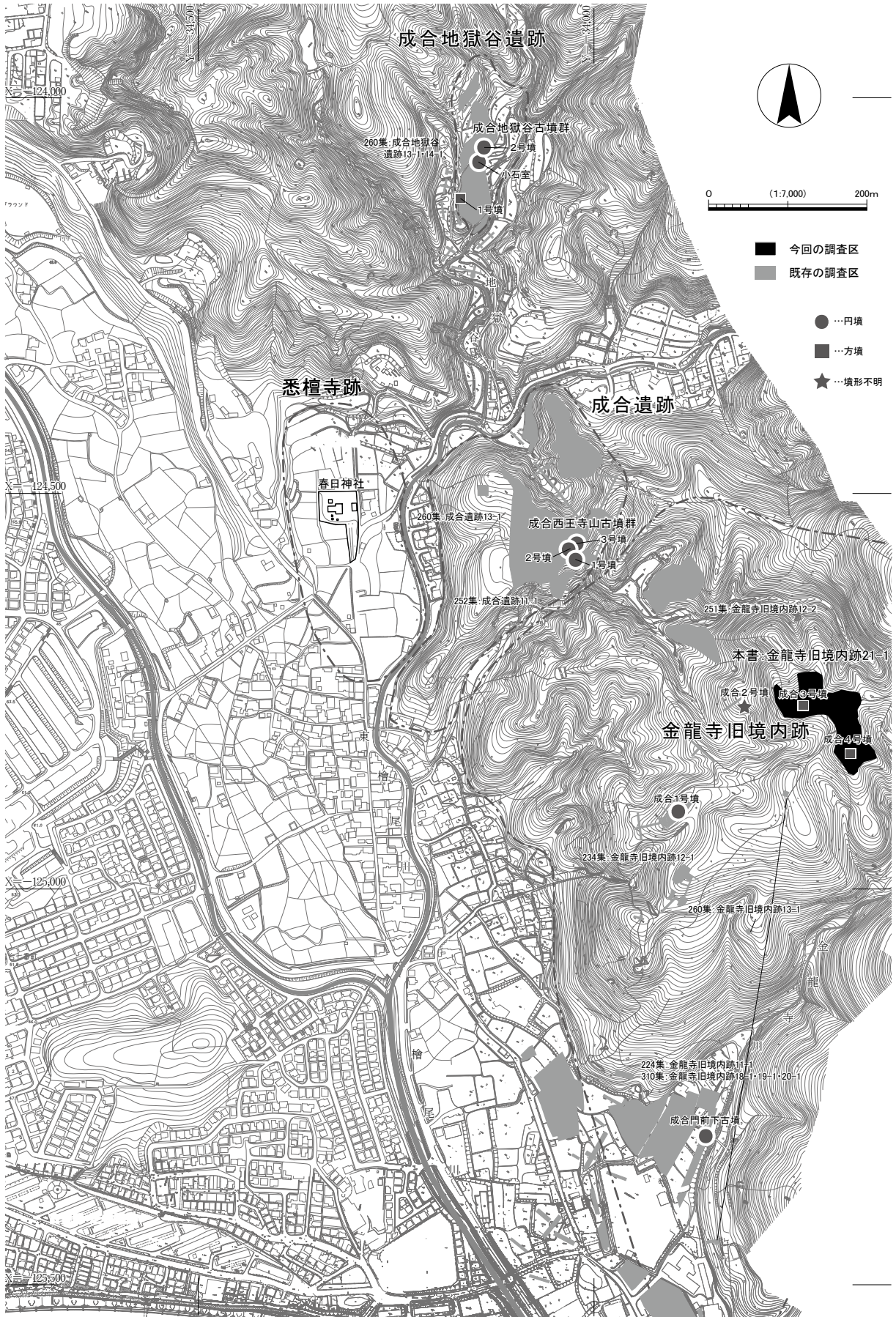


図7 高槻市成合 埋蔵文化財調査地全体

②高槻丘陵

高槻丘陵では、古曽部・芝谷遺跡や紅茸山古墳群、奥坂古墳群がある。

古曽部・芝谷遺跡では、古曽部古墳とされた古墳が1基確認されている。墳丘の規模は、盛土が残存しておらず不明である。石室は、無袖式の横穴式石室で、奈良時代に再利用され、蔵骨器が納められていた。そのため、古墳の副葬品などは片付けられており、正確な築造時期は不明である。古墳と関連する遺物は、床面から鉄釘と棺台と考えられる石材が確認されている。

紅茸山古墳群ではC1号墳と、それと同時期の土坑墓群が確認されている。C1号墳は、7世紀前半に築造された直径12mの円墳である。埋葬施設は、両袖式の横穴式石室で、石組の排水溝も確認されている。敷石を施した床面から、須恵器や金環などが出土している。

紅茸山古墳群の西に隣接する位置に奥坂古墳群がある。奥坂古墳群は、羅王山から南東にのびる尾根上に位置する。A1号墳は、7世紀中頃に築かれた一辺4.5mの方墳である。埋葬施設は、無袖式の横穴式石室で、床面から須恵器杯身や鉄釘などが出土している。

③ 成合谷の東の丘陵

成合谷の東の丘陵上には、成合1号墳・成合西王寺古墳群・成合地獄谷古墳群がある。

成合1号墳は、西側が成合谷に面した丘陵に築かれた直径15mの円墳である。埋葬施設は、右片袖式の横穴式石室である。石室は、玄室と羨道を区画する「梱石」を据え、玄室側の床面に敷石を施す。副葬品は、須恵器と鉄製品、砥石などが出土している。6世紀後半に位置付けられている。

成合西王寺山古墳群は、丘陵の南斜面に位置する。発掘調査によって、7世紀中頃に築造された直径6m(2・3号墳)と直径5m(1号墳)の円墳が3基確認されている。埋葬施設は、いずれも大きく削平を受けており、2・3号墳は石室掘方のみが、1号墳は側壁の一部のみが残っていた。しかし、1号墳の床面は良好な状態で確認された。床面からは、須恵器杯身や鉄釘などが出土している。

成合地獄谷古墳群は、地獄谷川が形成した急峻な谷の斜面に位置する。発掘調査によって、一辺6mの方墳(1号墳)と直径5.8mの円墳が確認されている。埋葬施設は、いずれも無袖式の横穴式石室である。このほかに、1基の竪穴式小石室が確認されている。2基の横穴式石室は、盗掘を受けており床面から遺物が一切出土しなかった。また、小石室からも遺物は出土していない。このため、古墳の正確な時期が不明であるが、周辺古墳の様相を比較した上で、墳丘の形状や盛土の状況から7世紀第2四半期に位置付けられている。

以上、成合周辺でこれまで調査された古墳を概観した。高槻丘陵は宅地開発や名神高速道路建設で後期・終末期古墳が点在することが明らかになってきた。そして、新名神高速道路建設によって成合谷の東の丘陵も調査され、古墳の発見が相次いだ。これらの成果から成合の古墳は、安満山・梶原古墳群のように大規模な群を形成せず、小規模な群を形成することが明らかになってきた。このことは、これまで様相が不鮮明であった、成合の古墳時代後期・終末期の様相を検討していく上で非常に重要な成果であり、本書で報告する成合3・4号墳の調査成果を理解する上で大きく関わるとみられる。そのため、これまでの調査成果をまとめ、検討を行い、成合地区の後期・終末期古墳の様相をみていく必要があるだろう。

(田中)

第3章 金龍寺旧境内跡の調査成果

第1節 調査成果の概要と基本層序

1区と3区では、横穴式石室を埋葬施設とする古墳を2基検出した。2基の古墳は、成合3号墳(1区)、成合4号墳(3区)と高槻市により命名された。2基の古墳からは、鉄釘や須恵器が出土した。この他に、1区では成合3号墳の東から1条の南北方向に延びる溝を検出した。2区では、丘陵の緩斜面から被熱痕がみられる焼土、炭を含む土坑を4基検出した(図9)。

基本層序

第1層(現代): 黒褐色を呈する細礫混じりシルト質砂(表土)。層厚 0.1m~0.2mを測る。

第2層(~古代): にぶい黄褐色~明黄褐色を呈するシルト~砂質シルト(包含層)。層厚 0.1m~0.4 mを測る。基盤層や古墳のマウンドから供給された土壌で生成されたものと考えられる。

基盤層: 灰白色を呈するシルトおよびにぶい黄褐色を呈するシルト。

基本層序は、丘陵の頂部縁辺では第1層(表土層)を除去した段階で基盤層が確認される状況であったが、丘陵の斜面地には第2層とした遺物包含層が確認された(図8)。第2層は、1区と2区から須恵器が出土している。

検出された遺構は、全て第2層を除去した基盤層の上面にて確認された。

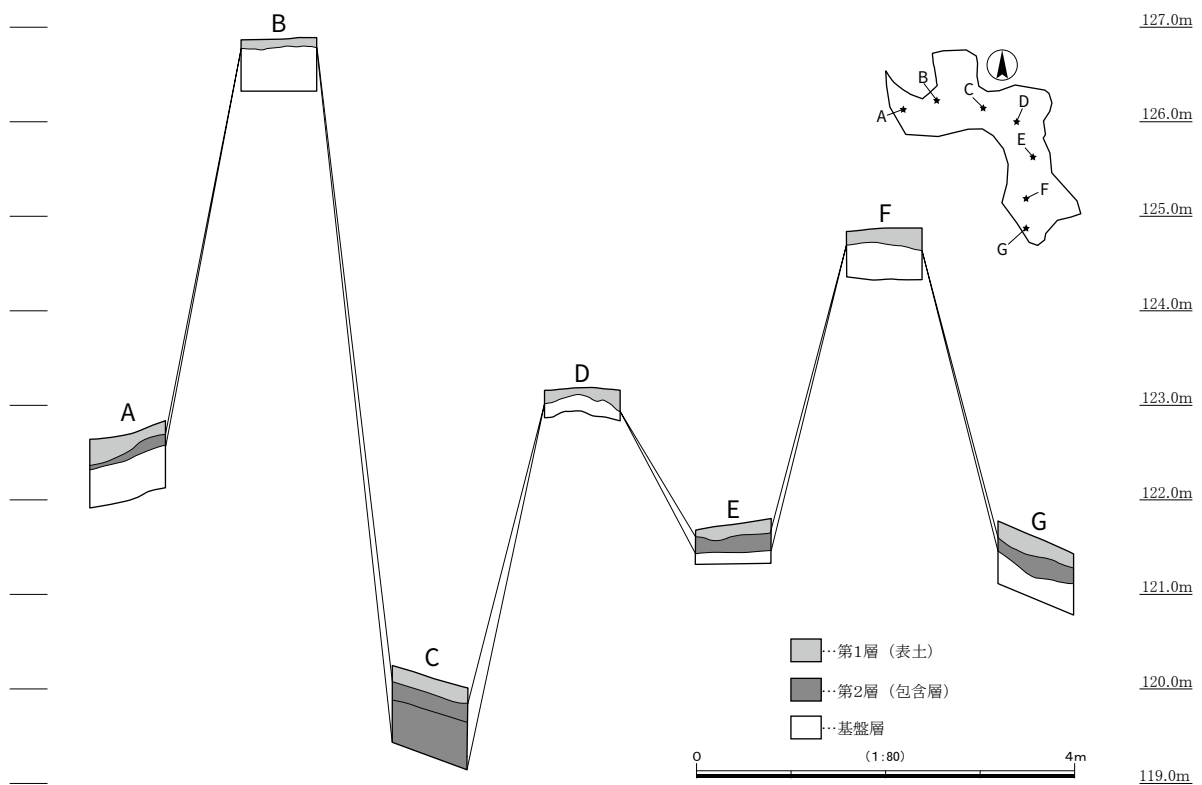


図8 地層断面柱状図

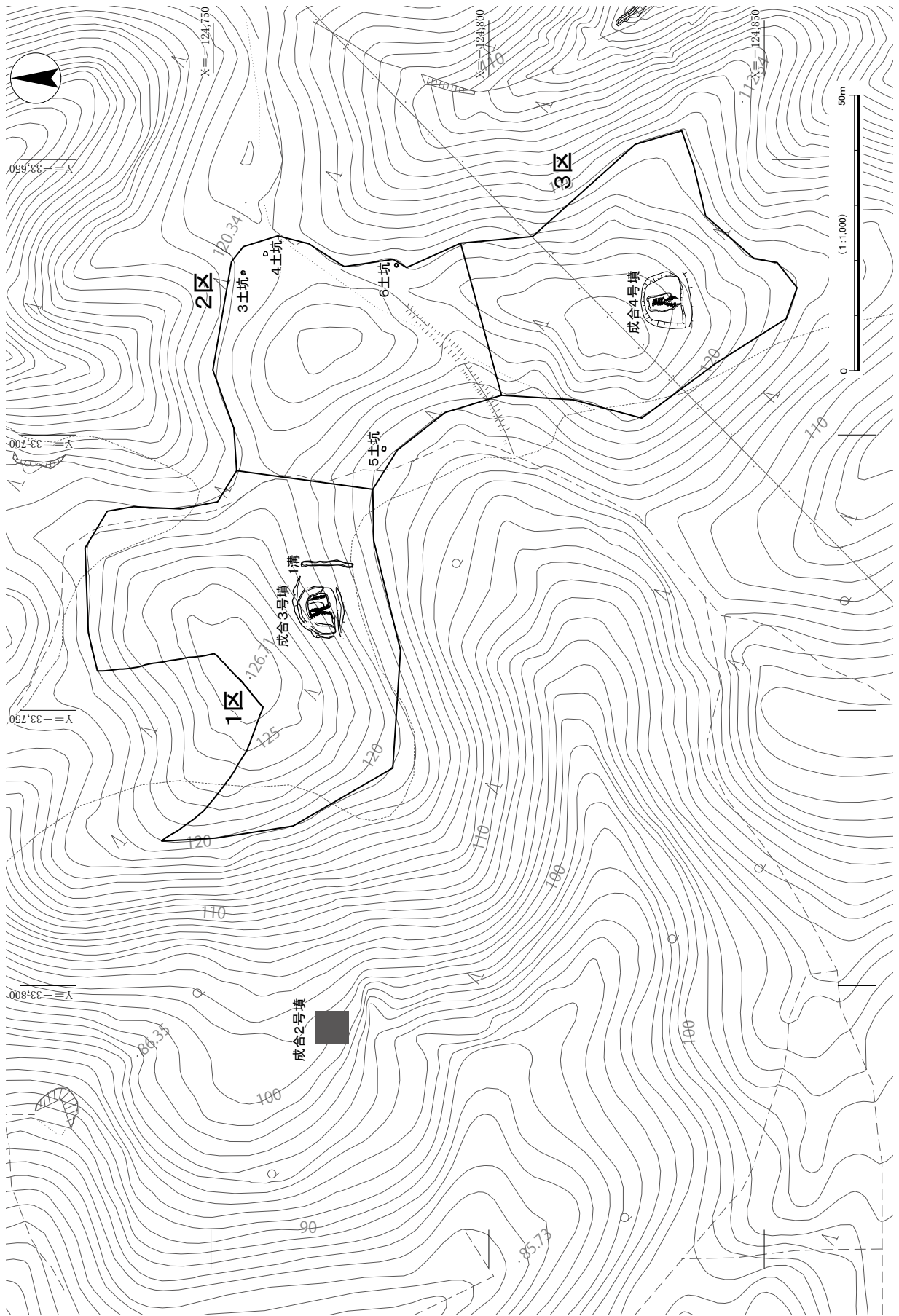


图9 調査区全体平面図

第2節 成合3号墳（1区）

成合3号墳

確認調査時には、標高127mを頂点とする丘陵の頂点から約6m下った南斜面に墳丘状の高まりと石材の露出が確認された（図11）。加えて、周溝とみられる溝状の落込みも確認されており、古墳である可能性が指摘されていた。今回の調査の結果、南に開口する横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることが明らかとなった。3区に所在する成合4号墳からは、直線距離で北西へ約85mに位置する。

墳丘と立地

【立地と旧地形】

墳丘は、丘陵頂部からの急斜面を南へ約6m下ったところで、緩斜面になる傾斜変換点があり、そこに築造される。また、墳丘の西側は、丘陵頂部から南西へ延びる尾根があり、その東斜面が急斜面になっている（図10）。

【墳形と規模】

墳丘の一部は、須恵器を含む包含層に被覆されているが、古墳の大半は表土層直下で検出された。1区は、耕作などの開発の痕跡が見受けられず、周辺に遺構や遺物がほとんど展開しないことから、3号墳の周辺では古墳築造以降の人間活動は希薄である。そのため、墳丘と規模は概ね築造時のままを保っていると考えられる。



図10 1区 平面図

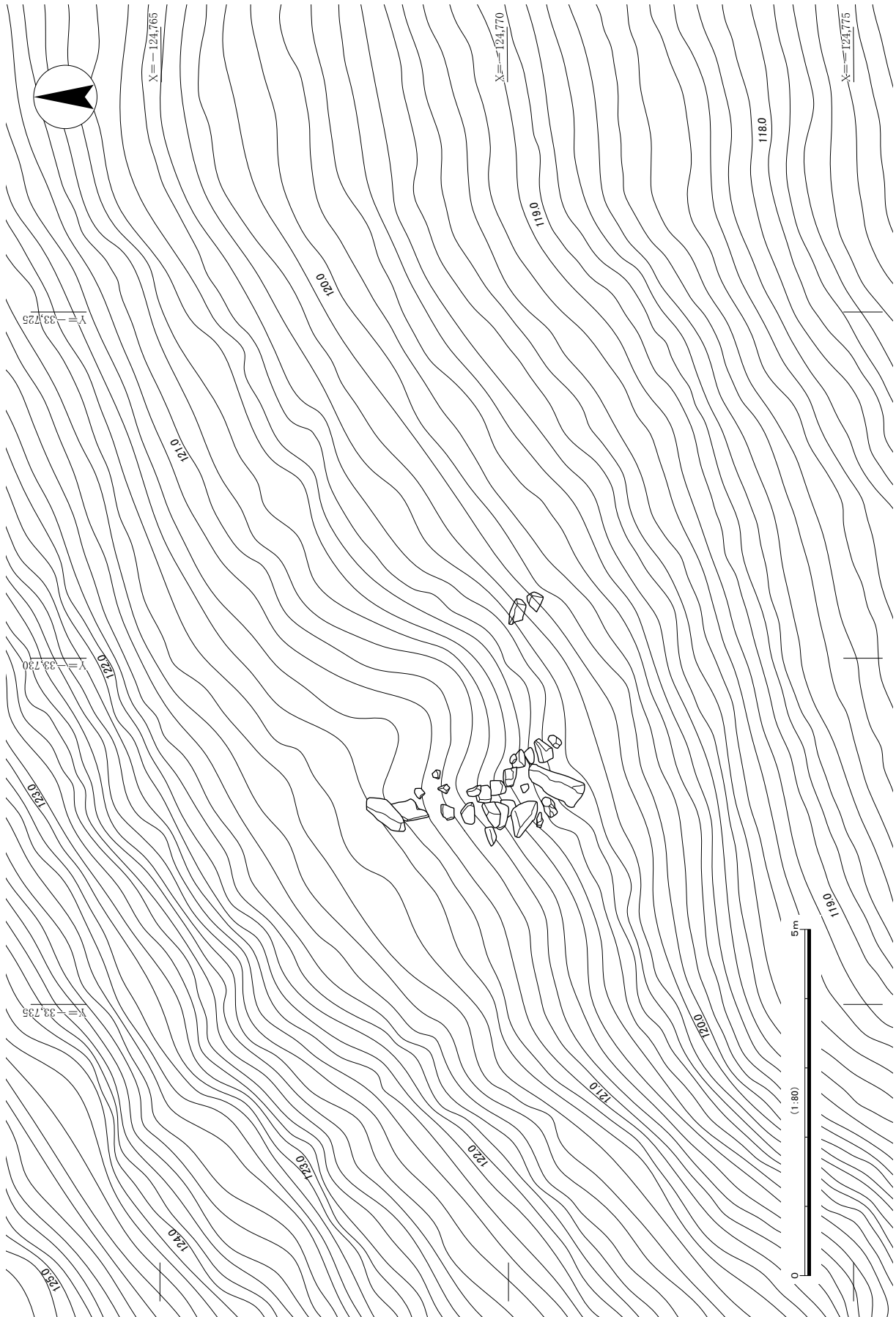


图 11 3号墳 現況測量図

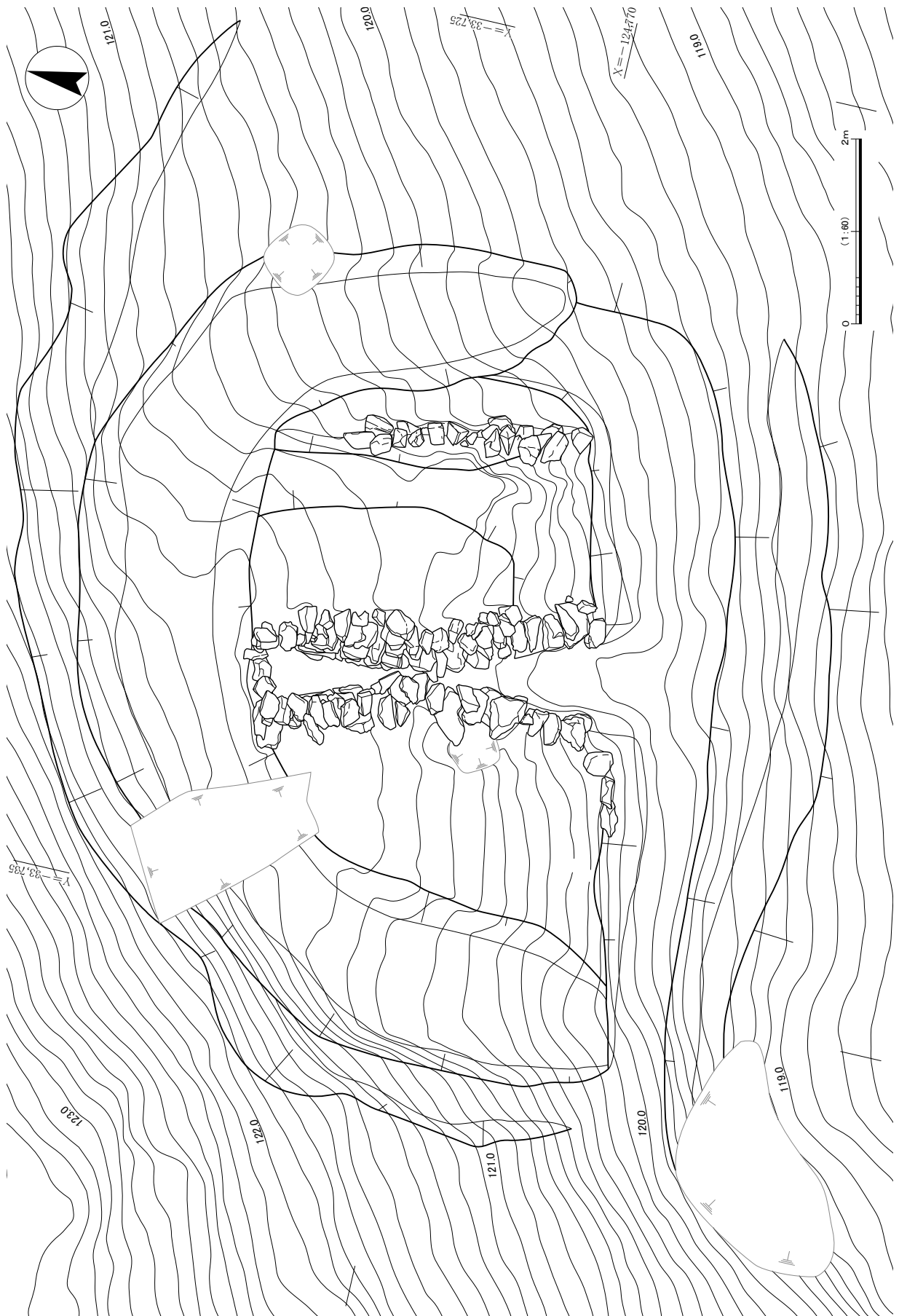


图 12 3号墳 平面图

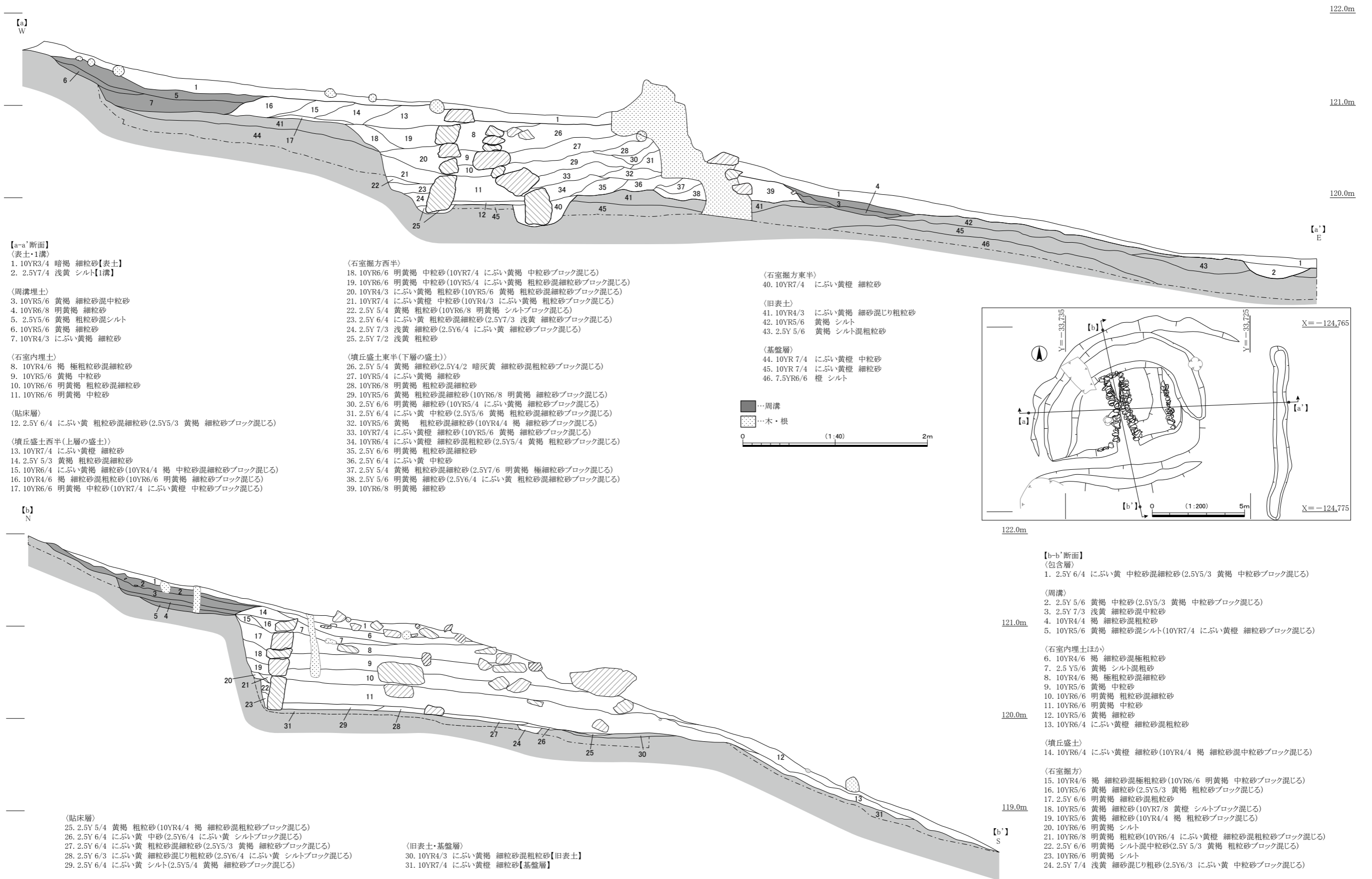


図 13 3号墳 墳丘・石室断面図

墳形は、墳丘正面が直線的になっており、墳丘東面と開口部で検出された列石が直線的に積み重ねられている点、周溝がややいびつではあるが「コ」字状に巡る点から方墳と考えられる。また、墳丘正面には2段のテラスを削り出していることから、2段築成の可能性がある。

規模は、墳丘の中央で南北長4.5m、東西長6.1m、最大で南北長6.7m、東西長9.2mを測る。テラスは、上から1段目で幅1.2m～1.6m、2段目が0.6m～0.5mを測る（図12）。

【墳丘の構築方法】

墳丘の構築方法は、最初に大きく墳丘後背部をカットしテラスを造り出す。その後、石室掘方を掘削し、石室の基底石を据え、盛土を行いながら石室を積み上げ、墳丘を構築する。墳丘盛土下には、古墳築造時の表土層（旧表土）を確認している。

墳丘盛土は、墳丘の横断面（図13：a-a'）と図14によって標高120.7m～120.8m程の高さで平坦面を持つ盛土が確認できる。盛土は、この平坦面を基準に上層と下層であり方が異なる。

下層の盛土は、最大で層厚約1.0mの盛土である（図13：a-a'26～39層）。下層の盛土内からは、石室の東2.5mの位置で埋設された列石を確認した。

墳丘東面の列石は、調査前から南端が露出した状態で、列石の西に生えていた樹木によって一部が攪乱を受けていた（図15・16）。そのため、墳丘東側には、列石の転落石と思われる石が散在している状態であった。また、列石の北半は墳丘盛土内から検出したため、攪乱を受けていない（図15・16）。

列石の規模は、全長2.7m、残存高0.6mを測る。列石の主軸は、石室の主軸と並行する。列石は、旧表土の直上から積み上げられる。そのため、地形の低い南側で3段積み上げるのに対して、地形が高い北側では1～2段積み上げており、地形が低い南側を高く積み上げている。

なお、列石は南端が調査前から露出していたことや、樹木の影響によって本来の高さを保っておらず、転落石の大きさから推測すると列石の高さは検出時の高さより0.2m～0.3m程高くなる。そうになると、列石の頂辺の高さは、南北でほぼ水平に復元され、盛土の平坦面とほとんど同じ高さであったと考えられる。

この列石と墳丘盛土の関係は、横断面（図13：a-a'）と図15で把握することができる。横断面からは石室掘方掘削後、石室を構築するのと並行して列石を積み、盛土を施しながら墳丘と石室を構築していったことが分かる。

列石の機能は、墳丘盛土内に埋設されていたことや、地形が低く、盛土量の多い東側に積み上げられていたことから、墳丘盛土の流失を防ぐ目的があったと考えられる。また、西側に列石が造られなかった理由は、地形が高いため盛土量が少く、墳丘盛土を補強する必要性が東側より低かったためと推測される。

上層の盛土は、平坦面の上に施されている。この盛土は、地形が高くなる墳丘の北半にのみ残存しており、層厚は最大で0.2m程度であった（図13：a-a'13～17層、図14：1～7層）。上層の盛土は、石室高が石室の転落石の状況から残存高より高くなるとは考えにくく、天井石を覆うためのものと推測される。

また、石室の開口部でも列石を検出した。（図17・18）。列石は、右側壁の西側で検出され、石室の主軸と直交し、墳丘の正面に露出した状態で並べられていた。規模は、残存長0.9m、高さ0.4mを測る。列石は、一辺0.4m程の石の平滑面を墳丘の外側に向けて並べる。

開口部列石の機能としては、列石の背面には墳丘盛土が施されており、墳丘東面の列石と同様に墳

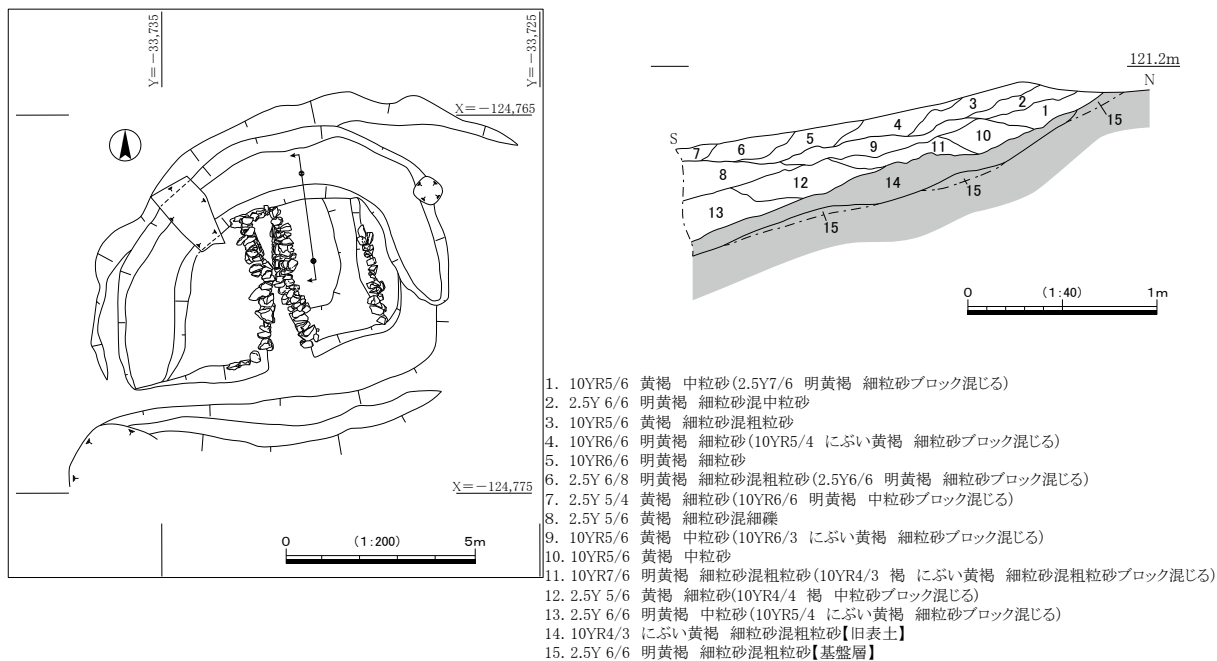


図 14 3号墳 墳丘断面図

丘盛土の流失を防ぐためのものと考えられる。また、墳丘の正面に露出した状態で並べられていたことや、石の平滑面を墳丘外側に向けていることから、墳丘正面を意識したものと推測する。列石は、石室開口部の西側のみで検出されたが、列石が墳丘正面を意識していることから、本来は墳丘正面の全面に並べられていた可能性がある。

【周溝】

周溝は、墳丘の前面を除く3方向に巡る。周溝は、墳丘の西側と東側はやや「ハ」字状に広がり、墳丘の北面では、緩やかな円弧状になり、ややいびつな「コ」字状である。周溝の規模は、幅1.6m～1.8mを測り、深さは、西側と北側で0.3m、東側で0.15mを測る。墳丘後背部の斜面が急峻である、墳丘の西面と北面で深くなる傾向がある。

周溝の堆積状況は、主に墳丘後背部の斜面からの流れ込みによる。周溝の埋没時期は、最上層から遺物が出土していないため不明である。なお、墳丘北側の周溝(図14:b-b' 2層)から土師器片が出土したが、細片であるため時期は不明である。

埋葬施設

【石室】

埋葬施設は、南に開口する無袖式の横穴式石室で、主軸はN-13°-Wを指向する。石室は、天井石が石室内と丘陵の斜面下に転落した状態で検出した。規模は、全長3.8m、残存高1.1mを測る(図19)。石室幅は、奥壁側と開口部で0.7mを測るが、石室中央付近の東西両側に生えていた樹木の土圧によって変形しており正確な幅は不明である。

奥壁にはゆるやかな持ち送りがみられる。側壁は、変形が著しいため正確には不明だが、転落していた天井石の大きさから考えて、持ち送りがあったものと推定する。

石室内には、しまりの弱い褐色～黄褐色のシルト～中粒砂が堆積していた。なお、石室内の堆積土から遺物は出土しなかった。

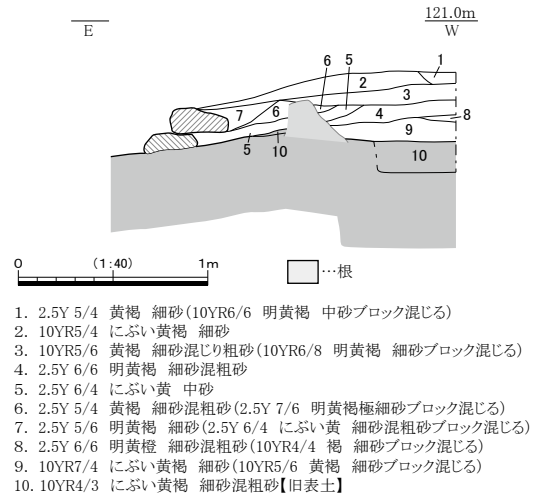
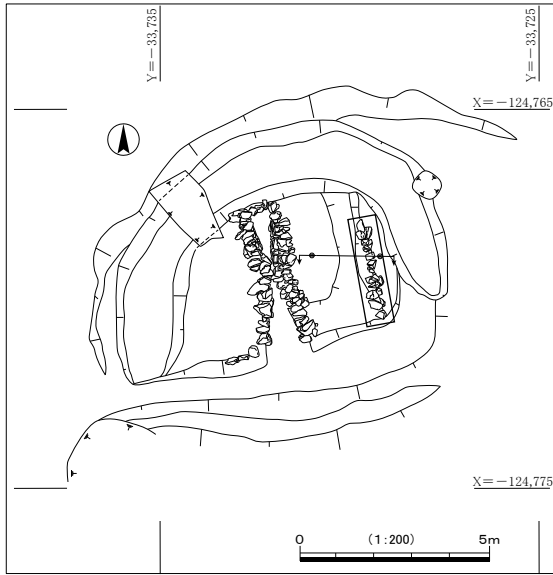


図 15 墳丘東面列石断面図



図 16 墳丘東面列石平・立面図

石室の構築方法は、奥壁の基底石に大ぶりの角礫を1石据え、基底石より上段には角礫2石を1段にして積む。側壁の基底石は、左側壁と右側壁で据え方が異なる。基底石の大きさは、両側壁ともに同じく大ぶりの長方形の角礫を用いるが、左側壁は長辺を横方向に、右側壁は長辺を縦方向に据える。また、奥壁と接する側壁の基底石は、両側壁ともに縦に据え左右を対称にみせている。側壁の基底石より上段

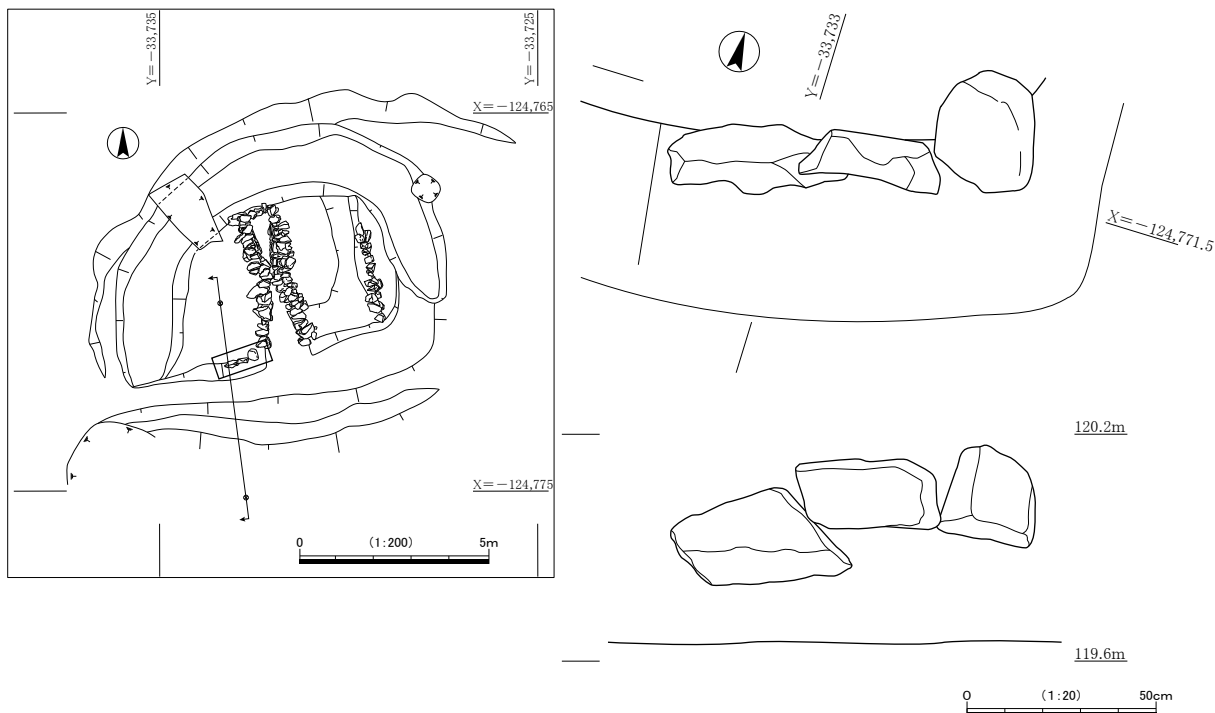


図 17 開口部列石平・立面図

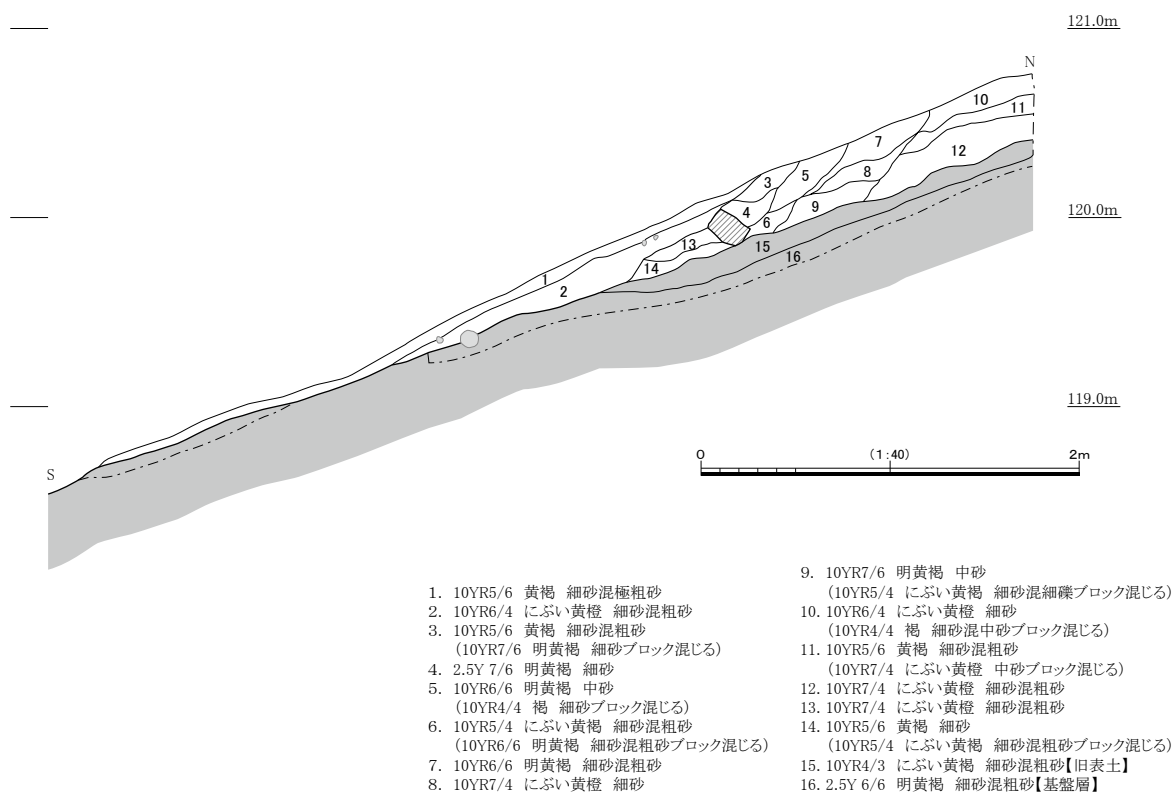


図 18 開口部列石断面図

は、基底石より上2段に大ぶりの石を積む。また、それより上段では奥壁から1.9 m付近までが比較的大ぶりの角礫を積み、手前側には小ぶりの角礫や板状の礫が混在している。側壁の積み方は、奥側に大ぶりの石を用いており、手前側より丁寧な印象を受ける。これらは、無袖の横穴式石室であるが、玄室と羨道を区画していたことや、石室の構築順を表している可能性がある。なお、閉塞の痕跡は確認でき

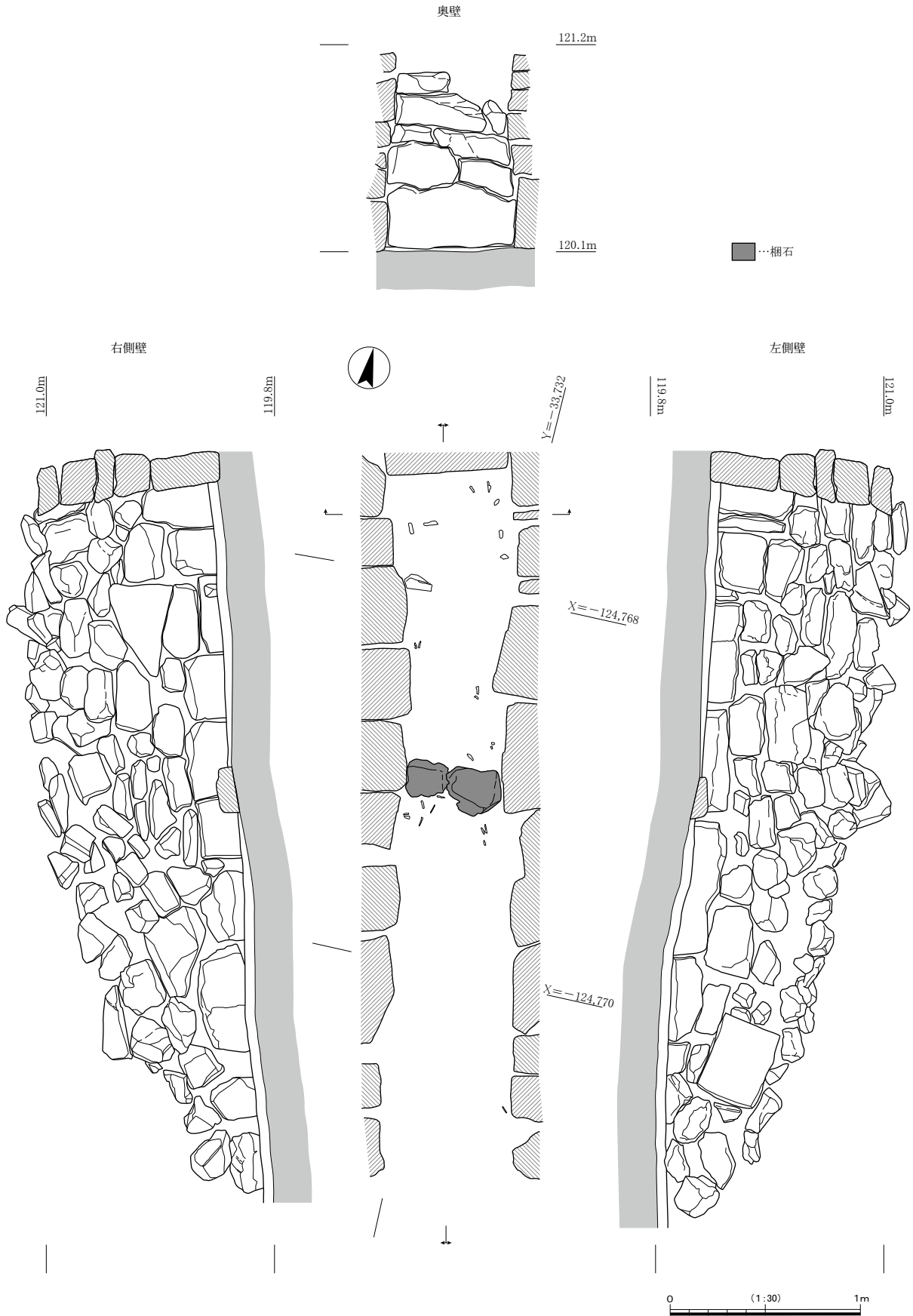


图 19 3号墳 横穴式石室

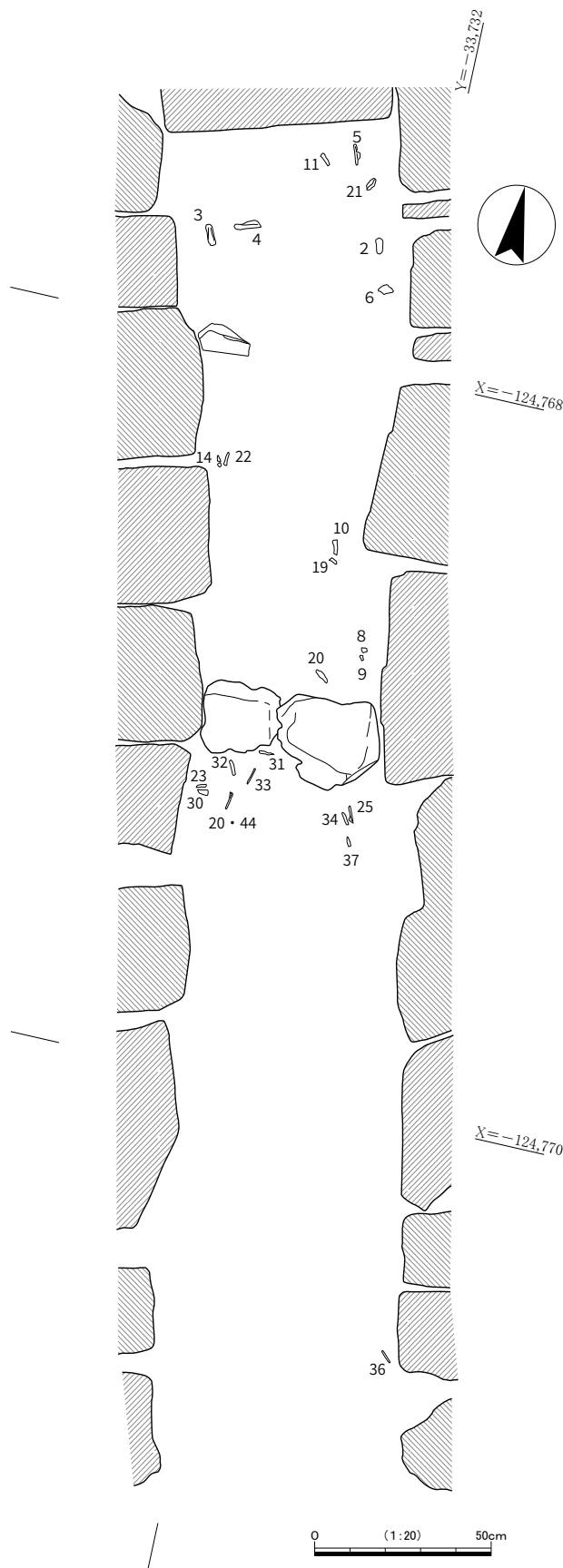


図20 3号墳 床面遺物出土状況図

なかった。

石室に用いられた石材は、チャートと玄武岩、閃緑岩である。また、チャートは赤褐色と黒灰色、灰色の3種類がみられる。基底石・天井石に用いられる石材はチャートで、赤褐色以外の黒灰色と灰色を用いる。

石室の掘方は、墳丘盛土を除去した段階、旧表土と基盤層の上面で検出した(図21)。規模は、南北長3.6m、東西長2.2mを測る。深さは、旧地形に起因され、地形が高くなる南側で1.0m、地形が低い北側で0.1mを測る。平面形は、隅丸方形である。掘方の底面は、基底石を据える箇所を布掘り状に掘削する。その後、石室の圧密によって変形しているものも含まれるが、基底石に合わせて土坑状に掘りくぼめており、基底石の上面を揃えるためのものと思われる。

【床面の状況】

床面には、基盤層由来のシルトブロックを含む細粒砂で層厚8cmの貼床を施す。また、断面観察から貼床は羨道側から奥壁に向かって施されていたことが分かる(図13:b-b' 25~29層)。

床面には、奥壁から開口部へ1.8mの位置に平らな石が2石並んでいた。これは、無袖式ではあるが玄室と羨道を区画する梱石と考えられる。梱石は、幅0.5mで貼床を施す前に設置されている。梱石の石材は、2石とも赤褐色のチャートであった。なお、床面に敷石や棺台といったものは認められなかった。

【出土遺物】

遺物は、木棺に使用された鉄釘が出土しているのみで、副葬品は出土していない。鉄釘は、床面直上と床面から遊離したものをふくめ、総数44点出土している。完形のもの1点のみである。また、木質が遺存するものもあるが、同一個体で木目の方向が変化するものがなく棺材の厚さを特定できるものはない。埋葬された木棺の数は、石室を閉塞した痕跡が残っていなかったため、鉄釘が二次的に移動している可能性があり、不明であ

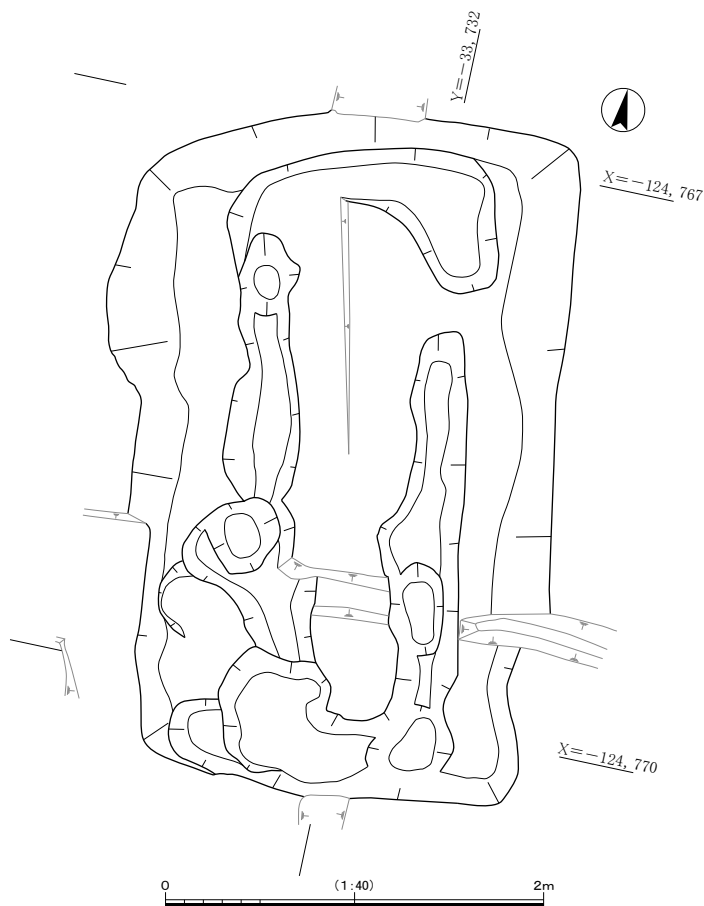


図 21 3号墳 石室掘方平面図

ある。

木質は計 10 点に遺存する。木質の方向は、完形のもの少なく、1つの個体で木目の方向が変化するものがない。しかし、頭部が残っているものには、頭部付近に横方向の木目がみられるのに対して、先端が残存するものには縦方向の木目がみられる。

開口部側 (図 23)

開口部側では、全長が分かるものはない。頭部が残存しているものは 26 のみで、奥壁側と同様に一度扁平にしたのち折り曲げて頭部を成形する。また 28・30 は、頭部が欠損しているが、残存している箇所形状から、いずれも折り曲げるタイプのもので推定される。断面形態も、奥壁側と同様に正方形のものや長方形のものがある。

木質は計 15 点に遺存する。木質の方向は、奥壁側の鉄釘と同様の様相を呈する。

【築造年代】

3号墳からは、築造時期を示す遺物が出土しなかった。後述する 4号墳は、出土した須恵器から 7世紀後半に築造されたことが分かっている。4号墳と 3号墳を比較すると、4号墳では墳丘盛土や周溝をもたない点や後背部をカットしていない点などから、古墳の構築過程が 3号墳より簡素化されている。そのため、3号墳の方が古いと考えられ、古墳の規模や構築方法から 7世紀前半から中頃の古墳と推定される。

また、鉄釘は 7世紀以降になると 10cm 未満の小型品の増加が指摘されており (田中 1978)、3号墳では 8.7cm の鉄釘が出土しており、年代に大きな齟齬はみられない。

る。しかし、鉄釘は柵石を境に奥壁側と開口部側に分布しているため、それぞれに 1基ずつの木棺が納められていた可能性もある。

ここでは、柵石を境に奥壁側と開口部側に 1基ずつ木棺が埋葬されていた可能性があることから、奥壁側と開口部側に分けて鉄釘を報告する。

奥壁側 (図 22)

奥壁側で全長が分かる資料は、1のみである。1は、全長 8.7cm、一辺 0.6cm × 0.6cm である。断面形態は、正方形を呈する。頭部は、折り曲げられて成形し、折り曲げた際のくびれが頭部と身の境にみられる。また、頭部が残存している個体 (4・11・12・20) は、全てこの形態を呈する。また 2・5・7・8・10 は、頭部が欠損しているが、残存している箇所形状から、いずれも折り曲げるタイプと思われる。断面形態は、正方形のものや長方形のものがある。

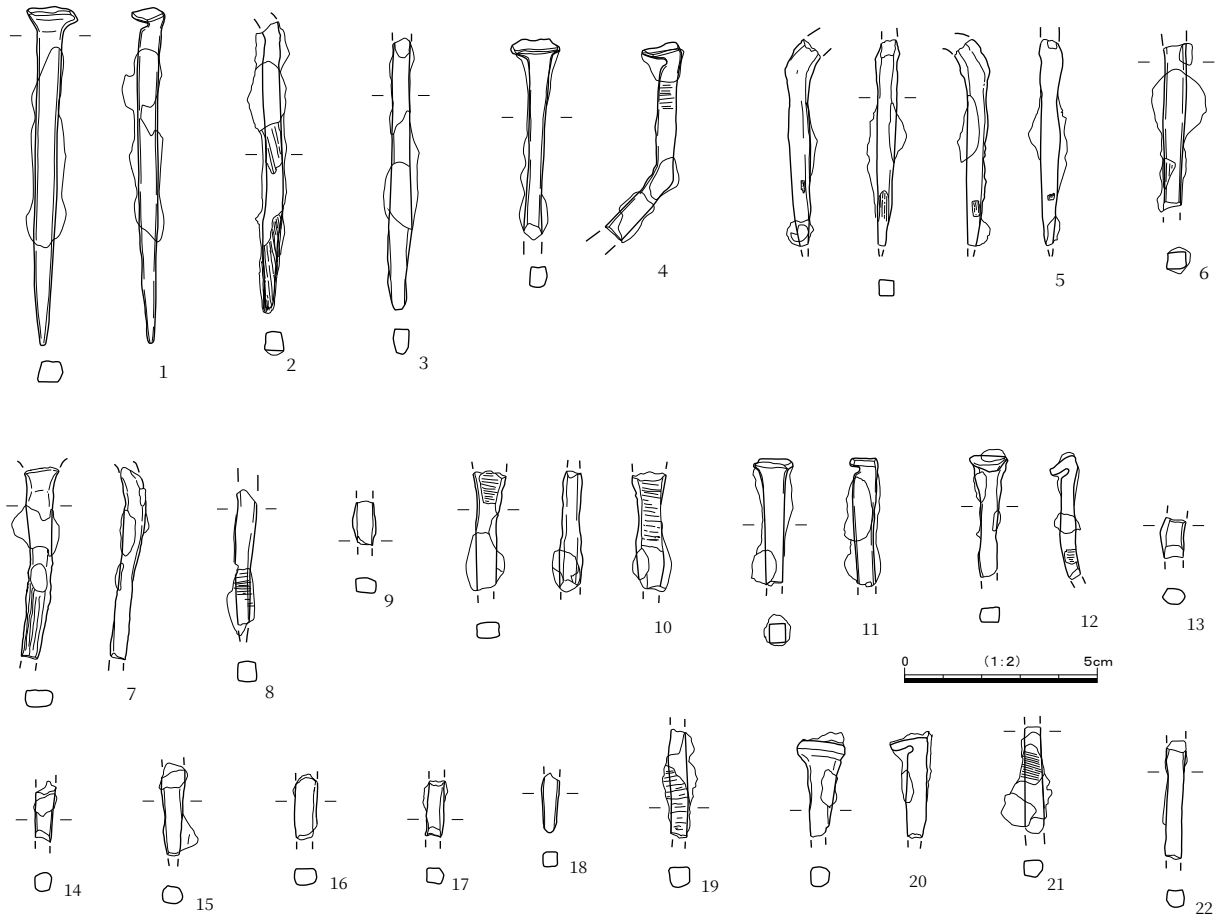


图 22 3号墳 出土遺物（奥壁側）

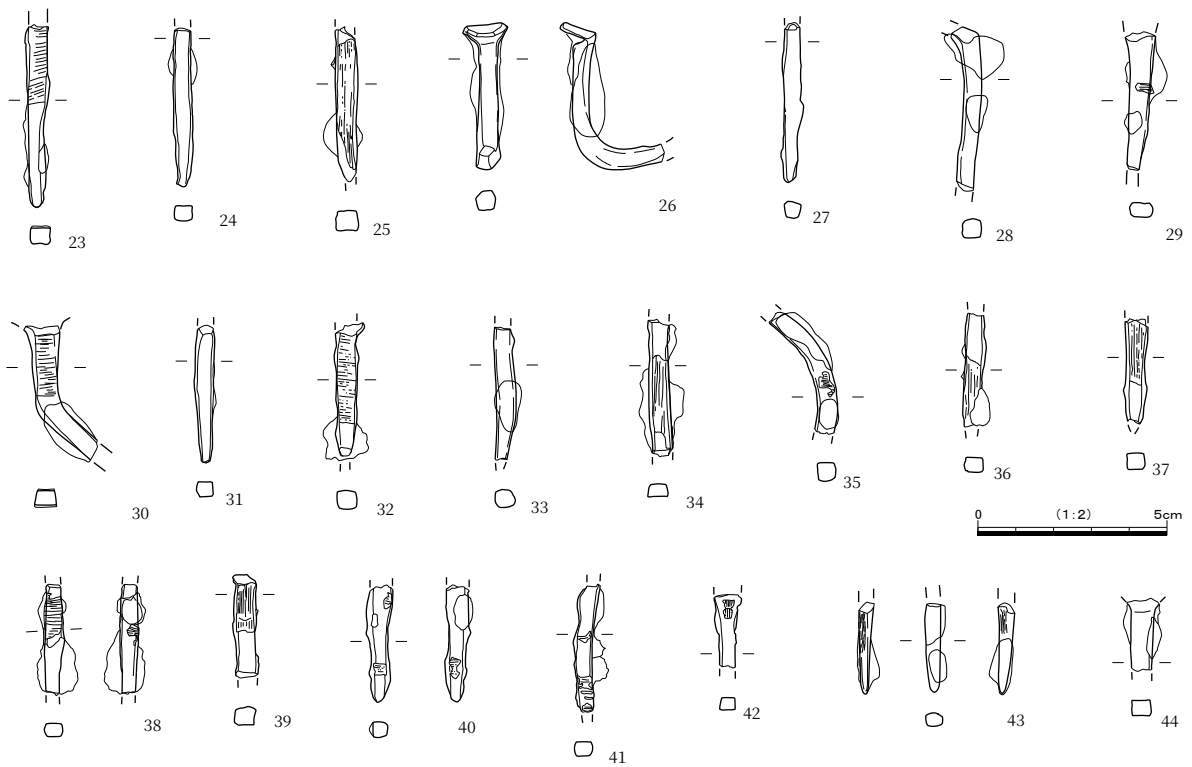


图 23 3号墳 出土遺物（開口部側）

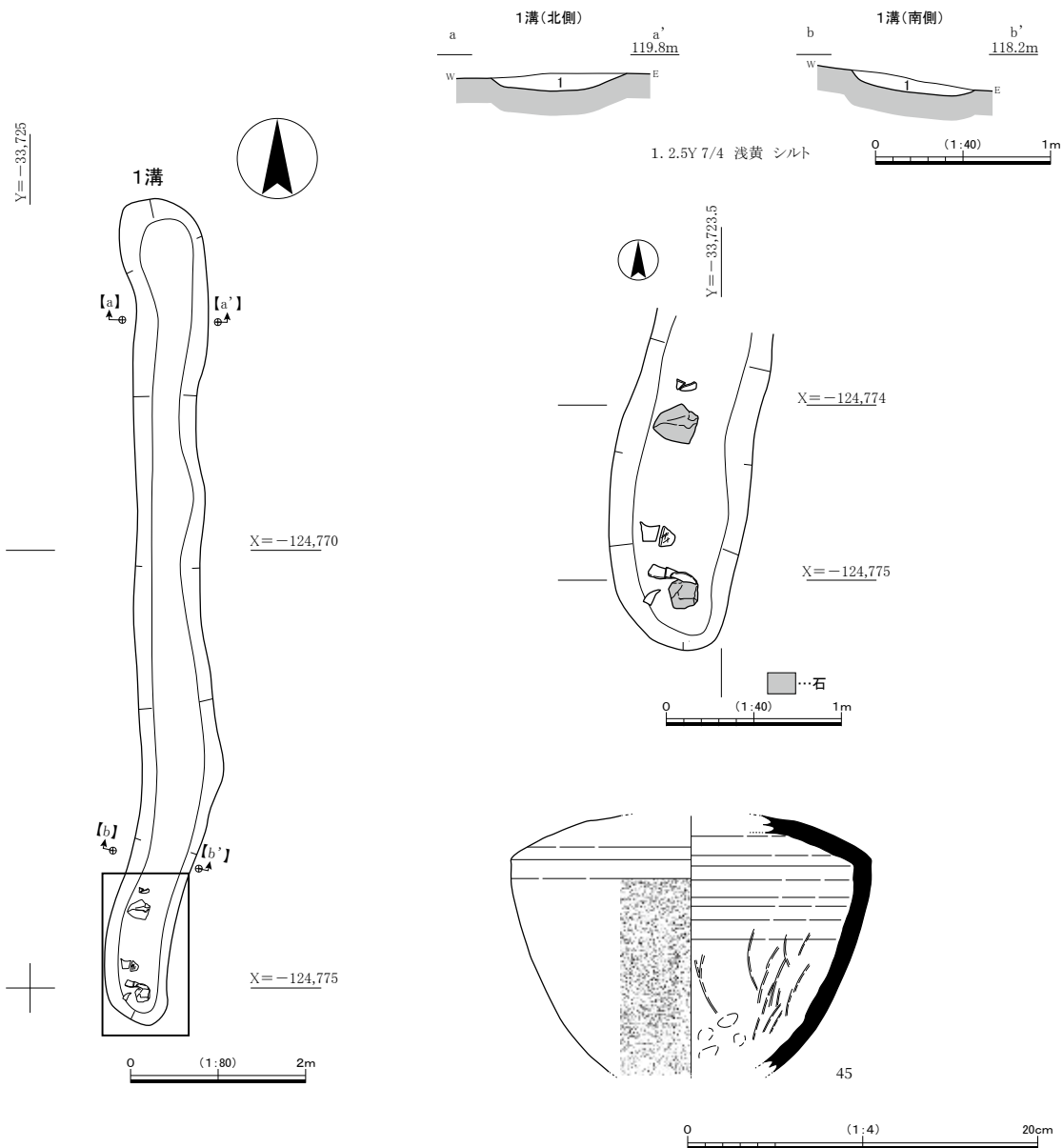


図 24 1 溝 平面図・遺物出土状況図・断面図および出土遺物

1 溝

1 溝は、成合 3 号墳から東に約 4 m の位置で検出された南北方向の溝である(図 24)。規模は、全長 9.5 m、幅 0.8 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は、浅黄色のシルトである。溝の周囲からの流れ込みで堆積したものと考えられる。溝の南端から須恵器壺(図 24-45)と礫が出土した。礫は、基盤層に含まれないため、何らかの理由で周囲から持ち込まれた可能性がある。

45 は、須恵器壺である。口縁部と底部は欠き、肩部から胴部のみ遺存する。法量は、残存高 14.6cm、肩部径 20.6cm を測る。肩部と頂部にかけては、内・外面ともに回転ナデを施す。円盤閉塞の痕跡はみられない。外面は肩部に降灰がみられる。胴部外面は、格子目状のタタキを施し、内面にはあて具痕と指頭圧痕がみられる。

須恵器壺は、7 世紀代と考えられ、古墳と大差ない時期である。また、周辺に 1 溝以外に遺構が確認されていないことから、具体的な性格は不明だが、成合 3 号墳と関連する遺構の可能性はある。

第3節 成合4号墳(3区)

成合4号墳

3区は、標高124mを頂点とする丘陵に設けられた調査区で、検出した遺構は成合4号墳のみである(図25)。確認調査では、周溝や墳丘盛土などを確認することはできなかったが、丘陵頂部付近に石が数点露出していることから、古墳の可能性が指摘された。今回の調査で現地に露出していた石は、天井石の一部であることが分かり、南に開口する横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることが分かった。



図25 3区 平面図

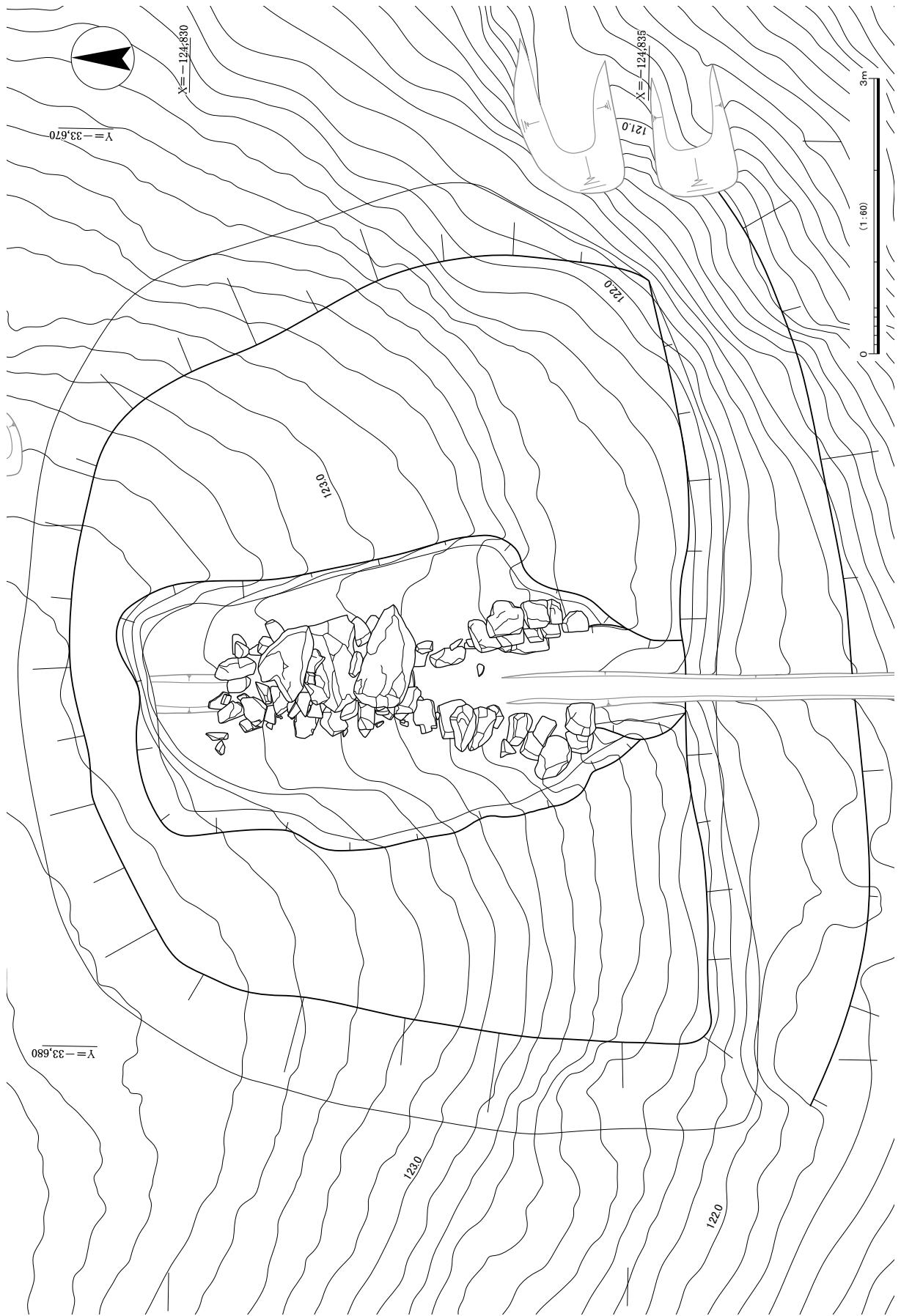


图 26 4号墳 平面图

墳丘

【立地】

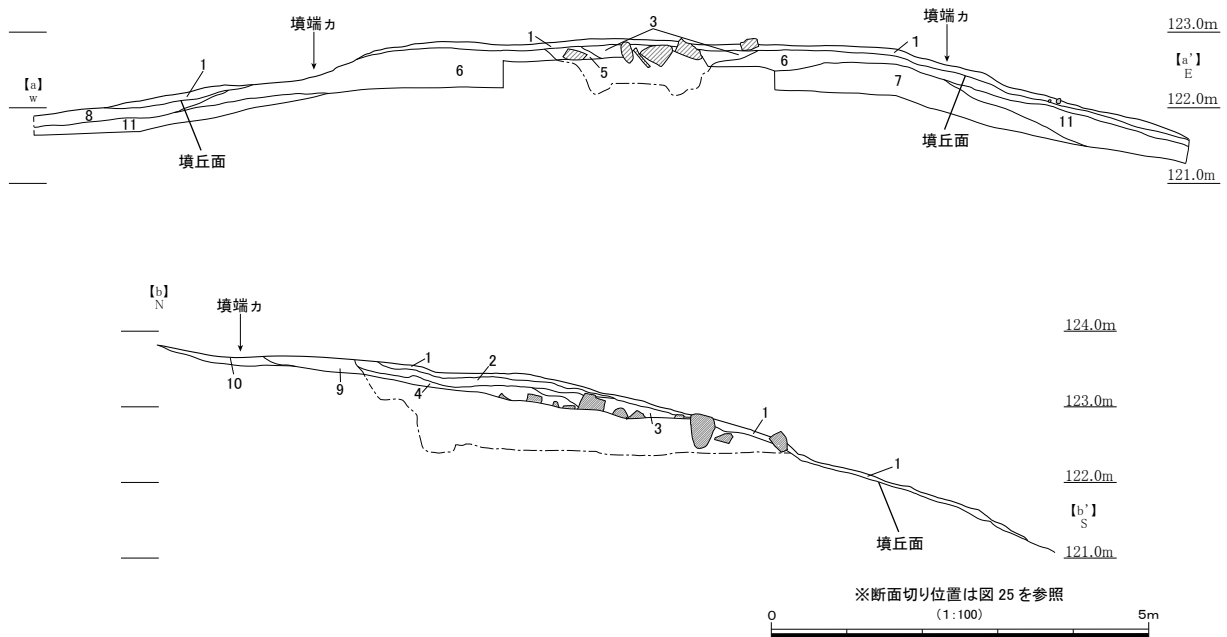
墳丘は、標高 124 m の丘陵から南に延びる尾根上に築かれており、3号墳とは立地が異なる。

また、4号墳から南へ約 80m の位置には、金龍寺川によって形成された谷があり、4号墳の築かれた丘陵までが急峻な斜面になる。

【墳形と規模】

4号墳は、表土層直下で石室掘方と天井石を確認したため、明確な墳丘盛土を確認できず、墳形と規模には検討の余地が残る。

墳形は、全長 9.1 m にわたり直線的なテラスを 1 段削り出し、基盤層を削り出して不整形な台形に成形しており、1 辺約 7 m ～ 9 m 程の不整形な方墳と考えられる（図 26）。墳丘盛土は、盛土量を少なくするためか、石室の大部分が石室掘方内に構築されており、天井石が覆う程度の簡易な盛土であったと想定される。なお、周溝およびその痕跡は確認されなかった。周溝は、墳丘の構築方法が簡素化されており、盛土量も少ないため造られなかったものと推測される。



（表土層）

1. 10YR5/2 灰黄褐 極粗粒砂・シルト混細粒砂、 ϕ 3～20 mm の細礫を多く含む

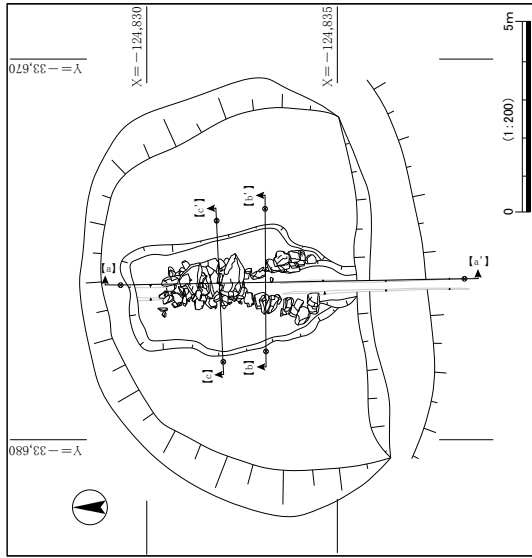
（石室内埋土）

2. 2.5Y 5/2 暗灰黄 極細粒砂・細粒砂混中粒砂、 ϕ 3～10 mm の細礫を含む
3. 2.5Y 5/3 黄褐 極粗粒砂・細粒砂混中粒砂 ϕ 3～10 mm の細礫を含む
4. 2.5Y 5/4 黄褐 極粗粒砂・細粒砂混中粒砂 ϕ 1～10 mm の細礫を含む
5. 10YR5/4 にぶい黄褐 極粗粒砂混細粒砂 ϕ 3～20 mm の細礫を含む、 ϕ 1～50 mm のシルトブロック（基盤層由来）を含む

（基盤層）

6. 2.5Y 6/4 にぶい黄 極粗粒砂・シルト混中粒砂、 ϕ 3～20 mm の細礫を多く含む
7. 10YR6/4 にぶい黄褐 極粗粒砂・中粒砂混シルト ϕ 3～20 mm の細礫を多く含む
8. 10YR5/3 にぶい黄褐 粗粒砂混中粒砂 ϕ 3～20 mm の細礫を多く含む
9. 2.5Y 5/2 暗灰黄 中粒砂
10. 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト・中粒砂混細礫、 ϕ 3～20 mm の細礫を含む
11. 2.5Y 7/3 浅黄 細粒砂混シルト ϕ 3～10 mm の細礫を含む

図 27 4号墳 墳丘断面図



- 【石室内埋土】
 (石室断面図①)
 1. 10YR5/6 黄褐 極細粒砂混細粒砂 φ~10mmの礫を含む
 2. 10YR6/6 明黄褐 極細粒砂混細粒砂 φ~30mmの礫を含む
 3. 10YR5/6 黄褐 粗粒砂混細粒砂 φ~30mmの礫を含む
 (7.5YR6/8 橙 シルトブロックを含む)
 4. 10YR6/6 明黄褐 極細粒砂
 5. 2.5Y 5/4 黄褐 極粗粒砂・細粒砂混中粒砂 φ1~10mmの細礫を含む
 6. 2.5Y 5/4 黄褐 粗砂 φ~30mm程の礫を含む
 7. 10YR5/6 黄褐 粗砂 φ~3cm程の礫を含む
 (貼付層)
 8. 2.5Y 6/6 明黄褐 粗粒砂混細粒砂、直径~20mmの礫を含む
 (2.5Y 6/2 灰黄 シルトブロック混じる)
 9. 2.5Y 6/2 灰黄 細粒砂混シルト
 (10YR5/6 黄褐 極粗粒砂混細粒砂ブロック混じる)
 10. 2.5Y 6/4 にぶい黄 中粒砂混シルト
 (7.5YR6/8 橙 シルトブロック混じる)
- 〈石室掘方〉
 11. 2.5Y 6/6 明黄褐 粗粒砂、φ~20mmの礫を含む
 (2.5Y 7/3 浅黄 シルトブロック混じる)
 12. 10YR6/4 にぶい黄橙 粗粒砂、φ~5mmの礫多く含む
 (10YR6/8 明黄褐 シルトブロック混じる)
 13. 10YR6/6 明黄褐 極粗粒砂混細粒砂、φ~20mmの礫を含む
 (7.5YR6/6 橙 シルトブロック混じる)
 14. 10YR7/4 にぶい黄橙 シルト、φ~20mmの礫を含む
 (10YR5/4 にぶい黄橙 細粒砂ブロック混じる)
 15. 10YR7/4 にぶい黄橙 シルト
 (10YR5/6 黄褐 粗粒砂混細粒砂ブロック混じる)
 16. 10YR6/8 明黄褐 シルト、φ~20mmの礫を含む
 17. 2.5Y 5/4 黄褐 粗粒砂混細粒砂、φ~30mmの礫を含む
 (2.5Y 6/4 にぶい黄 細粒砂ブロック混じる)
 18. 2.5Y 6/6 明黄褐 シルト
 (2.5Y 6/2 灰黄 シルトブロック混じる)
 19. 10YR5/6 黄褐 中粒砂混シルト、φ~20mmの礫を含む
 20. 7.5Y 7/1 灰白 中粒砂混シルト
- 〈包含層〉
 21. 2.5Y 5/2 暗灰黄 極粗粒砂混細粒砂、φ3~20mm細礫を多く含む
 (基礎層)
 22. 10 YR6/4 にぶい黄橙 粗粒砂混極細粒砂 φ3~20mm細礫を多く含む
 23. 2.5Y 5/2 暗灰黄 中粒砂
 24. 7.5YR6/8 橙 シルト

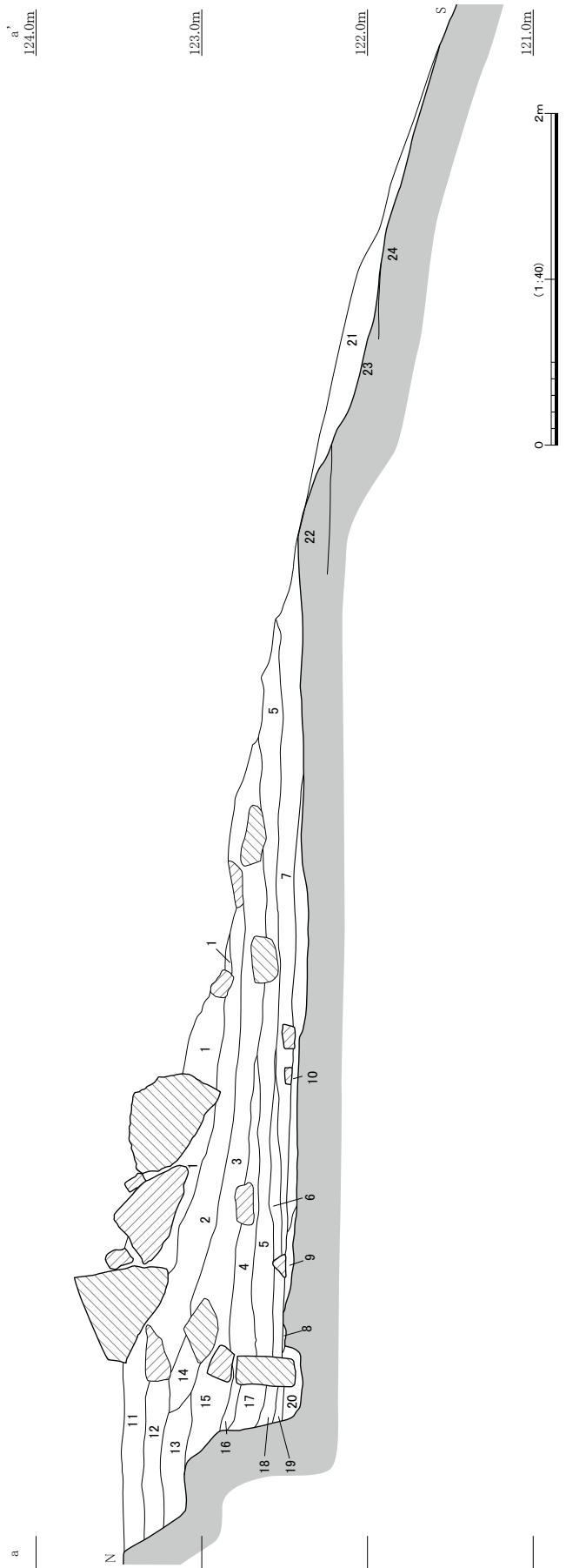


図 28 4号墳 石室断面図①

埋葬施設

【石室】

埋葬施設は、南に開口する無袖式の横穴式石室で、主軸はN-7°-Wを指向する。規模は、全長3.5m、高さ0.9mを測る(図31)。また、石室と正面のテラスの間には墓道を掘削し、石室と接続させる。側壁は、左側壁がほぼ直線に積まれるのに対して、右側壁は開口部へ向かって直線的に内側へ寄る。そのため石室幅は、奥壁付近で0.95m、奥壁から開口部へ向かって約3.0mの位置で幅0.7mを測り、開口部へ向かって徐々に狭くなる。しかし、石室が墓道と接続する手前約0.5mは、幅1.0mを測り幅広になる。また、墓道の両壁の上面には側壁の延長上に石が並べられていた。なお、閉塞などの痕跡は確認できなかった。

石室内には、基盤層由来の礫を多く含む細粒砂が堆積しており、石室の周囲から流れ込んできたものと思われる(図28・29)。埋土から遺物は出土しなかった。

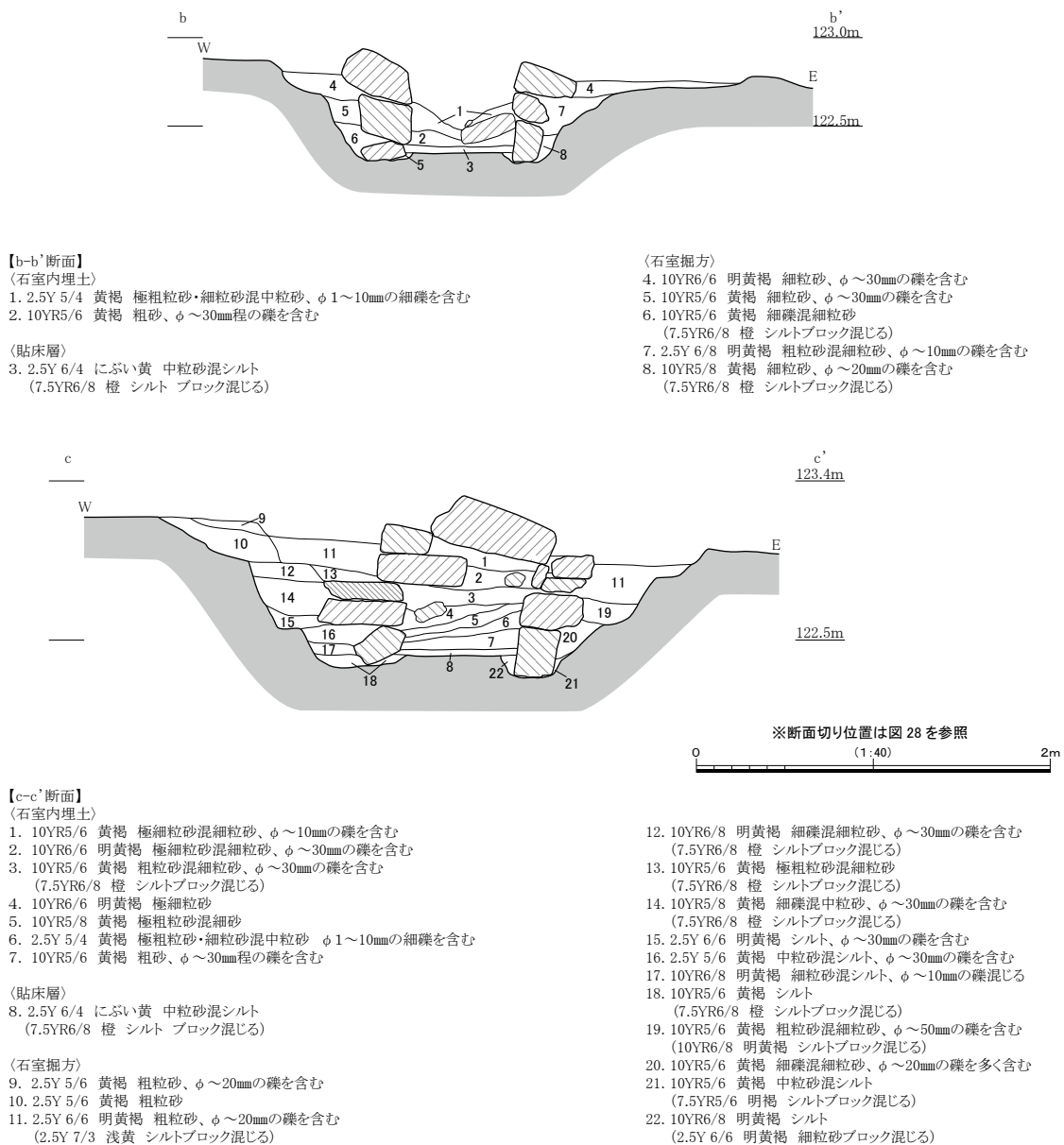


図29 4号墳 石室断面図②

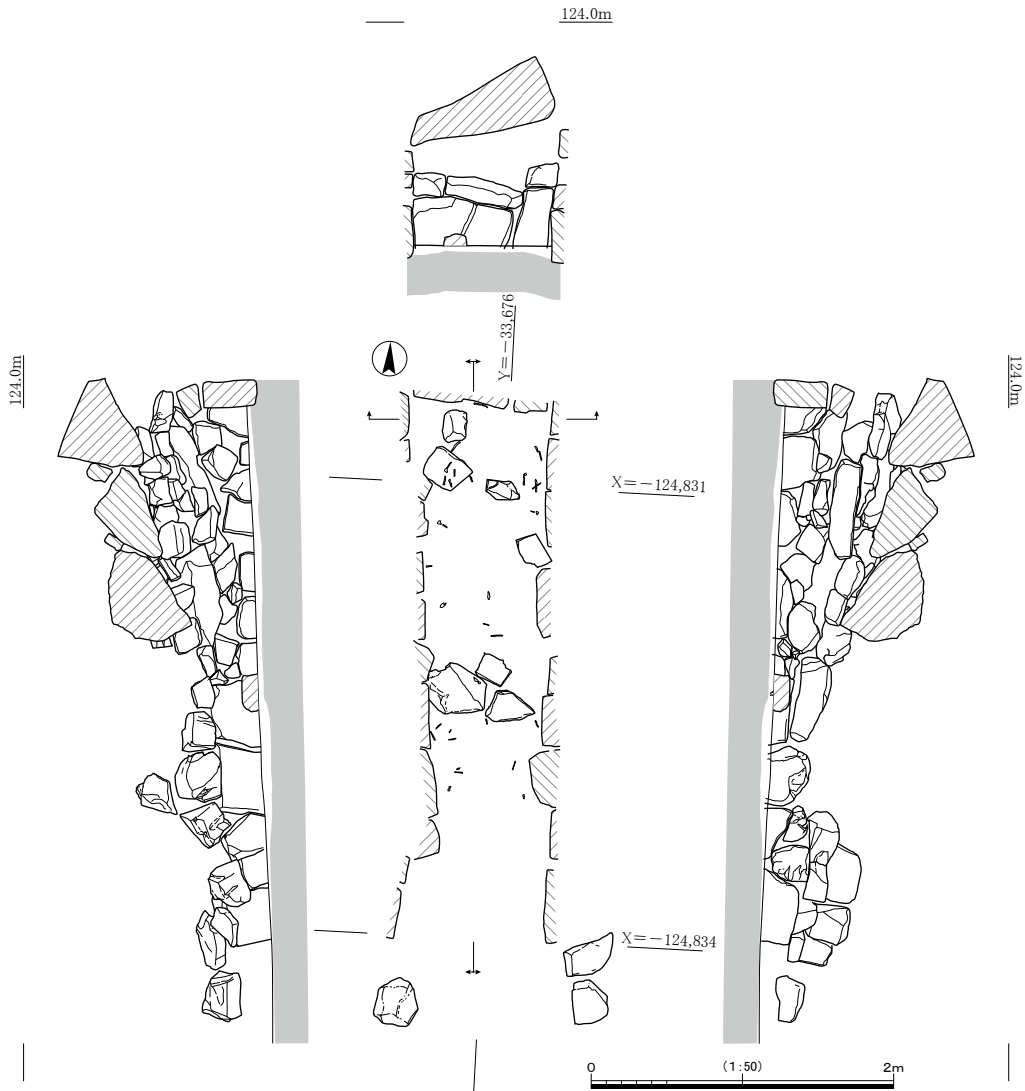


図 30 4号墳 横穴式石室①

石室の構築方法は、奥壁の基底石に大ぶりの角礫を1石と長方形の角礫を縦方向に1石の計2石据える。側壁の基底石は、奥壁から1.8mの位置で据え方が異なる。奥側は、小ぶりの角礫を据え、手前側に大ぶりの角礫を据えている。また、基底石より上段は、手前側の残存状態がよくないため、積み方の差がはっきりとしないが、基底石と同様の位置で積み方が異なる可能性がある。奥側には、大ぶりの角礫と小ぶりの板状の礫が混在している状態で、手前側は石の大きさがほとんど変わらず、やや大ぶりの角礫を積み上げている。側壁の積み方は、手前側に大ぶりの基底石を用いることや側壁の石の大きさが揃えられており、手前側の積み方が丁寧な印象を受ける（図30・31）。

石室に用いられた石材は、3号墳と同じ種類である。しかし、チャートは色調がやや異なり、赤褐色と灰色、白色の3種類である。天井石と奥壁の基底石には、灰色ないし白色チャートが用いられる。

石室掘方は、表土層を除去後の基盤層の上面で確認された。規模は、南北5.5m、東西3.1m、深さ1.1mを測る。平面形は、いびつな隅丸方形を呈する。掘方は、大きく3段に掘りこまれている。上から1段目を広く浅く掘る。2段目は石室を構築する位置を隅丸方形に掘削し、基盤層が礫を多く含むものからシルトに変化する深さまで掘る。そして、3段目は底面を床面の高さまで掘削する。その後、基底石を据える箇所を「コ」字状に布掘り状に掘削している。その後、石室の圧密の影響を受けているが、基

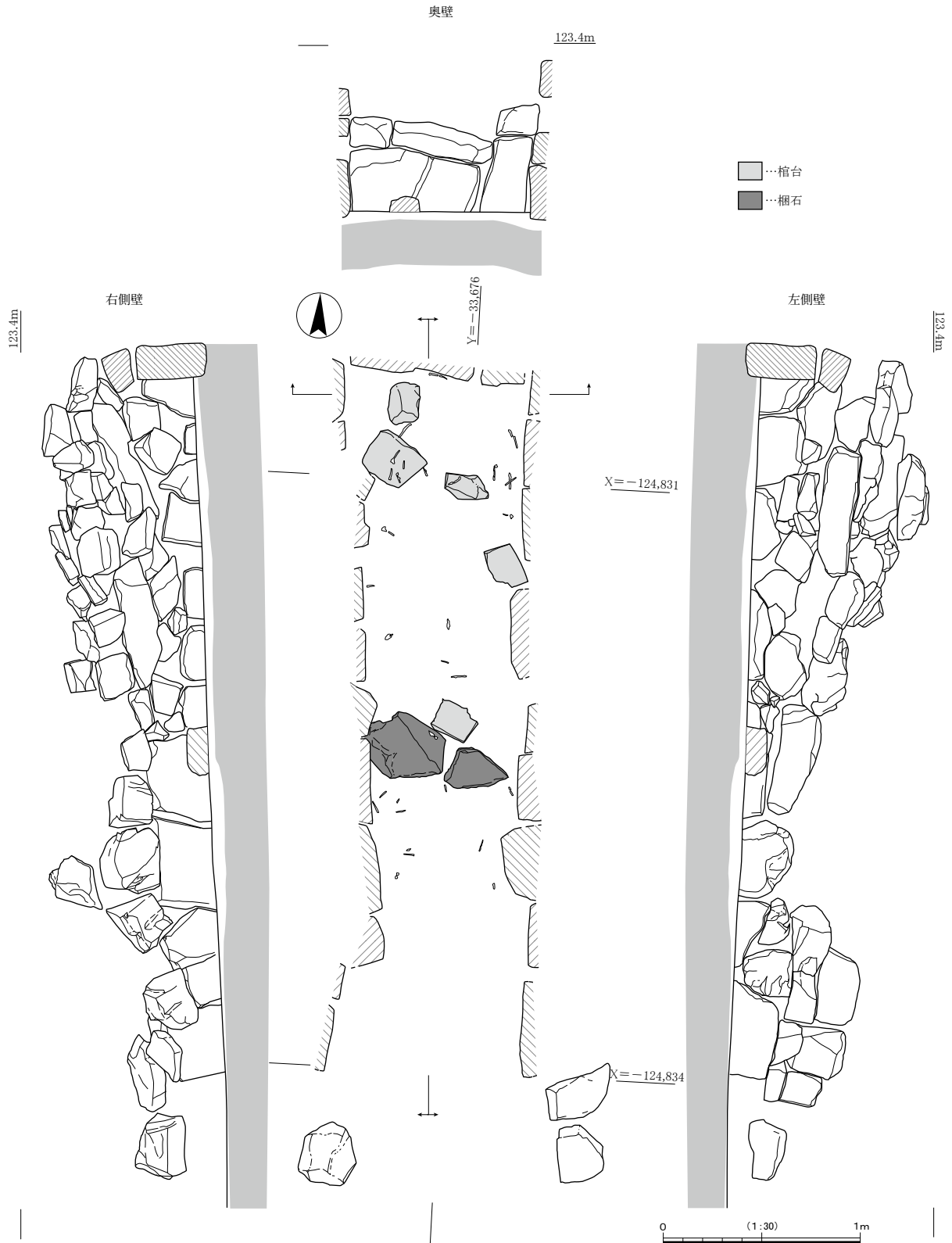


図 31 4号墳 横穴式石室②

底石の上面の高さをある程度揃えるために、土坑状に掘りくぼめたものと思われる（図 32）。

【床面の状況】

床面は、開口部から奥壁へ向かって、地山由来のブロックを含むシルトで層厚 6 cm の貼床を施している（図 28： 8～10 層）。なお、貼床は奥壁から 3.5 m の位置までしか確認されなかったが、石室長

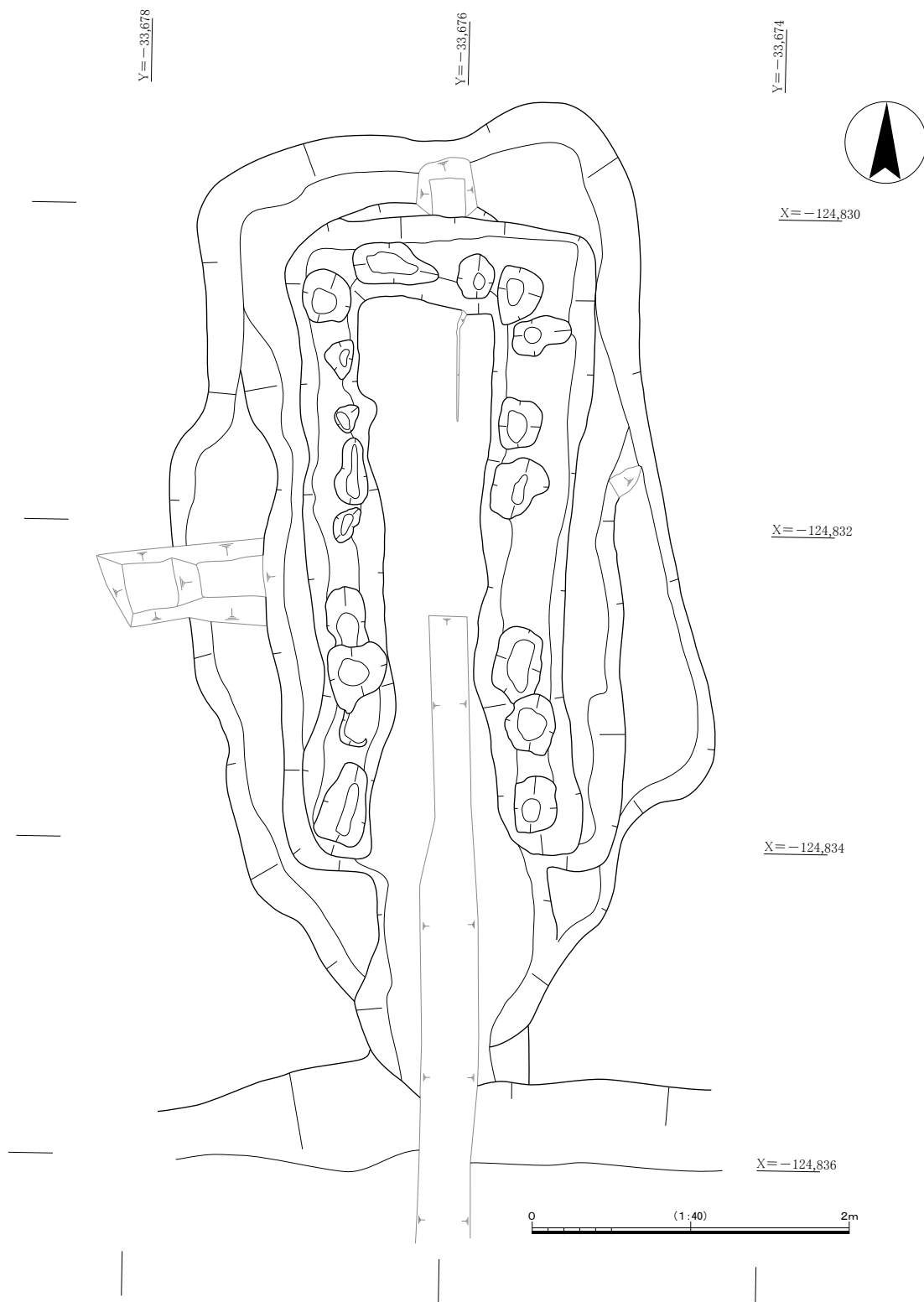


図 32 4号墳 石室掘方平面図

と一致することから玄室と羨道にのみ貼床を施し、墓道には貼床を施さなかったものと考えられる（図 28・31）。

床面からは、棺台と考えられる石と 3号墳と同様に梱石を確認した。無袖式の石室ではあるが、玄室と羨道を区画する意図があったと考えられる。棺台は、奥壁周辺で 4石、梱石の北側で 1石確認した。梱石は、奥壁から南へ 2.0 mの場所で 2石確認した（図 31）。

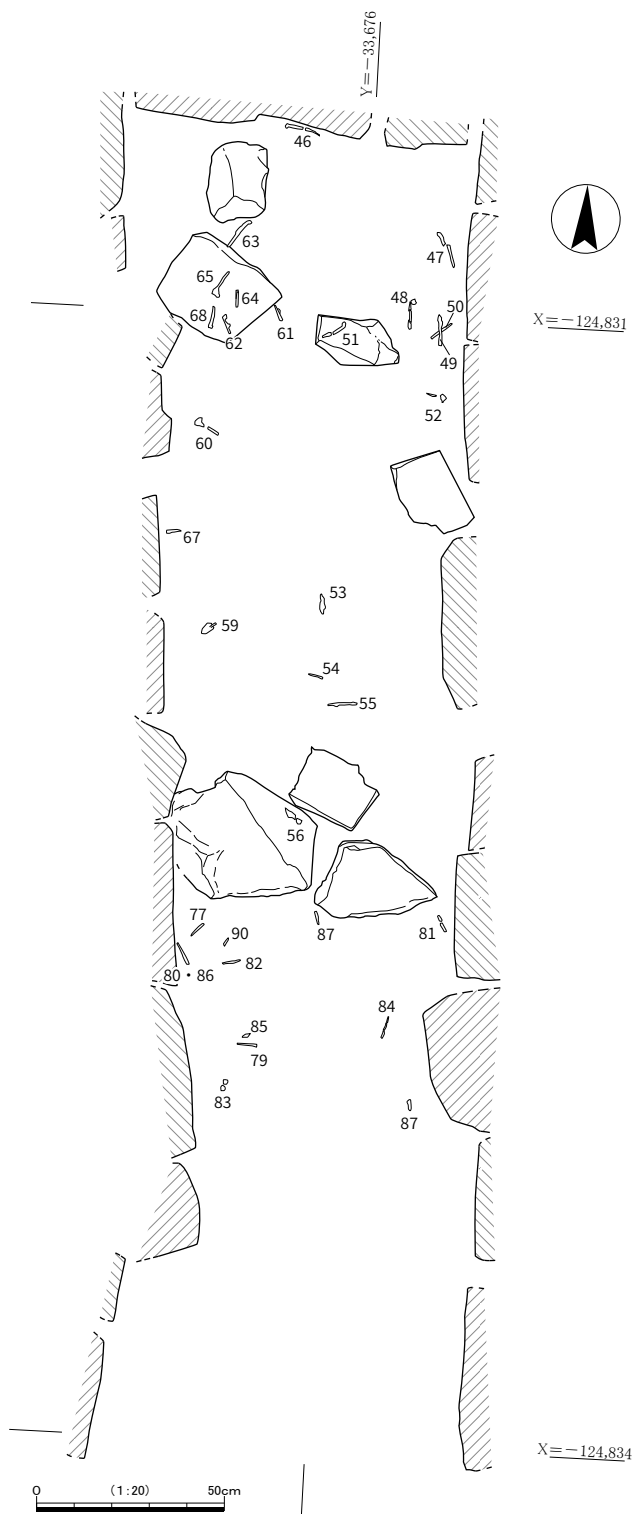


図33 4号墳 床面遺物出土状況図

境にみられる。また、頭部の形状が分かるものは全てこの形状である。断面形態は、正方形のものと長方形があり、正方形になるものが多い傾向にある。

木質は、計14点に遺存する。46は、頭部側で横方向の木目と先端付近で縦方向の木目がみられるが、木目に変化する位置が不明である。この他にも木質は残っているが、棺材の厚さを推定できるものはない。

棺台と考えられる石は、奥壁周辺の鉄釘が上についている2石を除き、規則的に並んでる様子が伺えず、石室を閉塞した痕跡が確認されなかったため、二次的に動かされている可能性がある。そのため、埋葬された木棺の基数は不明だが、柩石を境に鉄釘が奥壁側と開口部に分布していることから、奥壁側と開口部側に1基ずつ埋葬された可能性がある。棺台から復元される棺の規模は、奥壁側で全長1.7m、幅0.7m程度と思われる。なお、床面で敷石などは確認されなかった。

貼床を除去した段階で、奥壁から南へ2.5mの左側壁際で須恵器杯Bが逆位で出土した(図38)。基盤層の上面は1次埋葬面の可能性も考えられたが、貼床から微細遺物も含めて一切遺物が出土していないことや、片付け行為など一切みられなかった。このため、須恵器杯Bは埋葬前に地鎮などに使用されたものの可能性がある。(図37)。

【出土遺物】

遺物は、床面直上と床面から2~3cmほど遊離している状態で木棺に使用した鉄釘が出土したのみで、副葬品は出土しなかった。鉄釘の一部は、棺台と柩石の上についている状態であった。鉄釘は、総数45点のうち完形の物が12点あり、頭部が残っているものも多く、3号墳より残存状態がよい。ここでも、3号墳と同様に奥壁側と開口部側に分けて報告する。

奥壁側(図34・35)

完形の鉄釘は、全長6.4cm~8.9cm、幅0.5cm~0.7cmである(46・47・50・57・60・63・64・66)。頭部の形状は、折り曲げて成形する。折り曲げた際のくびれが頭部と身の

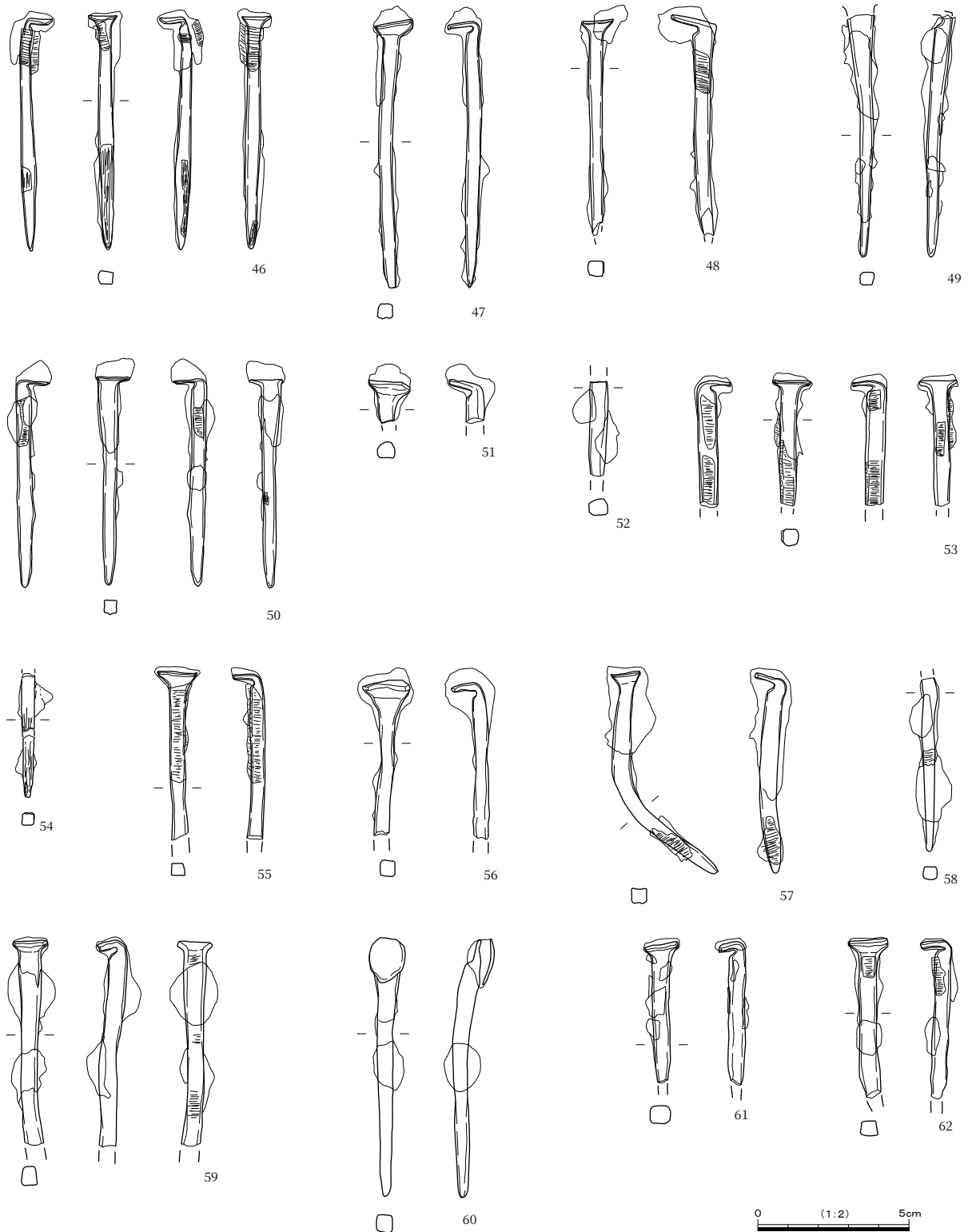


図34 4号墳 出土遺物（奥壁側①）

奥壁側では、総数31点の鉄釘が出土した。その内、完形が8点、頭部のみが11点を数える。また、49は頭部のみが欠損している。このため、奥壁側では少なくとも19点の鉄釘が用いられたと推定できる。

開口部側（図36）

開口部側では、総数14点の鉄釘が出土した。その内、完形が5点、頭部が残存しているものが4点

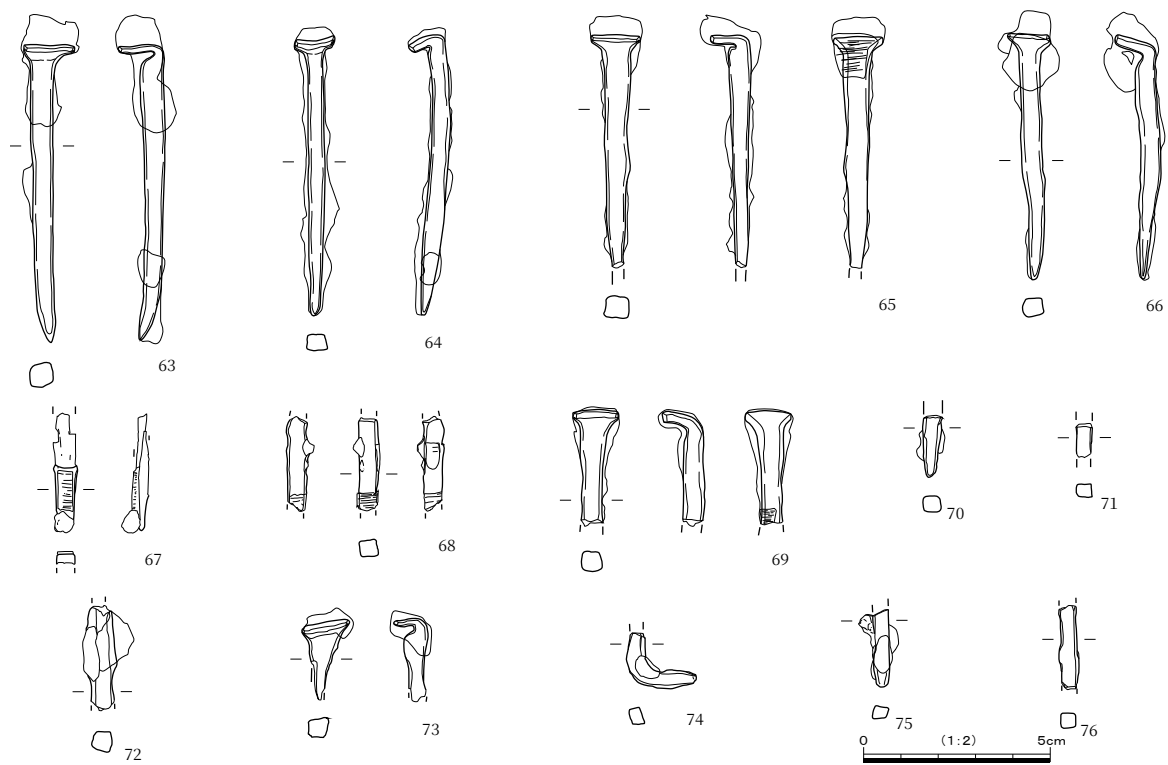


图 35 4号墳 出土遺物（奥壁側②）

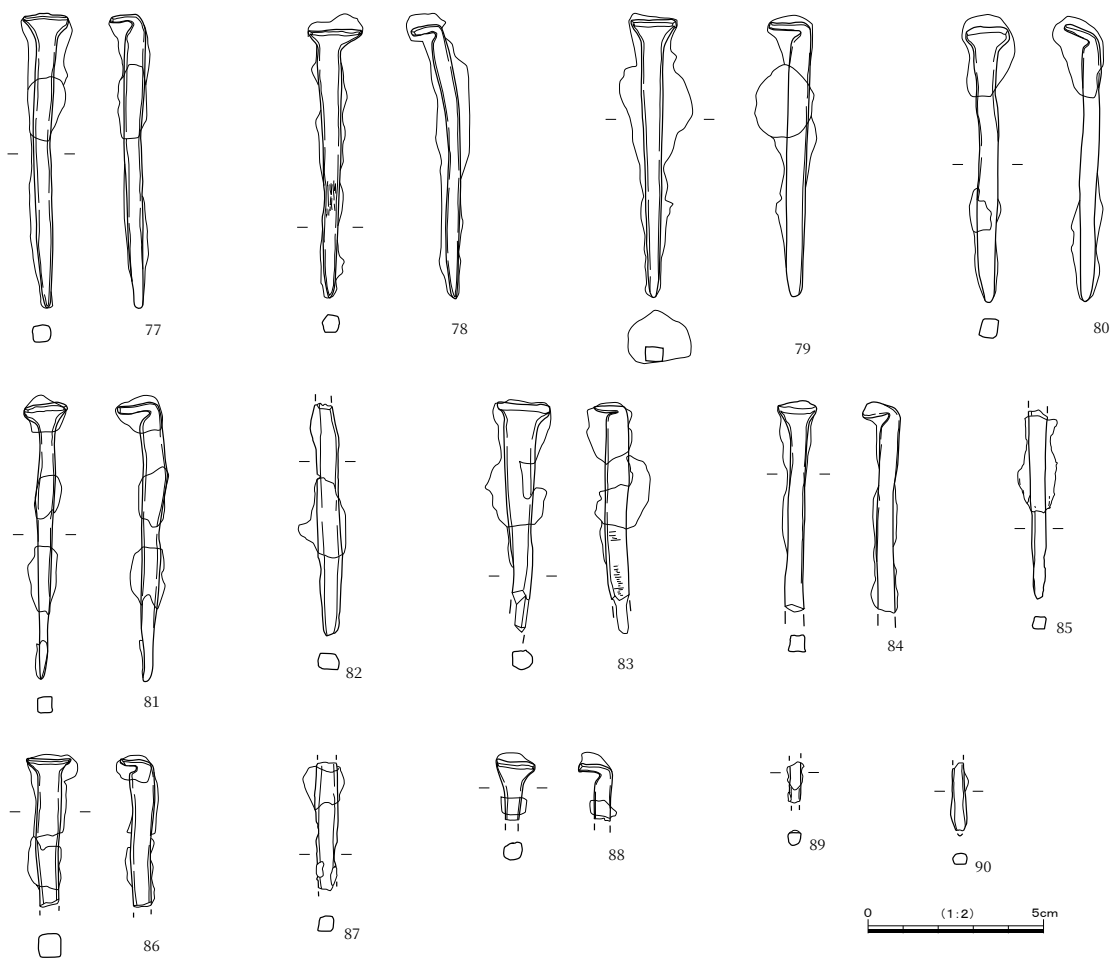


图 36 4号墳 出土遺物（開口部側）

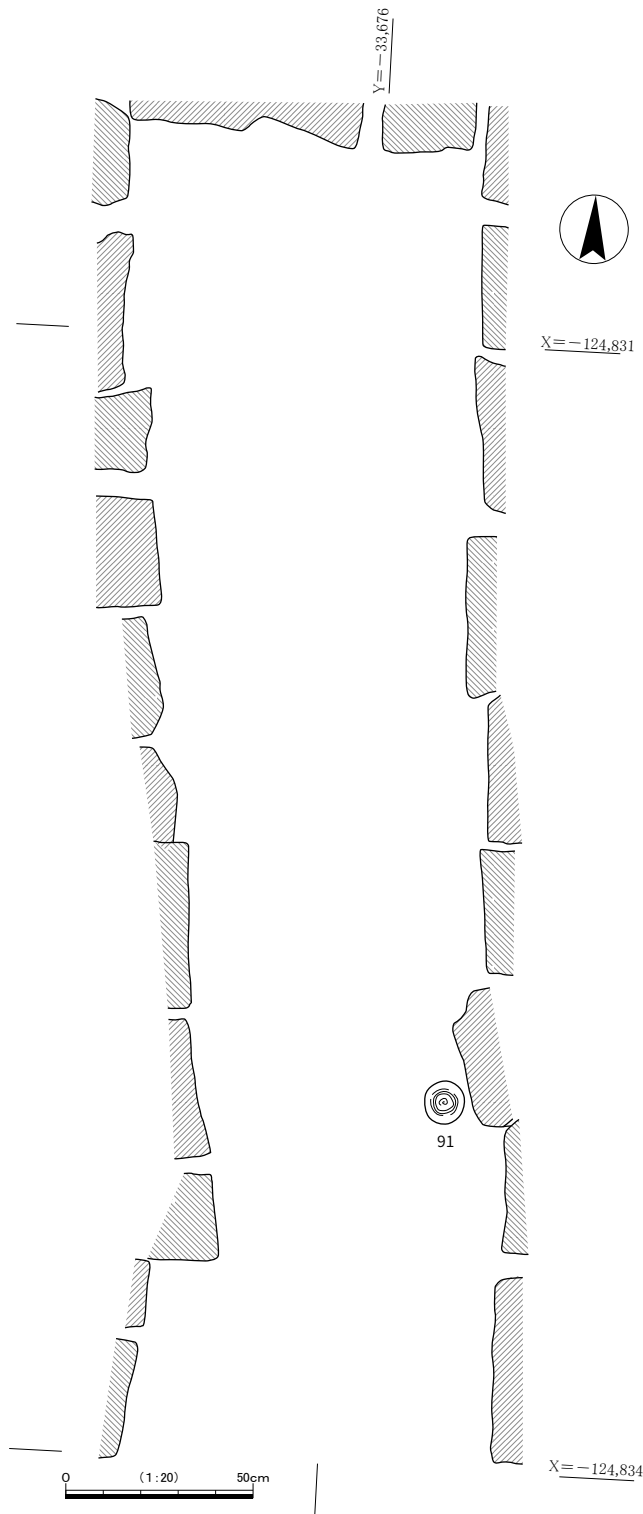


図 37 4号墳 貼床除去後遺物出土状況図

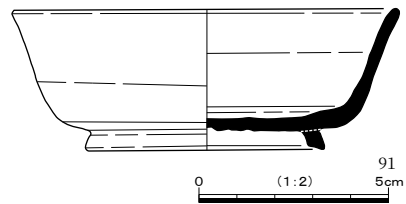


図 38 4号墳 出土遺物

を数える。このため、流失を免れた箇所でも少なくとも9点あるものと思われる。

完形の鉄釘は、全長7.9cm～8.4cm、幅0.4cm～0.5cmである(77～81)。頭部の形状は、全て折り曲げるタイプで、頭部と身の境にくびれがみられる。断面形態は、正方形のものと同長方形があり、正方形になるものが多い傾向にある。

木質は、計2点に遺存する。いずれも、木目に変化する位置が不明で、棺材の厚さを推定できるものはない。

91は、口径10.2cm、器高3.8cmを測り、完形品である(図38)。口縁部は、一部に焼き歪みが見られる。口縁端部は、やや外反させ丸くおさめる。内面は、見込み部から口縁端部にかけて回転ナデを施す。内面に降灰がみられる。外面は、口縁部に回転ナデを施し、底部は回転ヘラ切り後未調整である。また、高台は外端で接地する。

【築造年代】

4号墳は、貼床層を除去した段階で出土した須恵器杯Bから、飛鳥Ⅲ～Ⅳ(7世紀後半)の時期と考えられる古墳である。なお、鉄釘も最大で8.9cmで、先ほど述べたように10cm未満の小型品なため、須恵器の時期と大きな齟齬はない。

第4節 2区の調査

2区は、標高123mを頂点とする丘陵地である。確認調査では、第2層（包含層）から古代の須恵器が出土したことから、周辺に当該期の遺構が存在することや、石の露頭などはみられなかったが、古墳の存在も想定された。しかし調査の結果、検出された遺構は、丘陵の東側と西側の緩斜面から被熱痕が認められる土坑4基である（図40）。

3土坑 平面形は、円形を呈する。規模は、長径0.8m、短径0.75m、深さ0.35mを測る。内壁は全体に被熱し、硬化する。埋土は3層に大別でき、最下層は炭化物層、中層は焼土塊や炭化物片を含むシルト層、上層は廃絶後に埋積した細粒砂層である。中層から金属滓や鍛造剥片が出土した。

4土坑 平面形は、隅丸方形を呈する。規模は、長辺0.8m、短辺0.75m、深さ0.15mを測る。北東隅が削平を受ける。東面および南面の壁が被熱のため赤変する。なお、埋土を洗浄したが、微細遺物を含めて、遺物は全く出土しなかった。

5土坑 平面形は、隅丸方形を呈する。規模は、長辺0.4m、短辺0.35m、深さ0.1mを測る。北面および西面の壁が被熱のため赤変する。埋土は2層で、上層は焼土塊や炭化物片を多く含む中粒砂・極細粒砂混じりシルト層、下層は炭化物層である。なお、埋土を洗浄したが、微細遺物を含めて、遺物は全く出土しなかった。

6土坑 平面形は、円形を呈する。規模は、長径0.75m、短径0.65m、深さ0.3mを測る。内壁は南側を除いて、被熱のため赤変する。埋土は3層で、最下層には炭化物層がみられる。なお、埋土を洗浄したが、微細遺物を含めて、遺物は全く出土しなかった。

土坑の時期は、遺物が出土しなかったため不明である。また、土壌洗浄の結果、3土坑からは金属

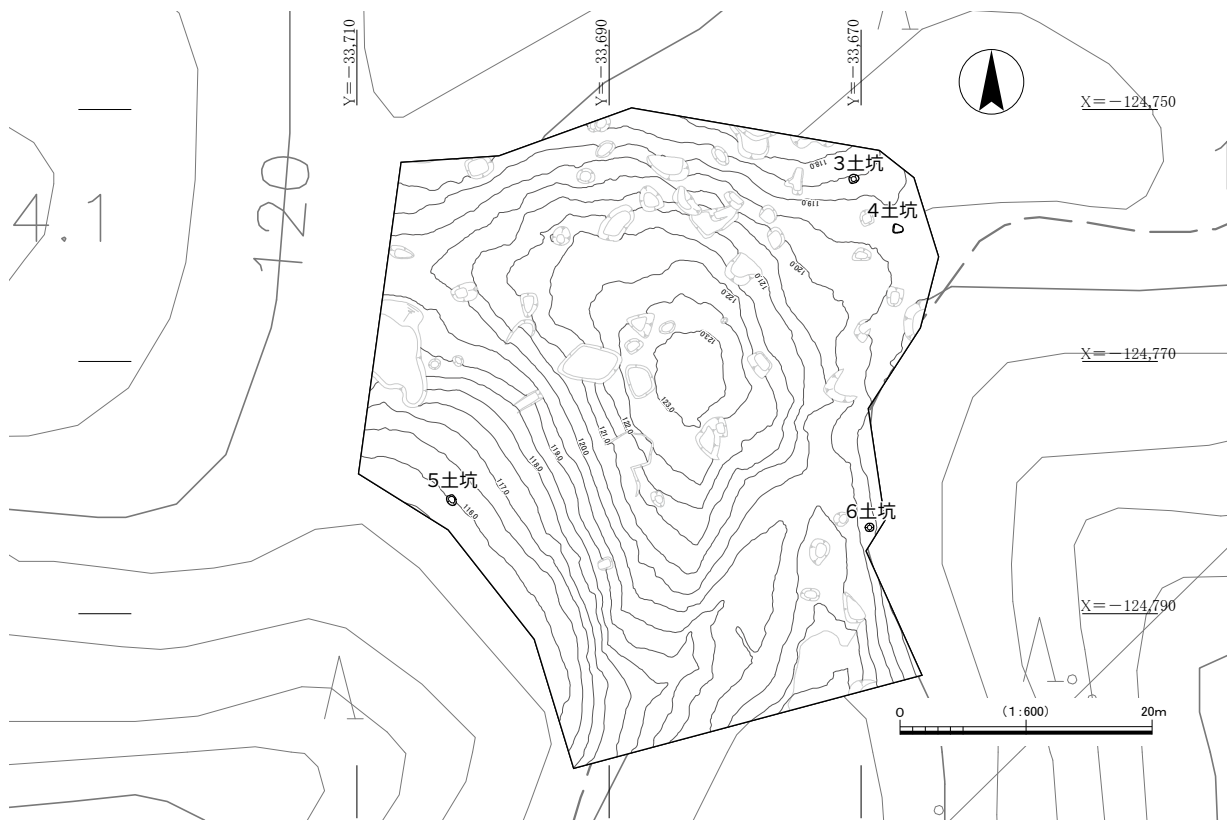


図39 2区 平面図

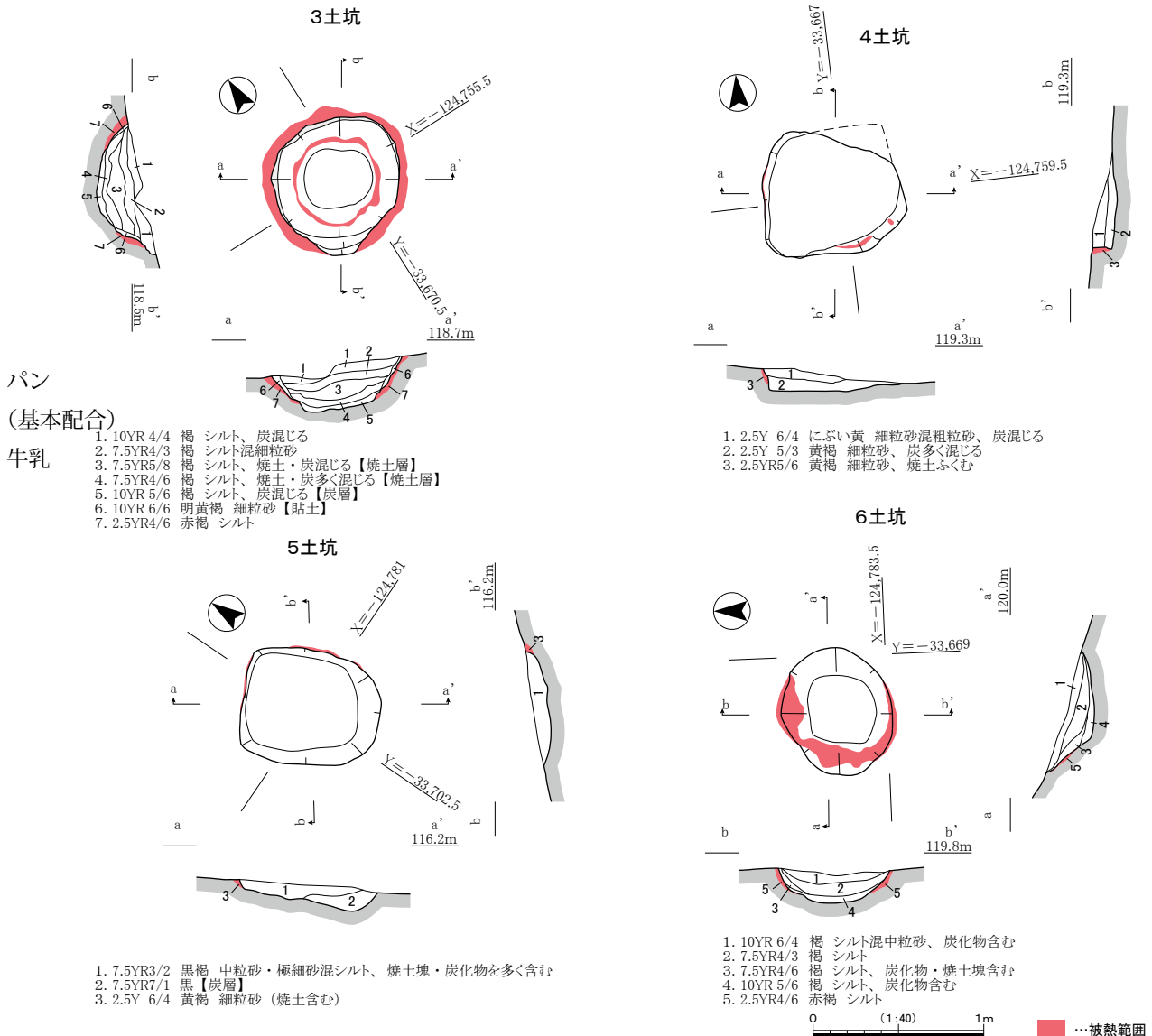


図40 3～6土坑平・断面図

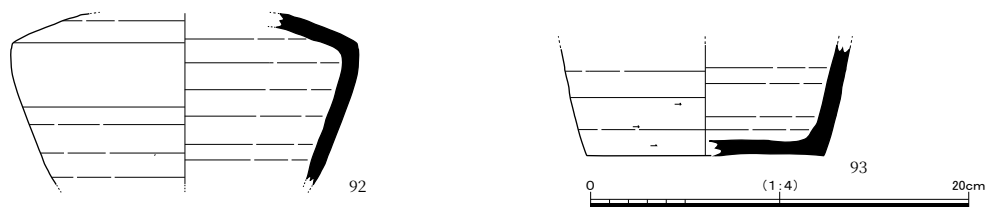


図41 2区 包含層出土遺物

滓や鍛造剥片が出土したため、3土坑は鍛冶関連の遺構と考えられる。その他の土坑に関しては詳細な性格は不明である。しかし、周辺の調査でも同様の遺構が確認されており、古代の火葬墓関連と指摘されており、3土坑を除く土坑は火葬墓関連の可能性はある。

包含層出土遺物(図41) 92・93は、須恵器壺である。92は、肩部から体部にかけて遺存し、肩部径16.2cmを測る。体部外面に回転ヘラケズリ、内面には回転ナデを施す。肩部外面には降灰がみられる。93は、底部片で、底部径12.5cmを測る。底部は、体部へ向けて鋭角に立ち上がる。底部外面は、ヘラ切り後ナデ調整を施す。体部外面には回転ヘラケズリを施し、内面に回転ナデを施す。いずれも、時期は8世紀～9世紀のものと考えられる。

(田中)

第4章 成合3・4号墳の石材について

はじめに

成合3・4号墳の石室に使用された石材の鑑定と産地推定を目的として、種類が異なると見られる石材の一部を採取して鑑定を行った。その鑑定結果を報告する。

a. 調査方法

出土石材を鑑定するため、肉眼および実体顕微鏡によって観察した。その結果について以下に示す。なお、観察は鉱物の種類と組成、色とその特徴、形状や大きさに留意して行った。

b. 観察結果

出土石材を観察した結果、成合3・4号墳ともに①チャート、②玄武岩、③閃緑岩が認められた。

① チャート

3号墳は赤褐色、黒灰色、灰色、4号墳は赤褐色、灰色、白色のチャートであった。



写真1 チャート（赤褐色）：3号墳



写真2 写真1の接写



写真3 チャート（黒灰色）：3号墳



写真4 写真3の接写



写真5 チャート（灰色）：4号墳



写真6 写真5の接写



写真7 チャート（白色）：4号墳



写真8 写真7の接写

② 玄武岩

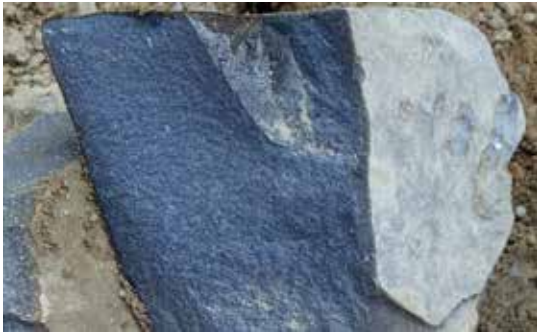


写真9 玄武岩：4号墳



写真10 写真9の接写

③ 閃緑岩



写真11 閃緑岩：4号墳



写真12 写真11の接写

調査地は、宮地ほか（2005）によると、大阪層群の下部及び最下部が分布する地域に位置するが、周辺には丹波帯の本山寺コンプレックスが分布し、北側で超丹波帯の高槻層分布地域に接する。本山寺コンプレックスは頁岩を主体とし、砂岩・緑色岩（玄武岩）・チャートを含む。チャートには赤褐色、黒灰色、灰色があり、砂岩（本山寺砂岩）は黒灰色の不淘汰砂岩のAタイプと、淡緑灰色の不淘汰な花崗岩質砂岩のBタイプに区分されている。高槻層は暗灰色ないし暗緑灰色の細粒～中粒の成層砂岩を主体とし、暗灰色の泥岩が挟在される。また、西方の茨木複合花崗岩体では閃緑岩が産出する。

出土石材には上述のようにチャートと玄武岩、閃緑岩がある。薄片を作製しての観察等行っていないためそれぞれがいずれの地質に属するものかは正確ではないが、周辺に採取候補地があると考えられる。

（大阪市教育委員会事務局文化財保護課 小倉徹也）

引用文献

宮地良典・楠利夫・田結庄良昭・武蔵野実・井本伸広（2005）京都西南部地域の地質。地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）、産総研地質調査総合センター，90p.

第5章 総括

今回の調査で新たに、横穴式石室を埋葬施設とする終末期の古墳を2基確認した。そして、未調査であるが成合3号墳の西に、成合2号墳とする墳丘状の高まりと石が露出した箇所を確認した。

ここでは、今回新たに見つかった古墳の位置付けを行うため、調査成果をふりかえり、第2章第3節でふれた周辺の古墳との比較を行い、総括としたい。

1. 立地と墳丘

立地 成合3号墳は、標高127mの丘陵の南斜面に、成合4号墳は標高124mの丘陵から南に延びる尾根上に築かれる。また、調査区外の成合2号墳は、3号墳が立地する丘陵の西斜面から舌状に張り出した標高100m程の丘陵の南斜面に位置する。

いずれの古墳も、立地は若干異なるものの、丘陵頂部から南の斜面地に築かれるなど、調査地の南東にある金龍寺谷を意識した立地をしている。また、3基の古墳は同一の丘陵に築かれず、各丘陵に1基ずつ築造され、散在的な分布傾向をみせる(図42)。

墳丘 2基の古墳はいずれも方墳で、3号墳には周溝が伴うのに対して、4号墳では周溝が伴わない。規模は、3号墳が2段築成の可能性があり最大で9m×5m、4号墳が1辺7m程である。なお、2号墳は、墳丘測量の結果から1辺7m程の方墳と推定され、周溝を伴うものと考えられる。(図43)。墳丘の構築方法は、2基で異なる。3号墳は、後背部をカットして周溝と石室掘方を掘削し、墳丘盛土を持つのに対して、4号墳では後背部をカットせず、明確な墳丘盛土を持たず、基盤層を削り出して墳丘

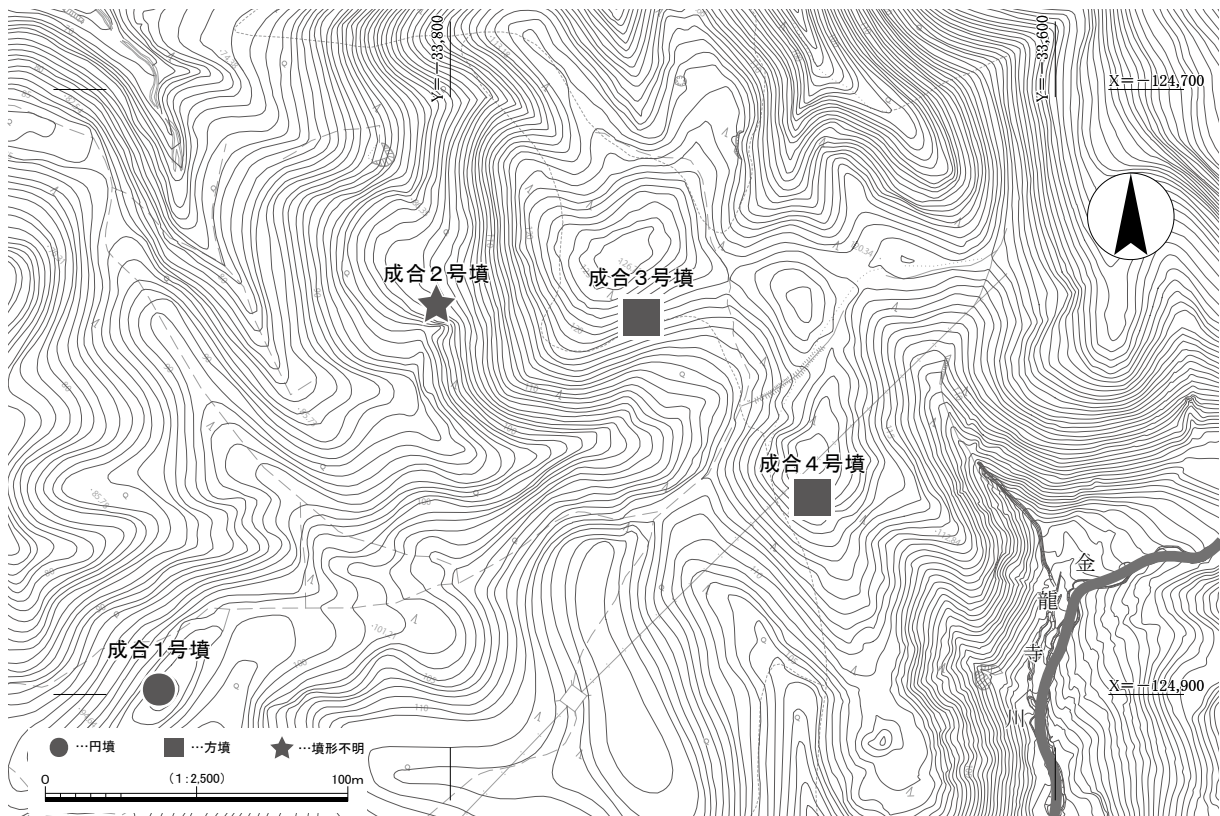


図42 成合古墳群の立地

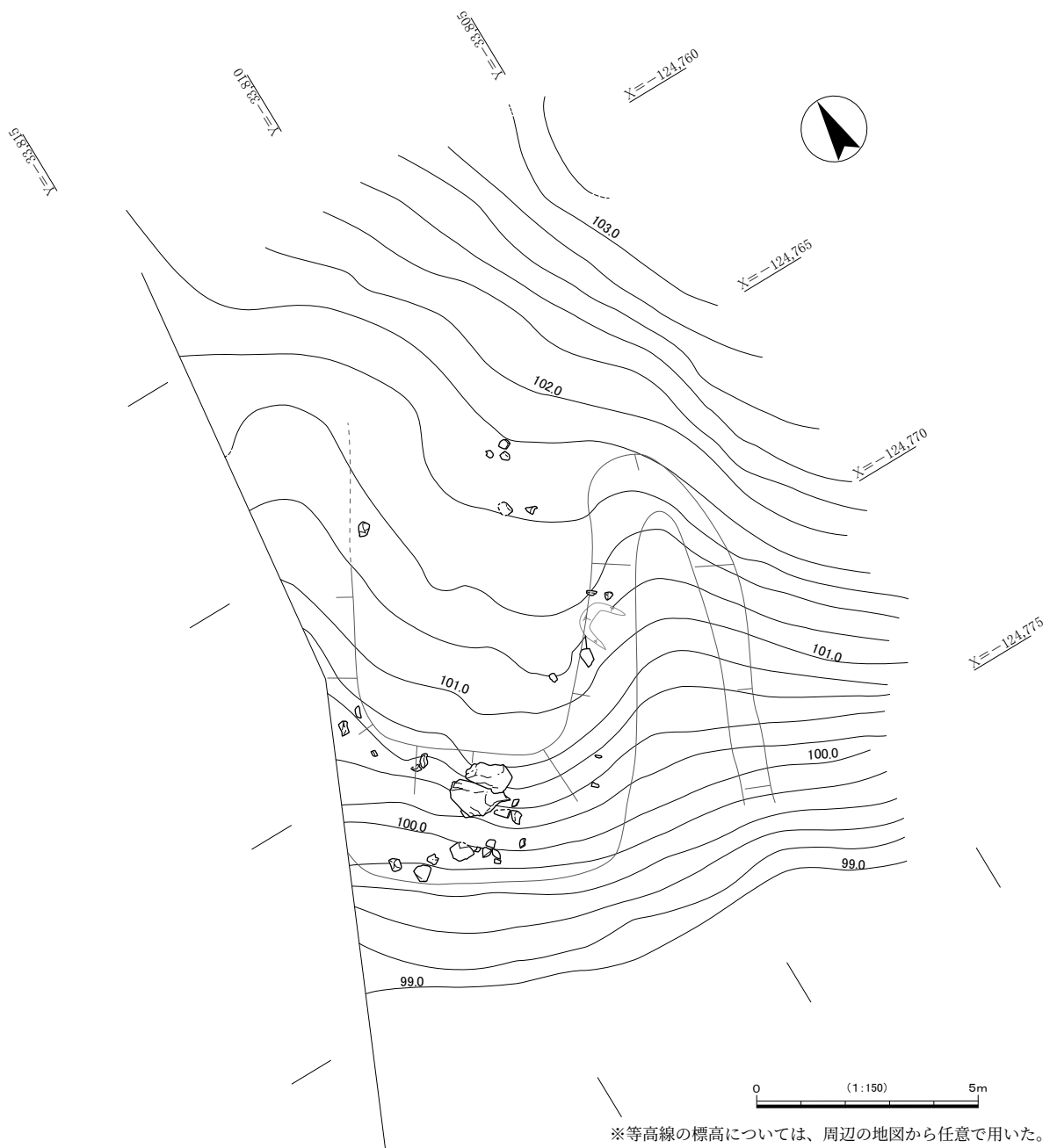


図 43 成合2号墳 墳丘測量図

を構築している。

埋葬施設 いずれの古墳も南に開口する横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。3号墳は、全長 3.8 m、幅 0.7 m、残存高 1.1 mを測る。4号墳は、全長 3.5 m、幅 0.95 m、高さ 0.8 mを測る。規模は、ほぼ同規模である。

石室の構造は、2基とも異なる。3号墳は、奥壁の基底石に長辺 0.65 m、短辺 0.4 m、幅 0.3 mの石を1石、4号墳では、長辺 0.65 m、短辺 0.4 m、幅 0.3 mの石と長辺 0.4 m、短辺 0.2 m、幅 0.3 mの石を縦方向に計2石を据える。また、側壁の基底石は、3号墳では大ぶりの石を用いるが、4号墳では小ぶりの石と大ぶりの石を用いる。しかし、側壁の基底石が奥壁と接する箇所を左側壁と右側壁を対称にみせている点や、使用されている石材、側壁の奥側と手前側で石の積み方が異なっている点は共通する。

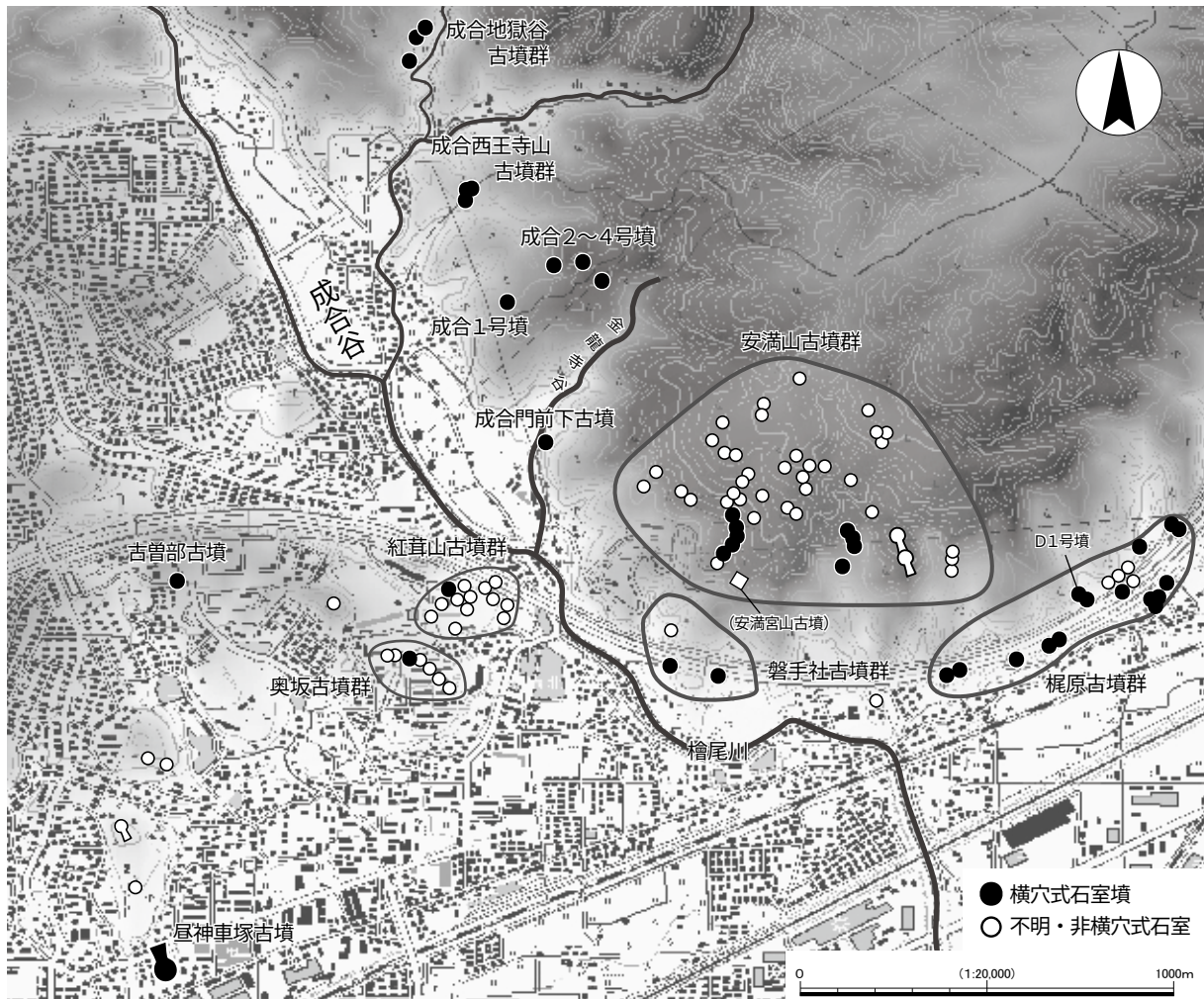


図44 成合周辺の後・終末期古墳の分布

床面からはいずれも、鉄釘と無袖式ではあるが玄室と羨道を区画する柵石を確認した。この柵石を境に、側壁も積み方が異なっており、側壁の積み方によって玄室と羨道を区画した可能性がある。この他に、4号墳では地鎮に用いられた可能性がある須恵器杯Bが逆位で出土した。

なお、2基の古墳に埋葬されていた棺の数は、鉄釘が二次的に移動している可能性が高く、正確な数は不明である。

時期 4号墳は、貼床を除去後に出土した須恵器杯Bから、飛鳥Ⅲ～Ⅳ（7世紀後半）に築造された古墳と考えられる。

3号墳からは時期を示す遺物が出土しなかった。しかし、4号墳が3号墳よりも古墳の構築過程が簡略化されている点から、3号墳の方が4号墳よりも古いと考えられ、7世紀前半から中頃と推定される。

群構成 今回の調査地の周辺には、すでに調査された成合1号墳のほか、調査地外に成合2号墳が存在する。3・4号墳は、立地条件や墳形などから群を形成するものと考えられる。1号墳は、墳形が円墳である点や立地条件が3・4号墳とは異なっており、本古墳群を構成するかは不明である。2号墳は、古墳であった場合、墳形と立地条件が3・4号墳と同じなため、本古墳群を構成する可能性がある。

本古墳群は、現在のところ2基調査されているが、2号墳とした古墳を含めて未調査地に古墳が存在していることを勘案しても総数4基前後の古墳群と推定され、小規模な古墳群と考えられる。時期は、3号墳が現状ではもっとも古く、7世紀前半～中頃までには造墓が始まったものと考えられる。

2. 周辺との比較

本古墳群の位置付け

本古墳群は、檜尾川上流域に位置し、高槻市域の中でも山間部に位置する。檜尾川流域では、安満山山塊に約 40 基からなる安満山古墳群と 10 基程度からなる梶原古墳群が形成される。安満山・梶原古墳群は、群構成や埋葬方法の差から造営集団などが異なることが指摘されている。特に安満山古墳群は、眼下の安満遺跡などを含めた広い範囲を母体とする集団の共同墓地が想定されている。その一方で、檜尾川上流域ではこれまでの調査成果から独立または小規模な群を形成することが明らかになっている。そのため、比較的近接する周辺の村落が母体となる可能性が指摘されている（笹栗 2009、菱田 2013）。

本古墳群は、檜尾川上流域のこれまでの調査成果と同様に小規模な古墳群と考えられる（図 44）。本古墳群が位置する成合谷の東には、地獄谷に面した南東方向の斜面に築かれた成合地獄谷古墳群を北端に、標高 80 m 程の丘陵の南斜面に築かれた成合西王寺山古墳群が確認されている。これらは、7 世紀第 2 四半期から後半にかけて築造された古墳で、本古墳群と造営時期が重複する。また、谷に面した斜面地に形成された成合地獄谷古墳群や同一の丘陵の南斜面に形成された成合西王寺山古墳群に対し、本古墳群は別々の丘陵に築かれており、立地条件が大きく異なる。これらの差は、被葬者の集団や性格を反映しているとみられる。本古墳群は、金龍寺谷を意識した立地をしている可能性が高く、未確認であるが金龍寺谷が成合谷と合流する周辺を母体とするごく小規模な集団の墓域であった可能性がある。

鉄釘について

今回の調査では、2 基の古墳から比較的まとまった数の鉄釘が出土した。3・4 号墳の鉄釘の頭部は、形状が全て同じで、折り曲げて成形しており、折り曲げた際のくびれが頭部と身の境にみられる。檜尾川上流域では、奥坂 A 5・A 7 号墳や紅茸山 C 1 号墳、古曾部古墳、成合西王寺山 1 号墳から鉄釘が出土している。いずれの古墳も墳丘の構築方法や墳形、石室の平面形などに違いがあり被葬者の集団や性格に差が想定されるが、木棺に鉄釘を使用する点は共通する。また、出土している鉄釘は、頭部を折り曲げて成形しており、全て同じ形状である。そのため、本古墳群の周辺では、木棺に鉄釘を使用していた可能性が推測される。この他に、成合地獄谷古墳群や成合西王寺山 1・2 号墳などがあるが、いずれも盗掘を受けており、鉄釘の有無は不明である。

現状では成合谷において、6・7 世紀の集落は確認されていないが、この時期に集落が進出していたと考えられ、その集団は平野部の安満山山塊に埋葬された集団とは異なり、独立した集団であった可能性が指摘されている（笹栗 2017）。その集団の一つの特徴として、終末期古墳の木棺に鉄釘を用いた可能性が高く、個々の古墳群の立地などによって、成合谷内での集団差を反映している可能性がある。

3. 最後に

本古墳群は、周辺における従来の調査成果を踏襲する形で、小規模な古墳群を形成しており、檜尾川上流域では大規模な古墳群を形成しないことを補強するものとなった。一連の調査成果は、これまで動向が不透明であった檜尾川上流域の古墳の動向を知る上で新たな知見をもたらすもので、高槻市域や嶋上郡域で比較・検討し、地域史上に位置付けることが今後必要であろう。

（田中）

引用・参考文献

- 青木敬 2003『古墳築造の研究―墳丘からみた古墳の地域性―』六一書房
- 大阪府教育委員会 2011『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』15
- 河上邦彦 1995『後・終末期古墳の研究』雄山閣
- 喜谷美直ほか 1966「大阪府高槻市磐手杜第7号古墳」『日本考古学年報』14 日本考古学協会
- 笹栗拓 2014「北摂・三島における後・終末期古墳の鉄釘出土古墳」『大阪文化財研究』45（公財）大阪府文化財センター
- 笹栗拓 2016「北摂三島の群集墳と成合地区の後・終末期古墳の位置づけをめぐって」『大阪文化財研究』48（公財）大阪府文化財センター
- 笹栗拓 2017「高槻市成合遺跡群における律令期前後の地域社会の変容」『洛北史学』19 洛北史学会
- 高槻市教育委員会 1965『高槻市文化財調査報告書第1冊 塚脇古墳群』
- 高槻市教育委員会 1968『高槻市文化財調査報告書第4冊 塚原古墳群の研究(I)』
- 高槻市教育委員会 1976『奥坂古墳群発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第9冊
- 高槻市教育委員会 1982『高槻市文化財調査概要VI 嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要6』
- 高槻市教育委員会 2003『平成13・14年度 高槻市文化財年報』
- 高槻市史編さん委員会(編) 1973『高槻市史』第6巻考古編
- 高槻市史編さん委員会(編) 1977『高槻市史』第1巻本編I
- 高槻市立今城塚古代歴史館(編) 2020『群集墳と横穴式石室―古墳時代後期の三島―』
- 高槻市立今城塚古代歴史館(編) 2015『たかつきの発掘史をたどる 附編・高槻市天神町所在『昼神車塚古墳』
- 高槻市立埋蔵文化財調査センター(編) 1996『古首部・芝谷遺跡―高地性集落遺跡の調査―本文編・図版編』高槻市文化財調査報告書第20冊
高槻市教育委員会
- 田中彩太 1978「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」『考古学研究』13-1 考古学研究会
- 富山直人 2007「大阪北部の横穴式石室」『考古学論究―小笠原好彦先生退任記念論集―』真陽社
- 菱田哲郎 2013「7世紀における地域社会の変容―古墳研究と集落研究の接続をめざして―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集
国立歴史民俗博物館
- 平井洸史 2021「古墳時代の大河と河内における釘・鏝の消費様相とその背景」『古代学研究』230 古代学研究会
- 福岡澄男 1969「釘結合木棺の復元と釘について」『滋賀県文化財調査報告書』4 滋賀県教育委員会
- 森本徹 1991「火葬墓と火葬遺構-群集墳周辺にて確認される「焼土坑」の検討-」『大阪文化財研究』2（財）大阪文化財センター
- 森本徹 1999「群集墳の変質からみた古代墳墓の成立過程」『古代文化』51-11(財) 古代学協会
- 森本徹 2000「付章 北摂地域における来栖山南古墳群の位置づけ」『来栖山南墳墓群』（財）大阪府文化財調査研究センター報告書第57集
- 森本徹 2002「群集墳と地域社会」『究班』2 埋蔵文化財研究会
- 独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター 2005『地域地質調査研究報告 京都西南部地域の地質』
- 横穴式石室研究会 2007『近畿の横穴式石室』

表1 3号墳 鉄釘計測表

掲載番号	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	断面形態	木質の方向		完形	その他
					頭部付近	先端付近		
1	奥壁側	8.7	0.6 × 0.6	正方形	—	—	○	
2		(7.5)	0.4 × 0.5	正方形	—	タテ	—	
3		(7.1)	0.4 × 0.7	長方形	—	—	—	
4		(5.2)	0.5 × 0.6	正方形	ヨコ	—	—	歪曲
5		(5.3)	0.4 × 0.4	正方形	—	タテ	—	
6		(5.2)	0.4 × 0.5	正方形	—	タテ	—	
7		(5.0)	0.7 × 0.5	長方形	—	タテ	—	
8		(3.8)	0.6 × 0.5	正方形	ヨコ	—	—	
9		(1.1)	0.4 × 0.6	長方形	—	—	—	
10		(3.1)	0.4 × 0.6	長方形	ヨコ	—	—	
11		(3.3)	0.4 × 0.5	正方形	—	—	—	
12		(3.3)	0.2 × 0.5	長方形	ヨコ	—	—	
13		(1.1)	0.3 × 0.6	長方形	—	—	—	
14		(1.5)	0.4 × 0.5	正方形	—	—	—	
15		(3.9)	0.5 × 0.6	正方形	—	—	—	
16		(1.7)	0.3 × 0.6	長方形	—	—	—	
17		(1.4)	0.3 × 0.4	正方形	—	—	—	
18		(1.5)	0.4 × 0.4	正方形	—	—	—	
19		(2.8)	0.5 × 0.6	正方形	—	ヨコ	—	
20		(3.7)	0.4 × 0.5	正方形	—	—	—	歪曲
21		(2.7)	0.4 × 0.5	正方形	—	ヨコ	—	
22		(3.1)	0.4 × 0.4	正方形	—	—	—	
23	開口部側	(4.8)	0.3 × 0.6	長方形	ヨコ	—	—	
24		(4.2)	0.4 × 0.5	正方形	—	—	—	
25		(4.1)	0.6 × 0.6	正方形	—	タテ	—	
26		(3.9)	0.5 × 0.5	正方形	—	—	—	
27		(4.2)	0.4 × 0.5	正方形	—	—	—	
28		(4.3)	0.5 × 0.5	正方形	—	—	—	
29		(5.9)	0.4 × 0.6	長方形	ヨコ	—	—	
30		(3.4)	0.5 × 0.6	正方形	ヨコ	—	—	
31		(3.6)	0.5 × 0.6	正方形	—	—	—	
32		(3.6)	0.5 × 0.5	正方形	—	ヨコ	—	
33		(3.5)	0.4 × 0.5	正方形	—	—	—	
34		(3.6)	0.3 × 0.5	長方形	—	タテ	—	
35		(3.2)	0.4 × 0.5	正方形	—	ヨコ	—	歪曲
36		(3.0)	0.3 × 0.5	長方形	—	タテ	—	
37		(2.7)	0.4 × 0.5	正方形	—	タテ	—	
38		(2.9)	0.3 × 0.5	長方形	ヨコ	—	—	
39		(2.7)	0.5 × 0.5	長方形	—	タテ	—	
40		(3.1)	0.3 × 0.4	正方形	—	ヨコ	—	
41		(3.3)	0.3 × 0.5	長方形	—	ヨコ	—	
42		(2.9)	0.3 × 0.4	正方形	タテ	—	—	
43		(2.4)	0.3 × 0.5	長方形	—	タテ	—	
44		(1.9)	0.4 × 0.5	長方形	—	—	—	

※括弧付は残存長を示す。

表2 4号墳 鉄釘計測表

掲載番号	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	断面形態	木質の方向		完形	その他
					頭部付近	先端付近		
46	奥壁側	7.7	0.5 × 0.6	正方形	ヨコ	タテ	○	
47		8.9	0.5 × 0.5	正方形	—	—	○	
48		(7.1)	0.5 × 0.5	正方形	ヨコ	—	—	
49		(8.0)	0.5 × 0.5	正方形	—	—	—	
50		7.1	0.4 × 0.5	正方形	ヨコ	タテ	○	
51		(1.6)	0.5 × 0.6	正方形	—	—	—	
52		(3.1)	0.6 × 0.6	正方形	—	—	—	
53		(4.3)	0.5 × 0.6	正方形	ヨコ	—	—	
54		(4.1)	0.4 × 0.4	正方形	—	タテ	—	
55		(5.7)	0.4 × 0.4	正方形	ヨコ	—	—	
56		(5.2)	0.5 × 0.6	正方形	—	—	—	
57		8.1	0.5 × 0.5	正方形	—	ヨコ	○	歪曲
58		(5.7)	0.4 × 0.5	正方形	—	ヨコ	—	
59		(6.8)	0.5 × 0.6	正方形	ヨコ	ヨコ	—	
60		8.6	0.5 × 0.6	正方形	—	—	○	
61		(4.8)	0.5 × 0.6	正方形	—	—	—	
62		(5.3)	0.5 × 0.6	正方形	ヨコ	—	—	
63		8.1	0.6 × 0.7	正方形	—	—	○	
64		7.4	0.4 × 0.6	長方形	—	—	○	
65		(6.2)	0.6 × 0.7	正方形	ヨコ	—	—	
66		6.4	0.5 × 0.6	正方形	—	—	○	
67		(3.1)	(0.3 × 0.5)	長方形	—	ヨコ	—	
68		(2.5)	0.5 × 0.5	正方形	—	ヨコ	—	
69		(3.2)	0.6 × 0.6	正方形	—	—	—	
70		(1.6)	0.5 × 0.6	正方形	—	—	—	
71		(0.9)	0.4 × 0.5	正方形	—	—	—	
72		(2.8)	0.5 × 0.5	正方形	—	—	—	
73		(2.4)	0.6 × 0.6	長方形	—	—	—	
74		(1.8)	0.3 × 0.4	長方形	—	—	—	歪曲
75		(2.1)	0.4 × 0.5	正方形	—	—	—	
76	(2.2)	0.4 × 0.4	正方形	—	—	—		
77	開口部側	8.4	0.5 × 0.6	正方形	—	—	○	
78		8.1	0.5 × 0.5	正方形	—	タテ	○	
79		7.9	0.4 × 0.5	正方形	—	—	○	
80		8.0	0.6 × 0.6	正方形	—	—	○	歪曲
81		7.9	0.5 × 0.5	正方形	—	—	○	
82		(6.6)	0.5 × 0.6	正方形	—	—	—	
83		(6.6)	0.6 × 0.6	正方形	—	ヨコ	—	
84		(6.0)	0.5 × 0.5	正方形	—	—	—	
85		(5.4)	0.4 × 0.4	正方形	—	—	—	
86		(4.4)	0.6 × 0.7	正方形	—	—	—	
87		(3.6)	0.5 × 0.5	正方形	—	—	—	
88		(1.9)	0.5 × 0.6	正方形	—	—	—	
89		(1.1)	0.4 × 0.4	正方形	—	—	—	
90		(1.9)	0.3 × 0.4	長方形	—	—	—	

※括弧付は残存長・幅を示す

写真図版



1

1. 1区 調査前全景 (南東から)



2

2. 1区 全景 (南東から)



1. 3号墳 検出状況〔南東から〕



2



3



4



5

2. 1区 堆積状況〔南西から〕
4. 3号墳 周溝北辺〔西から〕

3. 3号墳 周溝 西辺〔南から〕
5. 3号墳 周溝 東辺〔南から〕



1. 3号墳 全景〔南から〕



2. 3号墳 墳丘東面列石〔東から〕



1. 3号墳 全景〔南東から〕



2. 3号墳 開口部列石〔南から〕



1. 3号墳 石室検出状況〔北から〕



2. 3号墳 石室 右側壁①〔南東から〕



4. 3号墳 石室 右側壁②〔南東から〕



3. 3号墳 石室 左側壁①〔南西から〕

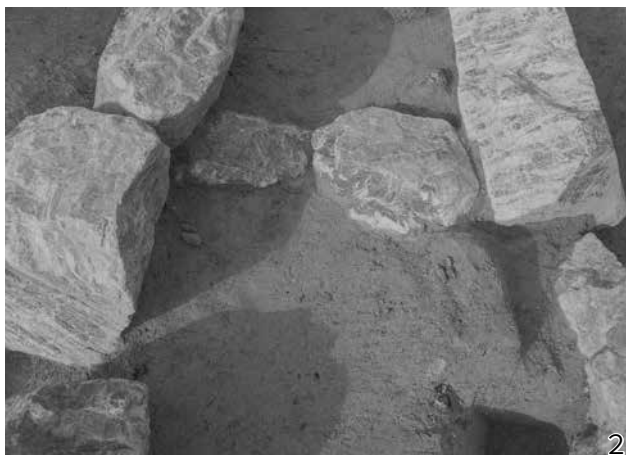
5. 3号墳 石室 左側壁②〔南西から〕



1. 3号墳石室奥壁〔南から〕



2. 3号墳石室床面検出状況〔南から〕



1. 3号墳 奥壁側 遺物出土状況〔南から〕

2. 3号墳 開口部側 遺物出土状況〔南から〕

3. 3号墳 石室内 堆積状況〔南から〕

4. 3号墳 床面 断面〔南から〕



5. 3号墳 墳丘断面 西半〔南から〕

6. 3号墳 墳丘断面 東半①〔南から〕

7. 3号墳 墳丘断面 東半②〔北から〕

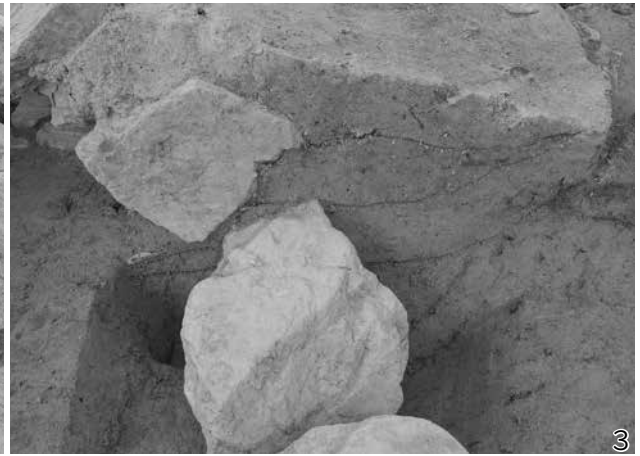
8. 3号墳 墳丘断面 北半〔南東から〕



1. 3号墳 石室掘方検出状況〔南から〕



2. 3号墳 石室掘方断面 西側〔南から〕



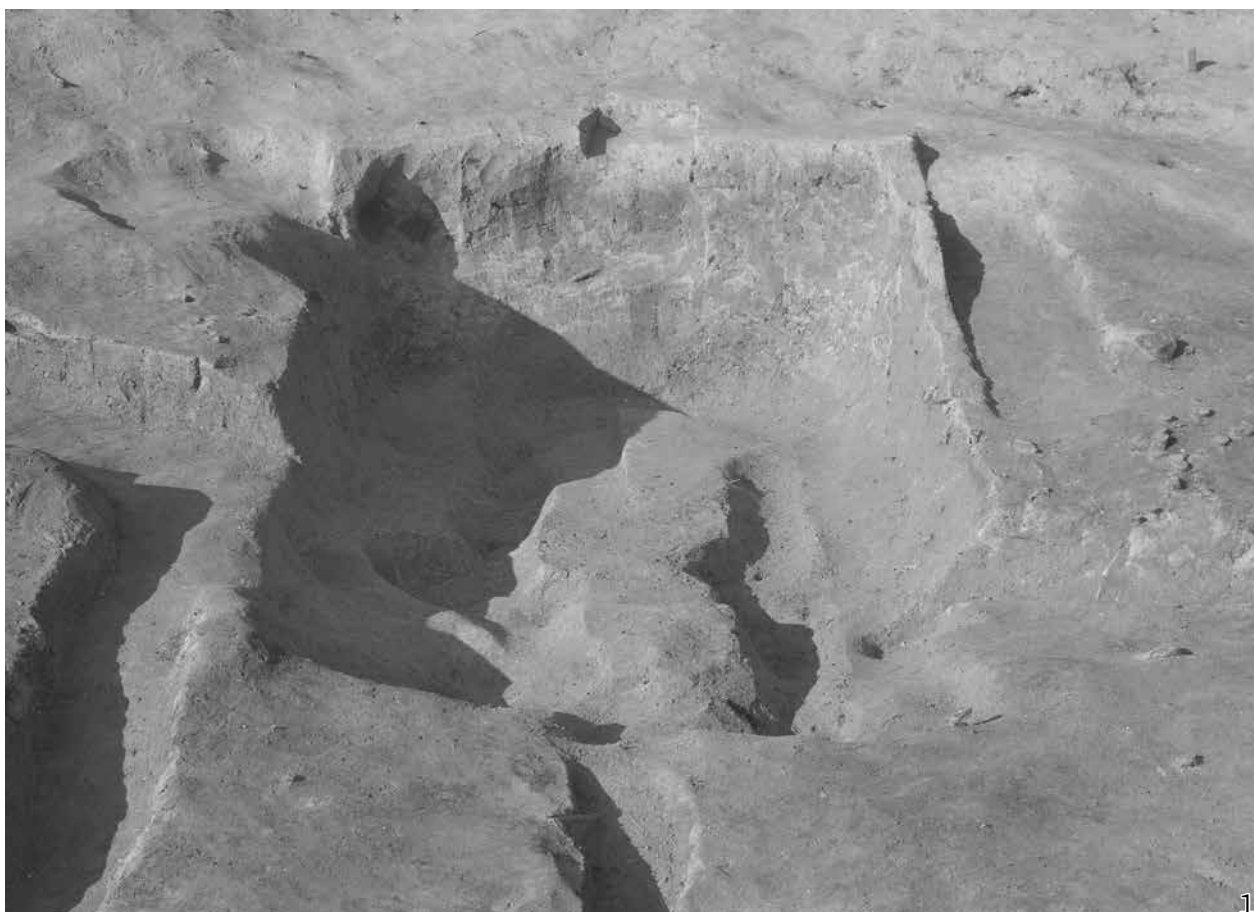
3. 3号墳 石室掘方断面 東側〔南から〕



4. 3号墳 石室掘方断面 北側〔西から〕



5. 3号墳 石室掘方断面 南側〔北西から〕



1

1. 3号墳 石室掘方 完掘状況〔南から〕



2

2. 1溝 完掘状況〔北から〕



3

3. 1溝 断面 北側〔南から〕



4

4. 1溝 断面 南側〔南から〕

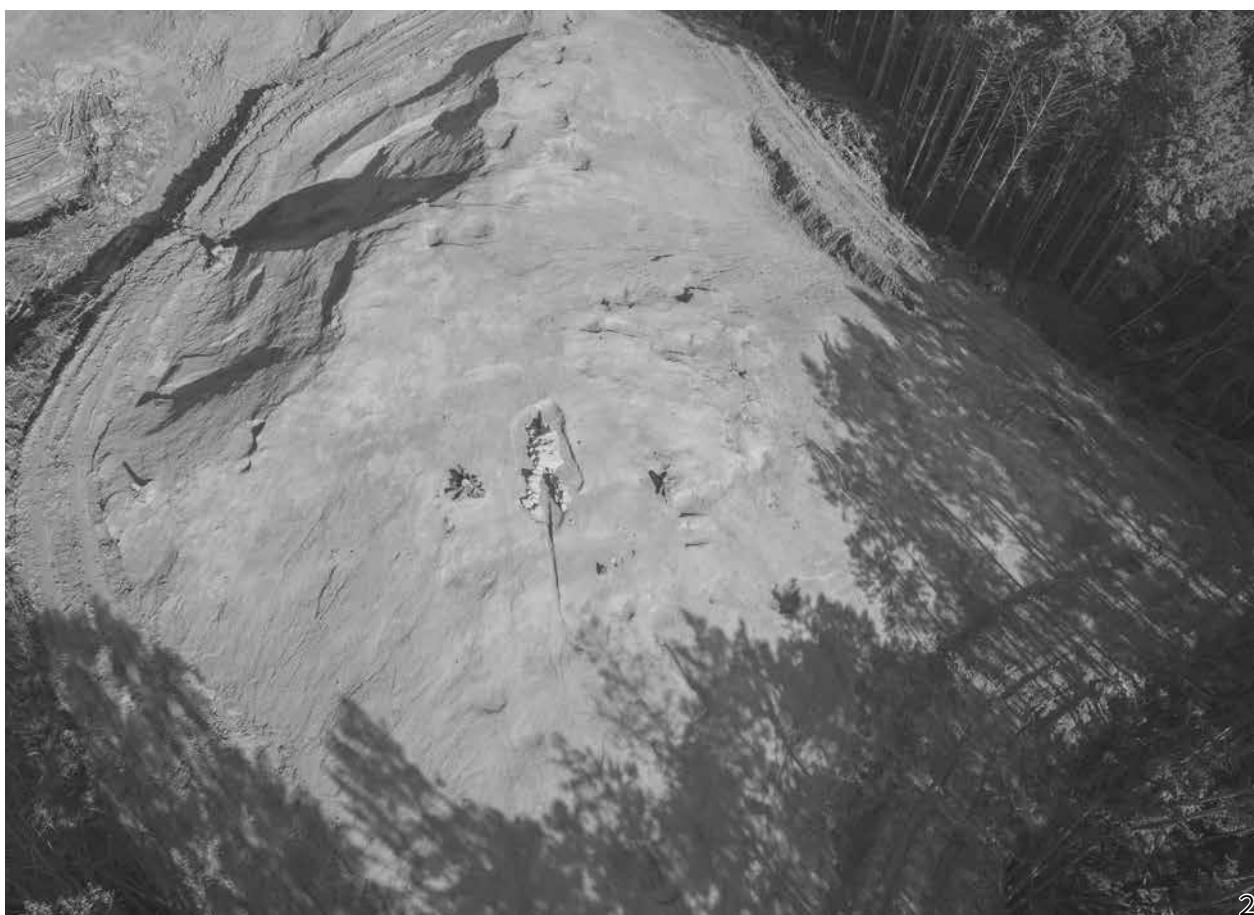


5

5. 1溝 遺物出土状況〔南西から〕



1. 3区 調査前全景〔南東から〕



2. 3区 全景〔南から〕



1. 4号墳 検出状況①〔南から〕



2. 4号墳 検出状況②〔北から〕



3. 4号墳 検出状況③〔南から〕



4. 4号墳 検出状況④〔西から〕



5. 4号墳 検出状況⑤〔東から〕



1. 4号墳 天井石除去後①〔北から〕



2. 4号墳 天井石除去後②〔東から〕



3. 4号墳 石室 左側壁①〔西から〕



4. 4号墳 石室 右側壁〔東から〕



5. 4号墳 石室 左側壁②〔西から〕



1



2



3



4

1. 4号墳 石室内 堆積状況①〔南から〕

3. 4号墳 石室内 堆積状況③〔北西から〕

2. 4号墳 石室内 堆積状況②〔南から〕

4. 4号墳 石室内 堆積状況④〔南西から〕



5

5. 4号墳 石室 床面検出状況〔北から〕



1. 4号墳 奥壁周辺 遺物出土状況〔南から〕



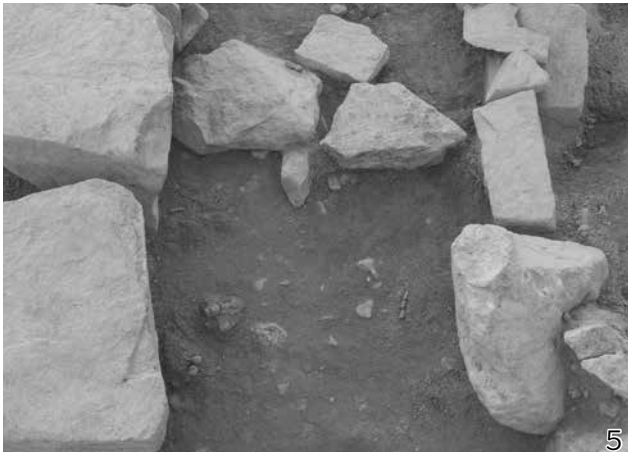
2. 4号墳 床面 遺物出土状況〔南から〕



3. 4号墳 奥壁側 遺物出土状況①〔北から〕



4. 4号墳 奥壁側 遺物出土状況②〔北東から〕



5. 4号墳 開口部側 遺物出土状況〔南から〕



1. 4号墳 石室 貼床層除去後〔南から〕



2. 4号墳 石室 貼床層除去後遺物出土状況〔南西から〕



3. 4号墳 貼床層 断面①〔西から〕



4. 4号墳 貼床層 断面②〔南から〕



5. 4号墳 断割断面〔南西から〕



1. 4号墳 石室掘方 完掘状況〔南から〕



2. 4号墳 石室掘方断面 西側①〔南から〕



3. 4号墳 石室掘方断面 東側〔南から〕



4. 4号墳 石室掘方断面 西側②〔南から〕



5. 4号墳 石室掘方断面 北側〔西から〕



1

1. 2区 調査前 (北西から)



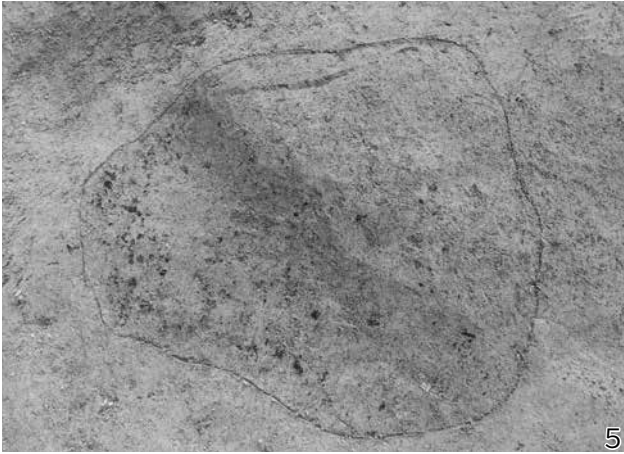
2

2. 2区 全景 (南から)



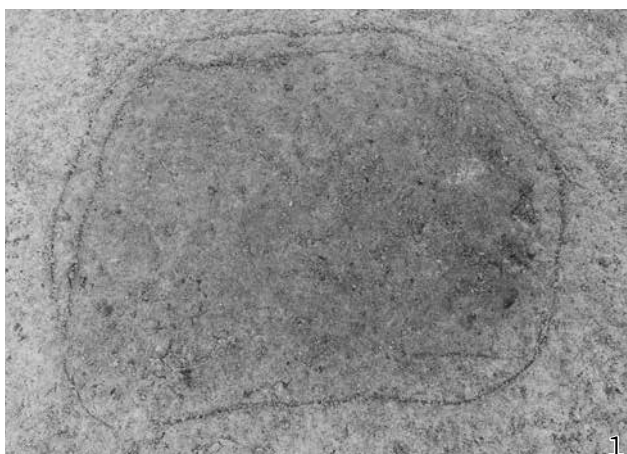
1. 3土坑 検出状況〔北西から〕
3. 3土坑 完掘状況〔北から〕

2. 3土坑 断面〔北から〕
4. 3土坑 被熱範囲〔北から〕



5. 4土坑 検出状況〔北から〕
7. 4土坑 完掘状況〔北から〕

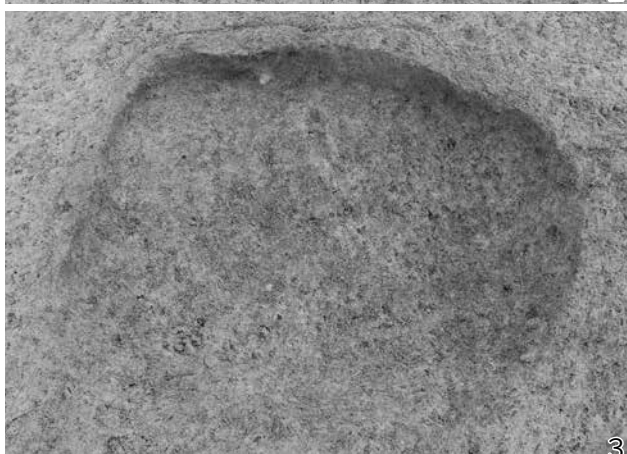
6. 4土坑 断面〔南西から〕
8. 4土坑 被熱範囲〔北から〕



1



2



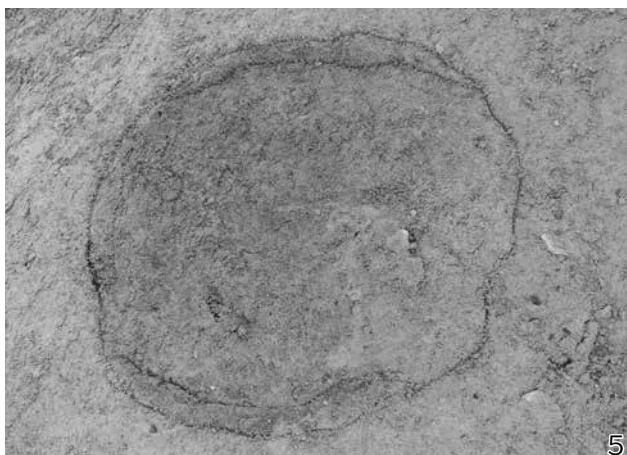
3



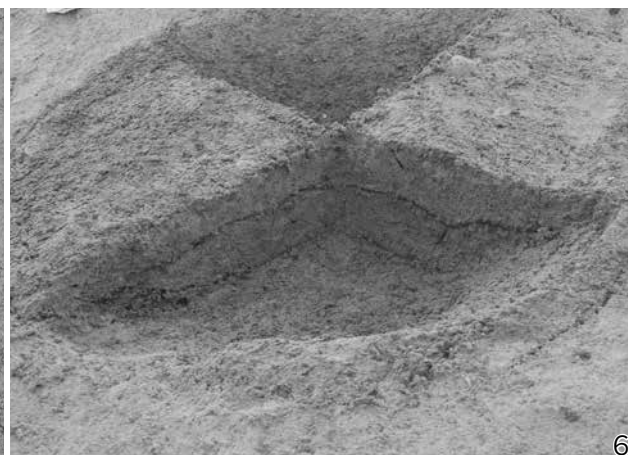
4

1. 5土坑 検出状況〔南西から〕
3. 5土坑 完掘状況〔南西から〕

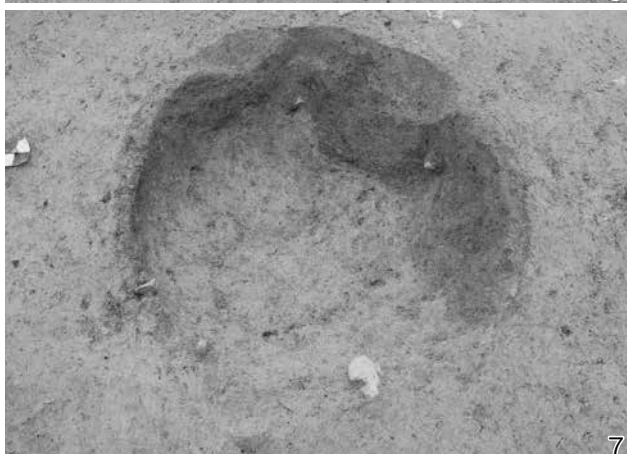
2. 5土坑 断面〔北から〕
4. 5土坑 被熱範囲〔南西から〕



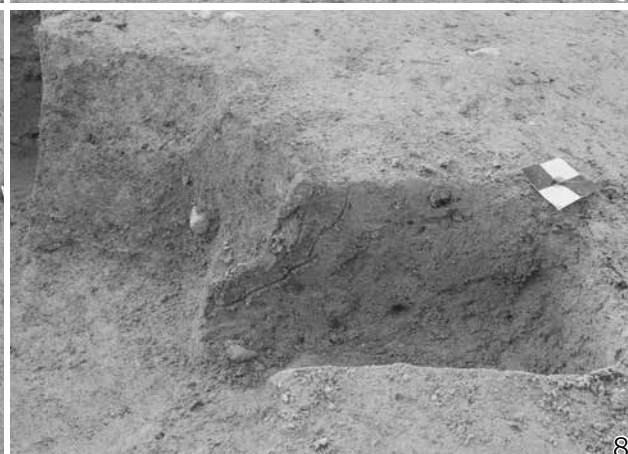
5



6



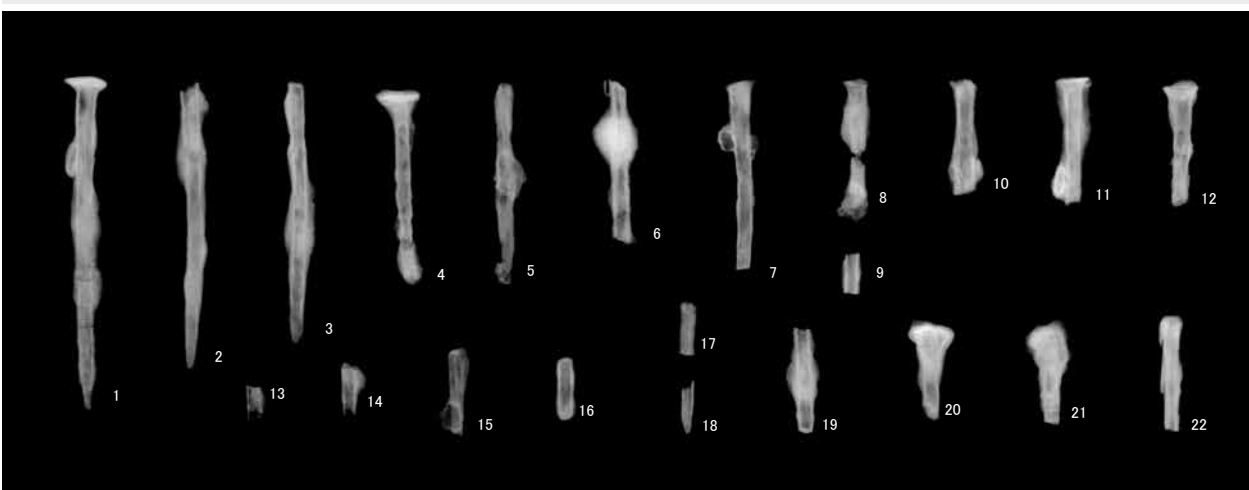
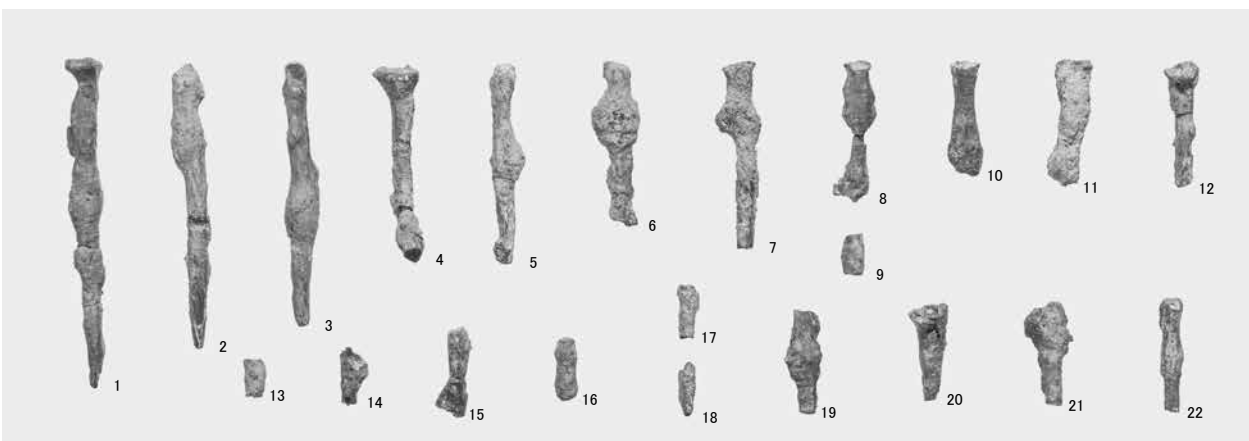
7



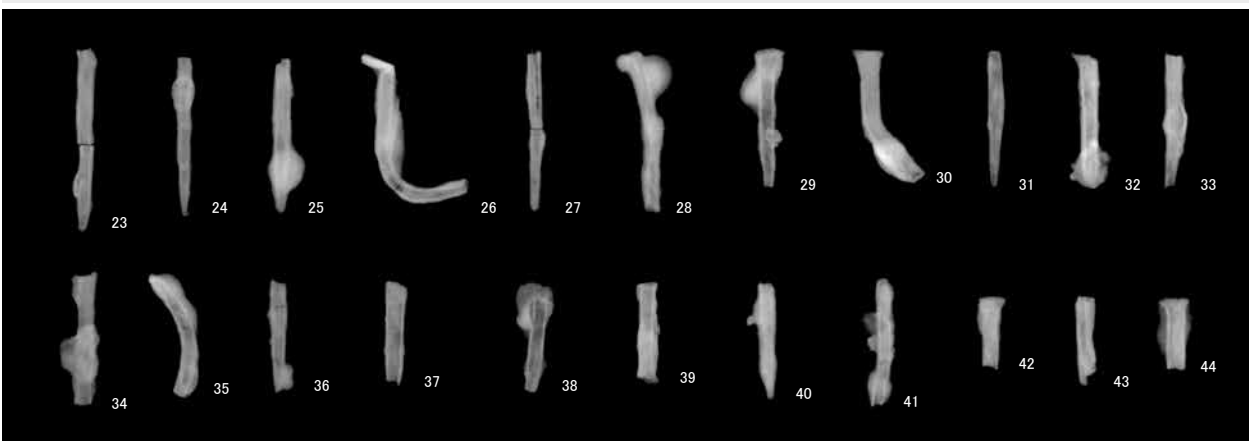
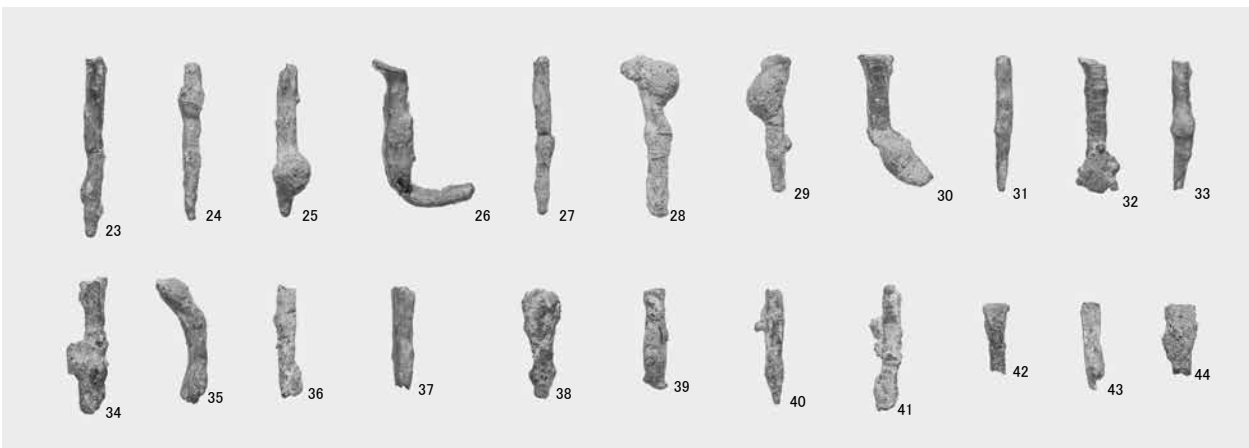
8

5. 6土坑 検出状況〔北から〕
7. 6土坑 完掘状況〔東から〕

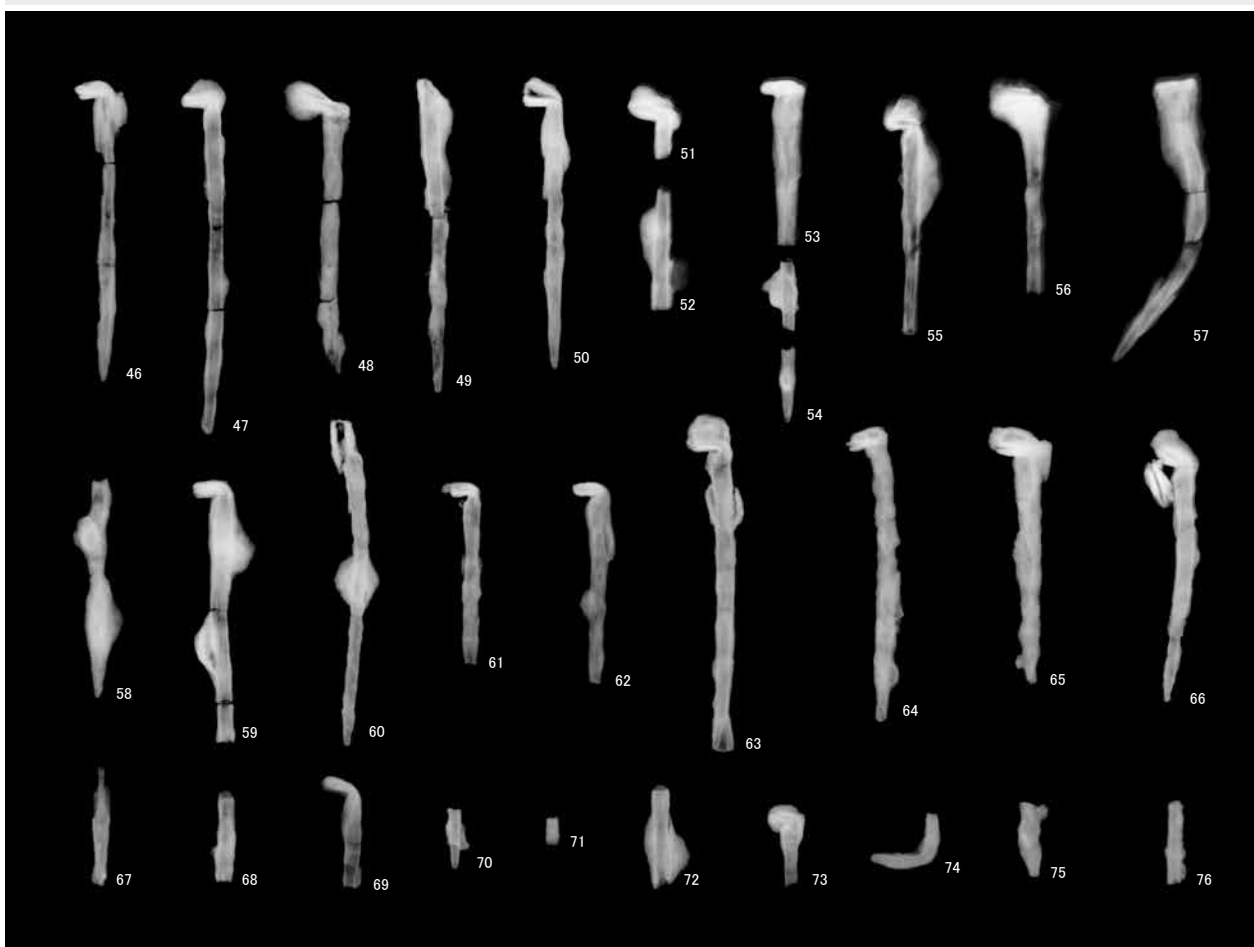
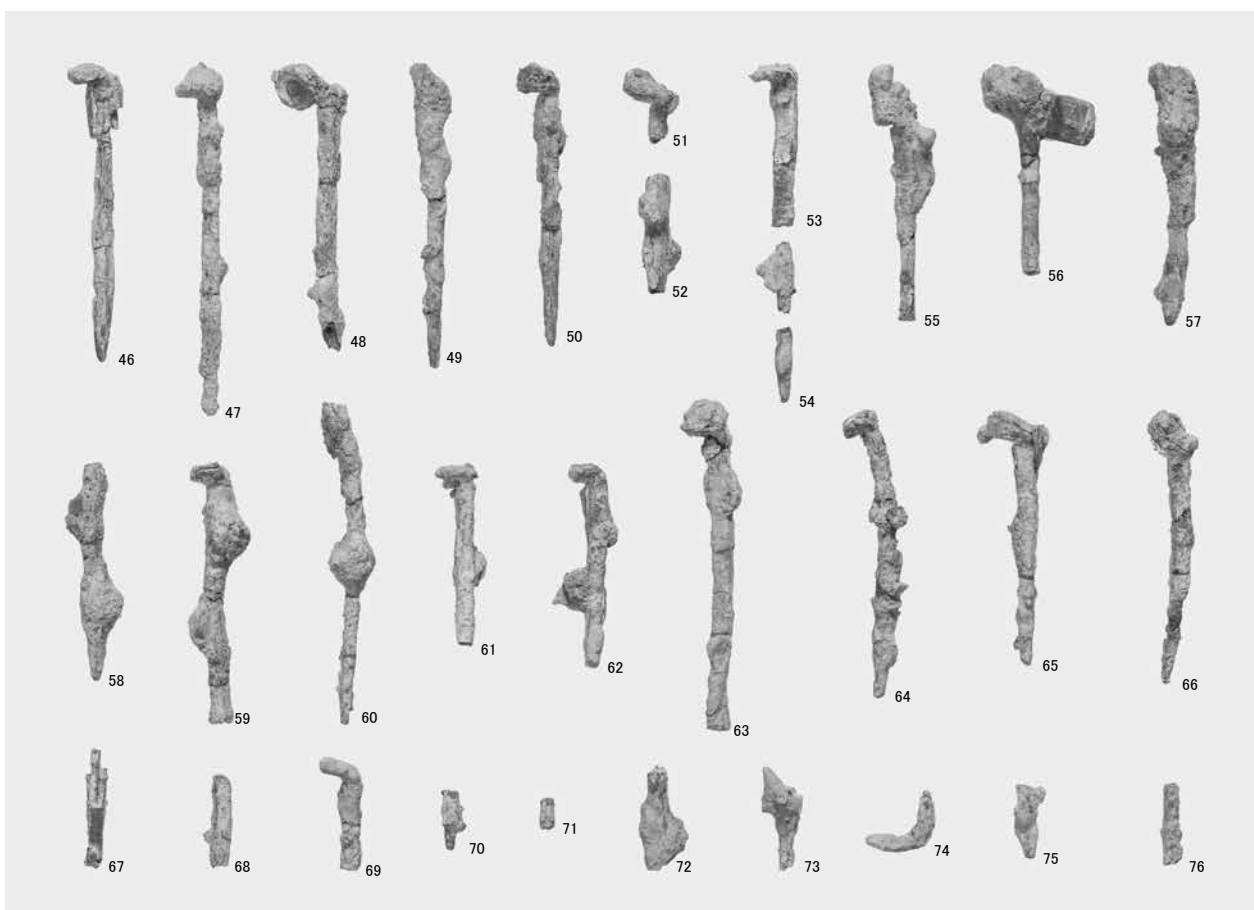
6. 6土坑 断面〔北西から〕
8. 6土坑 被熱範囲〔北から〕

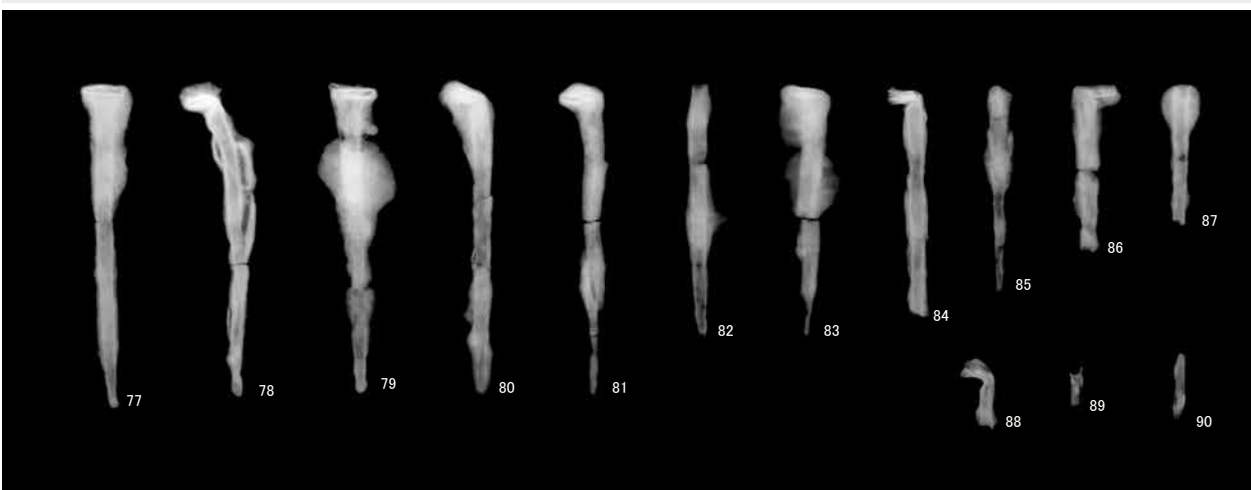
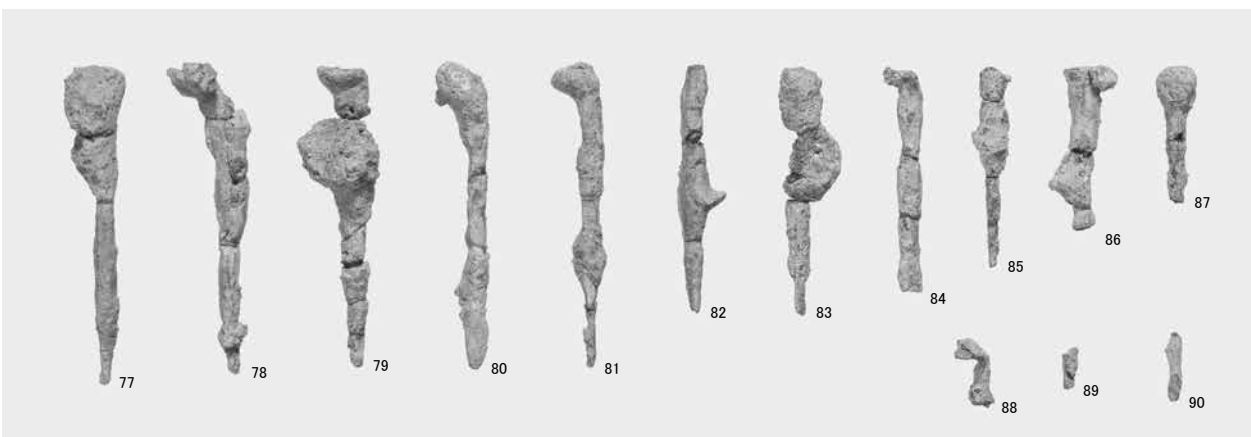


1. 3号墳 奥壁側



2. 3号墳 開口部側





1. 4号墳 開口部側



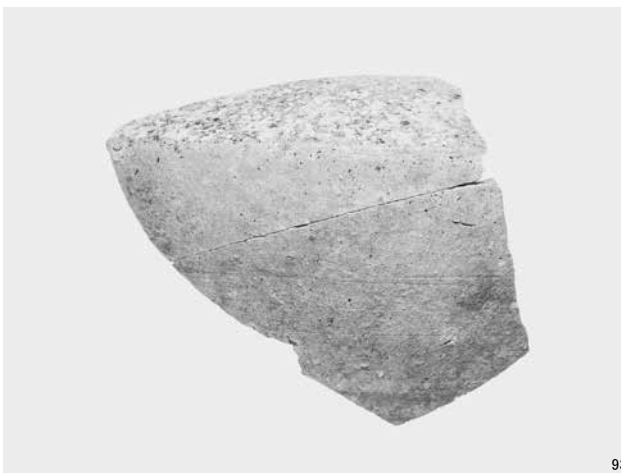
45



91



92



93

報告書抄録

ふりがな	なりあいさんごうふん・なりあいよんごうふん						
書名	成合3号墳・成合4号墳						
副書名	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター 調査報告書						
シリーズ番号	第319集						
編著者名	田中秀弥(編)、後藤信義、小倉徹也						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL 072-299-8791						
発行年月日	2022年8月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号				
こんりゅうじ きゅうけいだいあと 金龍寺 旧境内跡	おおさかふたかつきし 大阪府高槻市 なりあい ちない 成合 地内	27027	141	北緯 31° 52' 20" 東経 135° 37' 50"	令和3年9月1日 ～ 令和4年1月31日	6,003 m ²	新名神 高速道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
金龍寺 旧境内跡	古墳 墓 生産	古墳時代 終末期 古代	古墳2基(横穴式石室) 土坑		須恵器・鉄釘・金属滓・ 鍛造薄片	横穴式石室を埋葬施設と する古墳2基と鍛冶関連 の土坑1基、火葬墓の可 能性のある土坑3基を確 認	
要 約	<p>成合3号墳・成合4号墳は、金龍寺旧境内跡において新規に発見された横穴式石室を埋葬施設とする終末期の古墳である。3号墳は、墳丘の構築方法が分かる好例である。4号墳は、ほとんど墳丘をもたず、基盤層を削り出して墳丘を構築していた。埋葬施設からは、木棺に使われた鉄釘のほか、4号墳では7世紀後半の須恵器が出土した。築造時期は、3号墳から時期を特定できる遺物が出土していないが、時期の分かる4号墳と比較して丁寧な造りなため、4号墳より古いものと推定される。この2基の古墳は、立地条件や墳形から古墳群を形成するものと考えられる。</p> <p>調査地の周辺には、すでに調査された成合1号墳のほか、調査地外に成合2号墳が存在する。1号墳は、6世紀後半に築造された円墳である点や立地条件が3・4号墳とは異なっており、本古墳群を構成するかは不明である。2号墳は、古墳であった場合、墳形と立地条件が3・4号墳と同じで、本古墳群を構成する可能性がある。</p> <p>この他に、周辺の調査でも確認されている焼土坑を4基検出した。うち1基は、金属滓などが出土し、鍛冶関連のものと思われるが時期は不明である。他の3基に関しては、周辺の調査で確認されている古代の火葬墓関連の遺構である可能性がある。</p> <p>今回の調査では、古墳時代終末期から古代にかけての遺構・遺物を検出した。これらの成果は、高槻市・嶋上郡域の歴史を知る上で重要な成果となった。</p>						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第319集

成合3号墳・成合4号墳

—高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日 / 2022年8月31日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 / 株式会社 近畿印刷センター
大阪府柏原市本郷5丁目6番25号